中央公論

第二十年第七號

要目

THE CENTRAL REVIEW

（明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可）
（毎月一回一日發行明治卅八年七月一日）

中央公論

本號目次

口繪の筆者

此書を描いたのは、G. F. Bigot と云つて、明治二十年頃、横濱に來て頻りに日本の風俗を寫し、自分獨りで TOBAE といふスケッチ雜誌を出して居た佛蘭西人てす、其書くところは重に諷刺畫てあつて、其觀察の奇警なる、往々人をして驚歎せしむものがあるといふ。

こゝに揭げた畫も、日本の女子を諷したもので、之を現今の生意氣な女學生が、書物に中毒したのだと當て篏めても面白い、しかし流石は外國人だけあつて、日本の所謂寢室、夜着蒲團などを見た處は旨いが、お醫者樣が左り前に衣物を着たところは滑稽てある。

近年日本でもポンチ畫を稽古する人が多くなつたやうであるが、まだ滑稽の輕妙、諷刺の深刻なものは見られない、ビゴ氏の筆も未だその當時妙手とは云はれなかつたが、而も今日でも日本ではこれだけの滑稽畫を書く人はない。此人今は佛蘭西にあつて、中々有名な諷刺畫家となつて居るさうてす。



佛人ビゴ氏の日本諷刺書

第貳年第七卷 七月五日發行

娯樂 園藝界 實用

實價一冊三十錢郵稅一錢



野口米次郎著

英米の十三年

實價金八拾錢 郵稅金八錢

本書は野口米次郎氏が曾て北米より英京に遊びたる前後十三年間に於ける見聞の記錄なり、其英文と言はず邦文といはず苟も氏が詩眼に映じ才筆に飾られたる是れに網羅せずといふ事なし、讀者試にこれを繙く身は縹々羽化の客と化し歐米の境に入るの想ひあらん、

野口米次郎著

歸朝の記

實價四十錢 郵稅四錢

▲春陽堂發行圖書目錄 小賣部宛往復葉書にて御申越次第送呈す▼

眞砂座新狂言

故尾崎紅葉著 小栗風葉脚色

脚本 金色夜叉

實價卅錢 郵稅四錢

坎坷なる貫一が運命を解せんと欲する者、多恨なるお宮の生涯を知らんと思ふ者、須らく此の『脚本金色夜叉』を讀め、紅葉山人生前の腹案に據つて、山人の高弟風葉子が『金色夜叉』の結尾を全うせしもの、然かも文壇の絕品たる紅葉山人が小說の對話は風葉子が作劇の技術と相待つて妙を極む

中央公論



第二十年
第七號

媾和に對する吾人の主張

米國大統領は世界文明のため人道のため、戰爭の慘禍を默視すること能はずとして、日露兩國に媾和を勸告し、日本政府は之に對して東洋の平和を確實に保障し得べき條件の下に於て媾和すべき旨明答したり、大統領の勸告が公然の通牒として日本政府に送られたるは六月九日にして、而して日本政府の之に答へたるは翌十日なり。

露國政府は其の十二日を以て大統領の勸告に從ふこと、而して日露兩全權の談判地を巴里とすることを希望し、並びに巴里駐剳公使ネリドフ氏を其の全權と爲すべきことを回答し、即日大統領より我が華盛頓駐剳公使高平氏に口頭を以て正式に告知せられたりといふ、但し十二日以前(多分十日か)露國は已れより媾和を求むるの意無きも、米國大統領の好意默止しがたきを以て、日本の媾和條件を知るに於ては大統領の勸告に應ずべしと答へ、大統領ルーズヴェルト氏は此の答文の妥當を缺けるを以て露國政府の反省を促かし、獨逸皇帝また露國皇帝に剴切なる勸告を與へたりと傳へらる、然らば則ち十二日の露國政府の答辯は、實に斯の如き曲折を經たるものならん乎

如上の事實に加ふるに、露國新聞は倨傲なる論調を以て之を論評し、且つ日本の平和を欲すること露國よりも一層大なりといひ。滿州軍總司令官リネウキッチ將軍其の他の將官も多く非媾和說を主張すといへり果して然らば露國に媾和の誠意ありや否や實に疑ふ

べし、然れども倨傲尊大を以て國の威信を保つものと做し、權謀術數を以て外交の能事と做すは愚かなる露國の特色也、彼等斯の如く傲語し大言するも、事實は則ち枉ぐ可らず、彼等の海軍は、日本海の海戰に大敗して其の第二第三艦隊全滅し、而して其の第一艦隊は旅順口陷落と共に先に滅亡して、今や露の本國幾んど無海軍國に齊しきのみならず、其の陸軍は連戰連敗して既に旅順、遼陽、奉天を失ひ、總司令官クロパトキン將軍其の職を去り、殘餘の敗兵僅かにリネウヰッチ將軍に統率せられて、今や吉林、長春の線に據るも、恃む所は唯だ單線の西伯利亞鐵道に由て本國より供給を受くるに過ぎず、海上權全く日本の有に歸して、浦鹽斯德その輸入を杜絕せられ、軍器糧食一に本國より仰ぐの外なく、本國に於ても亦民心漸く離叛せんとして動員令をすら行ふこと能はず、到底勝誇りたる日本の大軍に當るに足らざること明白にして、哈爾賓の失はれ、浦鹽斯德の奪はるゝ、唯だ時期の問題のみ、露人如何に頑迷なるも、如何ぞ其の覩易き事實に迷はんや、則ち其の媾和を切望する論無きのみ。但し東洋の小國日本に降伏するは、世界の強大國たる面目に拘はり、露國政府、否、貴族大官等の威信地に墜ちて、現政體幾んど維持す可らず、換言すれば貴族大官等永く今日の榮華と暴横とを恣にし得べからざるが故に、乃ち敢て率直に媾和を望むことを自白せざるのみ

故に露國政府が媾和の誠意無きが如くに視られ、其の將軍、其の新聞紙が媾和を欲せざるが如くにいふは例の恫喝のみ、浮誇のみ、斷じて其の志に非ず、彼等は猶ほ覺めざりし支那の如し、恫喝倨傲を以て終に其の國を亡ほすもの也

吾人は十分に此の事情を看破す、故に米國大統領の勸告に應じて、敢て誠意を披きて媾和の交涉を開始すべし、我れ斯の如くにするも、露國頑迷にして應ぜざらん乎、我れは世界の文明のため平和のため、更らに進んで戰ひを繼續せざる可らず、少くも哈爾賓を取り、浦鹽斯德を占領して、露國が遂に餘儀なく降伏し來るか、若くは其の滅亡するを待たざる可らず、我には和

戰兩樣の決心あり、準備あり、實力あり然れども媾和條件として我れの要求する所は決して過大なる可らず、我が要求過大なるか爲めに媾和不成立に歸するが如きあらば、我が國が謙讓に由て贏得たる列國の同情は忽ち我を去て彼に就かん、抑も開戰當初より列國の同情靡然として我に歸嚮し、爲めに至大の便益を得たる所以のものは、露國が倨傲尊大を以て他を凌辱するに反して、我れ自制抑遜苟くも禮法を逸せざりしのみならず、人情自から强者大者を憎みて弱者小者を憐れむにも出る。今や彼れ連戰連敗の結果、却つて弱者小者となれり、彼れ苟くも倨傲尊大の風を一洗せば、世界の同情自から彼れに歸するも知る可らず、此の時に方つて我れ勝者の地位を恃みて過大の要求を爲さん乎。列國の同情豈我を去ること無きを保せんや

　列國の同情の如き多く顧慮するに足らずといふこと勿れ、我れは少くも英米兩國の同情を繫持せざる可ら、夫れ我れ戰爭を繼續して必らず哈爾賓と鹽浦斯德とを占領すべしとせん乎。軍事行動は從來に比して一層大規模ならざる可らず、而して其の軍資は少くも尙ほ七八億圓を要すべし、此の七八億を擧て悉皆内國債と爲し得るや否や、少くも其の一半を英米市場に募集するの要なきや否や、此の點を省慮せば、英米の同情を失ふの甚だしく不利なる、殆んど言はずして明かならん、其の同情を失へば、假令外債を募集すること全く不可能ならずとするも、甚だしく不利なる條件に從はざるを得ざれば也

　或は又今日過大の要求を以て露國を抑壓し、之をして再び起つこと能はざらしむるに非ずんば、東洋の平和永く維持す可らずと做す乎、然れども思へ、我が國現在の武備を以てして、假令バイカル以東を我が領とするも、能く露國の復讐を防止し得るや否や、彼れは既に第二第三艦隊を來東せしめたるに非ずや、彼れ若しバイカル湖まで複線の二三鐵道を造築せば、而して七八十万噸の海軍を建造せば、復讐の事何ぞ甚だ難からんや。故に我れは更らに出來得る丈けの武備を充

せざる可らず、成るべく露國を孤立せしめ我れは乃ち聯合の力を以て常に之に勝つの地位に立つを要す、上下努力して其の富を積み力を蓄へて以て自から衞るべし。單に媾和の成果のみに由て枕を高くして安眠すべしと做すは惰者のみ、而して過大の要求を爲すに非ずんば平和を得がたしとするは、露國を恐怖する怯人のみ

且つ正義の倘ほ常に勝利者たることは忘る可らず、露國が人天の憤りを招きて終に今日の敗衂を見るに至りしは、正義を蹂躙して他の國土を奪略し、貪慾横恣到らざる處なかりしが故ならずや、今乃ち咎めて而して之に傚ふ、實に悚然たらざるを得ず

正直を以て最善の途とすること、單に個人處世の法のみならず、メッテルニッヒを外交家の雄とすること既に陳腐に過ぐ、ビスマルク往々權略を用ゐたるも亦率直人に軼ぎたるものありき、今の外交は則ち其の視界廣くして而して手段百端なるも、大要は率直に正義を主持するに在り、權謀術數を以て外交の能事と解せる露國は、已に一昨年來昨春までに於て悉く失敗したるに非ずや、故に吾人は望む、媾和條件として我が要求すべき處は、何人と雖も至當とし正義とするものを率直に主張するに在ることを

然れども吾人を以て戰果を無にするものと誤解する勿れ、吾人は我が戰果を十分に收獲するがため、相當の賠償を得んことを主張す、少くも我が損害を賠償し、且つ當然平和を擔保すべき償金、土地、利權を得んことを主張す、但だ吾人は相當なる理由なき過大の要求を排するのみ、過大の要求を主張して我が國家を誤り、併せて國民の指導を謬まらんとす輕率者流を非とするのみ

若し夫れ我が至當穩正なる要求容れられざらん乎、露國は未だ媾和の誠意なきもの也、未だ世界の文明のため人道のため戰爭の慘禍を絕つの仁義なきもの也、世界悉く之を憎まん、而して我れ戰爭を繼續する、誰か之を非とせんや、英米諸國は益す我に好意を表して其の戰資を供給せん、我れ則ち進んで浦鹽斯德を拔き、

哈爾賓を取りて更らに益々戰果を十二分に收得すべきのみ、吾人は再言す、我には和戰兩樣の決心あり、準備あり、實力ありと、之ありて而して誠を抜き、世界の文明人道のためにす、吾人の志は斯の如し、我が日本帝國の志は實に斯の如し。（六月二十一日稿）

日露海軍の消長

日本海軍の精妙なる戰略と勇敢なる戰術とは、驚異すべき効果を收め得たり、事實に於て幾んど露國海軍を滅亡し、露國をして一種の無海軍國たらしめ、海上に於ける權威を全然失墜せしめたれば也

日本海海戰は、日露海軍の勝敗を全然決定したるものにして、今回の戰爭に於ては最早海戰らしき海戰を看ざるべし、强ひて之ありと豫想すれば、浦鹽斯德に竄入せる三四五六の艦艇が時々潜出して、時々驅逐せらるゝに止まるべし

茲に於て吾人は兩國海戰の効果を擧示するの甚だ無要ならざるを信ず、一は此の如く事實を概括して擧示したる新聞紙未だ有らず、一は此の事實が能く兩國海軍の消長を明かにするに止まらず、日本海軍の効果を語るに於て實に無上の雄辯なりと信ずれば也

吾人は便宜上旅順口陷落までを第一期とし日本海々戰を以て第二期とすべし

第一期（上）　露國海軍の損害

露國極東總督アレキシーフ將軍は。戰はずして日本を慴伏せしめんと欲し、バルチック艦隊中より精を拔き鋭を撰び、將士にはまた露國海軍の精華を擢んて、所謂太平洋第一艦隊として之を旅順口に集中したり、其の實力遙かに英國極東艦隊を凌ぎ、殆んど日本海軍を壓せんとして威容の堂々たる、東洋の海風を披靡せしむる趣ありき、然れども其の末路は實に人をして慘鼻せしむ

（一）轟沈擊沈されしもの

戰鬪艦ペトロポウロフスク（旅順口外）　一〇、九六〇

裝甲巡洋艦リューリク（蔚山沖）　一〇、九三六

巡洋艦ワリヤーグ（仁川港外）　六、五〇〇
砲艦コレーツ（仝）　一、二一三
驅逐艦ステレグスチイ（旅順口外）　二四〇
仝　ストラシヌイ（仝）　二四〇
仝　リウテナントブラコフ（鮮生角）　二八〇
仝　ストロイヌイ（旅順口外）　二四〇
計八隻　三万〇六百〇九噸

（二）戰敗の結果爆破せしもの

戰鬪艦セワストポリ（旅順口外）　一〇、九六〇噸
巡洋艦ノーヴイク（コルサコフ港）　三、〇八〇
砲艦オツワジヌイ（旅順口外）　一、四九二
仝　ラスボンツク（仝）　一、三三四
驅逐艦ブルーヌイ（山東角）　三五〇
仝　ウニマーテリヌイ（董家口）　三一八
仝　ウヌシーテリヌイ（鳩灣）　三一八
仝　ラストロプヌイ（芝罘）　二四〇
計八隻　一万八千〇九十二噸

（三）戰敗の結果中立港にて武裝解除のもの

戰鬪艦ツエザレウイチ（膠州灣）　一二、九一二噸
巡洋艦アスコリド（上海）　五、九〇五
仝ダイアナ（柴棍）　六、七三一
假裝巡洋艦レナ（桑港）　一〇、五七五
砲艦マンジユール（上海）　一、二二四
驅逐艦グロゾヴオイ（仝）　三一二
仝ベスホシチヤードヌイ（膠州灣）　三五〇
仝ベストノーシヌイ（仝）　三二〇
仝ベスシウムヌイ（仝）　三五〇
仝ボイギー（仝）　三五〇
仝スメルーヌイ（仝）　二四〇
仝ウラストヌイ（芝罘）　三二〇
仝セージーツイ（仝）　二四〇
仝スタートヌイ（仝）　二四〇
計十四隻　四万〇〇六十九噸

（四）陸上より砲擊せられて旅順口内に沈沒せるもの

戰鬪艦ペレスウエット　一二、六七四噸
仝ポピエダ　一二、六七四
仝ポルターワ　一〇、九六〇
仝レトウヰザン　一二、九〇二
裂甲巡洋艦バヤーン　七、七二六
巡洋艦パルラダ　六、七三一
假裝巡洋艦マンガラ　一二、〇五〇
砲艦ヂギツト　一、三二〇
仝ザビヤカ　一、二三六
仝ブザトニツク　四〇〇
仝ガイダマツク　四〇〇
仝ギリヤーク　九六三
仝ボーブル　九五〇
驅逐艦ヴエヴオイ　三五〇

仝アチーテリヌイ　三五〇
仝ラシヤシチー　二四〇
仝シーリヌイ　二四〇
仝ストロシエヴオイ　二四〇
計十八隻　八万二千四百〇六噸

(五)捕獲されたるもの

驅逐艦レシーテリヌイ　二四〇噸
計一隻　二百四十噸

(六)自から爆破沈没せるもの

巡洋艦ボヤリン（大連灣）　三、二〇七噸
假裝巡洋艦エンヤイ(仝)　二、六五三
砲艦グレミヤシチー（旅順口外）　一、四九二
仝シブチー（營口）　九五〇
驅逐艦ウイノスリヌイ（老鐵山沖）　三一八
計五隻　八千六百二十噸

右の内砲艦シブチーは營口の上流遼河に於て自から湥沈したるも他の四隻は皆誤つて其の布設水雷に觸れしもの也

右總計五十四隻　十八万〇〇三十六噸

右の内浦鹽斯德に在りし巡洋艦ボカツエリ(六、六七五噸)は港外に於て水雷に罹り大破したり、修繕中といひ或は修繕の見込なしといふ、後説頗ぶる信ずべきに似たり、果して然らば露國の失へるものは

總計五十五隻　十八万六千七百十一噸

となるべし、故に第一艦隊中、殘存するは左の二艦のみ

浦鹽斯德に殘存するもの

裝甲巡洋艦ロシア　一二、一九五噸
仝グロモボイ　一二、三五九
計二隻　二万四千五百五十四噸

此の二艦は去年八月十四日蔚山沖の海戰に於て大なる損害を被むりしが爾來其の一隻は沈没したりとも傳へられ、存否極めて不確實のもの也

第一太平洋艦隊の末路も亦慘なる哉

第一期（下）日本海軍損害

五十餘隻　十八万餘噸の敵艦を斃すがため日本艦艇の犧牲に供せられしものは左の如し

戰闘艦初瀨　一五、二四〇噸
仝八島　一二、五一七
巡洋艦吉野　四、二二五
仝高砂　四、二二七
仝宮古　一、八〇〇
砲艦平遠　二、一八五
仝濟遠　二、四八一

全海門	一、三六七
全大島	六四〇
全愛宕	六二二
驅逐艦速鳥	三八一
全曉	三六四
水雷艇四十八號	八一
全四十二號	一一〇
全五十一號	五三
全五十三號	五三
計十六隻	四万六千三百四十六噸

初瀨は朝日三笠に亞ぐの巨艦にして、八島は富士に亞ぐ、且つ吉野、高砂の如き精鋭にして特に快速力のものを喪へるは痛むべき也。而して是れ皆機械水雷に觸れたる也、他の巡洋艦また又然りとす

第二期　日本海海戰

太平洋艦隊第一艦隊の滅亡せんとするや、露國は更らに第二艦隊第三艦隊を組織し、バルチック艦隊中苟くも遠航に耐ゆるものは、其の新古大小を問はず、幾んど擧げて東航せしめたり、彼等は多くの運送船を率ひ幾多の物資を伴ひて太西洋印度洋の險艱を凌ぎ、辛ふじて太平洋に來り、日本海に入らんとするや、五月二十七八兩日を以て亦悉く滅亡したり、試みに其の末路を表示せん

(一)撃沈されしもの

戰鬪艦クニヤージ、スワロフ	一三、五一六噸
全イムペラトール、アレキサンドル三世	一三、五一六
全ボロヂノ	一三、五一六
全オスラビア	一二、六七四
全シソイヴエリキー	一〇、四〇〇
全ナヴアリン	一〇、二〇六
裝甲巡洋艦アドミラル、ナヒモフ	八、五二四
全ドミトリ、ドンスコイ	六、二〇〇
巡洋艦ウラヂミル、モノマフ	五、五九三
全スウエトラーナ	三、七二七
裝甲海防艦ウシヤーコフ	四、一二六
假裝巡洋艦ウラール	八、二七八
驅逐艦ブイヌイ	三五〇
全ブイストルイ	三五〇
全グロームキー	三五〇
全ベスウプレーチユヌイ(?)	三五〇
特務船カムチヤトカ	七、二〇七
全イルチツシユ	―
全アナスヰイ	―

假裝巡洋艦ルッス	五、三八三
計二十隻	十二万四千二百六十六噸餘

（二）捕獲されしもの

戰鬪艦アリヨール	一三、五一六噸
仝イムペラトール、ニコライ一世	九、五九四
裝甲海防艦ゲネラル、アドミラル、アプラキシン	四、一二六
仝アドミラル、セニヤーヴヰン	四、九六〇
驅逐艦ビエードウイ	三五〇
計五隻	三万二千五百四十六噸

（三）戰敗の結果爆破沈沒せしもの

巡洋艦イヅムルード（ウラヂミル灣）	三、一〇三噸
驅逐艦ブレスチヤースチー	三五〇
計二隻	三千四百五十三噸

（四）戰敗の結果中立港にて武裝解除のもの

巡洋艦マツローラ（米領マニラ）	六、七三一噸
仝オレーグ（仝）	六、六四五
仝ゼムチユーグ（仝）	三、一〇三
驅逐艦ボードルイ（上海）	三五〇
特務艦コレヤ	六、一六三
仝スヴエリー	——
計六隻	二万二千九百九十三噸餘

（五）抑留されしもの

病院船アリヨール	八、一七五
計一隻	八千百七十五噸

アリヨールと同時に病院船カスツロマー（六、八〇〇噸）も抑留されしかど、アーヨールの如く赤十字法規違犯の事跡なきと明瞭して解放せられたり

総計三十四隻　拾九万一千四百十二噸餘

若し特務船イルチッシュ、アナスリイ、スヴエリー三隻の噸數を加算せば少くも二十二万噸には上るべし、此の三隻は大抵六千噸以上のものなること疑ふべからざればなり

日本海に向へる露國艦隊は総計三十八隻にして、右三十四隻の外、四隻は下の如し

（一）浦鹽斯德に逃入せるもの

巡洋艦アルマーズ	三、二八五噸
驅逐艦ブラーヴイ	三五〇
計二隻	三千六百三十五噸

（二）踪跡不明のもの

驅逐艦グローズヌイ	三五〇噸
計一隻	三百五十噸

（三）抑留後解放されしもの

病院船カスツロマー	六、八〇〇噸
計一隻	六千八百噸

外に海戰前即ち五月二十五日上海に入り、海戰後武裝解除と決せし左の六隻あり、是れも計數を漏る可らざるものとす

義勇艦隊汽船ウラヂーミル	一〇、七五〇噸
仝ウローネジ	一〇、七五〇
仝ヤロスラーウリ	八、五五〇
特務船グローニア	|
仝ノテオール	|
仝リウオニア	|
計六隻	三万〇〇五十噸餘

グローニア以外の特務船を六千噸と見做さば、此の總噸數優に五万噸に達す

故に露國が第二期に於て確かに喪へる所の艦艇船は、通じて四十隻二十五万噸を下らずとす

然るに日本の失へるは、僅に左の水雷艇のみ、然り僅々三隻の水雷艇のみ

水雷艇三十四號	八一噸
仝三十五號	八一
仝六十九號	一一〇
計三隻	二百七十二噸

是れ實に奇蹟といはざる可らず、然れども事實は事實也

吾人は更らに顧みて開戰以來日露兩國の喪失せる全數を計算せんと欲す

一、露國の失へるもの 總計 九十五隻	四三〇、〇〇〇噸餘
一、日本の失へるもの 總計十九隻	四六、六一八噸

其の内重もなるものを摘示すれば

露國の失へるもの

戰鬪艦	十五隻	一八〇、九八〇噸
裝甲巡洋艦	四隻	三三、三八二噸
巡洋艦	十一隻	五七、九四六噸
裝甲海防艦	三隻	一三、二一二噸
砲艦	十二隻	一二、九八八噸
驅逐艦	三十三隻	六、九二六噸
計		七十八隻三十万五千四百三十四噸

外に假裝巡洋艦以下十七隻約十万噸あり

日本の失へるもの

戰鬪艦	二隻	二七、七五七噸
巡洋艦	三隻	一〇、二五二噸
砲艦	五隻	七、二九五噸
驅逐艦	二隻	七四五噸
水雷艇	七隻	五六九噸
計	十九隻	四六、六一八噸

而して其提督中世界有數の海戰戰術家たりしマカロフ提督は戰沒し、ウイットゲフト提督亦戰死し、ウフトムスキー提督ウイレン提督、グリゴロウイッチ提督、ロシチンスキー提督は皆先に捕虜となり、今や又司令長官ロジエストヴエンスキー提督とネボカトフ提督とは捕虜となり、フェルケルザム提督は戰死し、唯だインクイスト提督のみ僅かにマニラに逃れたるも、宣誓して同所に在り、日本には則ち一人も將官以上を失ふ所あらず

現在勢力

此の驚異すべき大海戰の後、日露兩國の海軍勢力を比較するは、最も興味あり、且つ最も緊要なりとす

吾人は先づ露國の現有する所の海軍數を計算すべし

（一）浦鹽斯德に殘存するもの

裝甲巡洋艦ロシア	一二、一九五噸
仝グロモボイ	一二、三五九
巡洋艦アルマーズ	三、二八五
計三隻	二万七千八百三十九噸

外に驅逐艦數隻と潜艇水雷艇あり、ボカッエールは算入せず

（二）バルチック海に在るもの

戰鬪艦イムペラトール、アレキサンドル二世	九、九〇〇噸
仝スラヷ	一三、五一六
巡洋艦アドミラル、コルニロフ	五、八六三
仝パミアト、アゾーヴア	六、七七四
砲艦アブレーク	六七五
仝ヴオエウオーク	四一五
仝ボザードニク	三、九三五
計七隻	四万一千〇七十八噸

外に驅逐艦ボスルユシーヌイ（二四〇噸）レチーヴイー（二四〇噸）ボラヂヤユースチイ（二二〇噸）ボドヴキージヌイ（二二〇噸）以下洋上の航海に耐えざる多數の小砲艦水雷艇等あれど擧示するに足らず

右の浦鹽斯德並びにバルチック海にあるものは、尙ほ出動の自由を有するものにして、日本に向て對敵行爲を取るを全く不可能ならずとす、然れども其の勢力は十隻七万噸未滿にして、外に十隻內外の驅逐艦あるに過ぎず、露國海軍の現狀も亦憐むべき哉

但し露國には黑海艦隊あり、黑海以外に出づること能はざるものにして、巡洋艦以上の勢力は左表の如し

戰闘艦チエスマ	一一、三九六噸
仝シナプ	一一、二三〇
仝エカテリナニヒ二世	一一、〇四八
仝ケオルキー、ポベドノスツエフ	一一、〇三二
仝ロスチスロフ	八、八八〇
仝デヴイナアツチ、アポストロフ	八、七〇九
仝トリ、スヴイトチエリヤ	一三、三一八
仝クニヤージ、ポテムキン、タヴリチエスキー	一二、五八二
巡洋艦カグール	六、六四五
仝チシアコフ	六、六七五
水雷砲艦カピテン、サーケン	七四一
仝カザルスキー	四〇〇
仝グリテン	四〇〇
計十三隻	十万〇三千〇五十六噸

外に驅逐艦十隻三千〇六十噸あり、又た右戰闘艦は總て淺吃水にして遠洋航海に不適當なる構造なれど防禦力は強大也

日本海軍は五月二十八日を以て捕獲したる五隻を即時改名して艦籍に編入したるを以て今や實に左の勢力を有す

(一)戰闘艦

三笠	一五、三六二噸
朝日	一五、四四三
敷島	一五、〇八八
石見(前名アリヨール)	一三、五一六
富士	一二、六四九
壹岐(前名ニコライ一世)	九、五九四
計六隻	八万一千六百五十二噸

(二)裝甲巡洋艦

出雲	九、九〇六噸
磐手	九、九〇六
常磐	九、八五五
淺間	九、八五五
八雲	九、八〇〇
吾妻	九、四五六
日進	七、七〇〇
春日	七、七〇〇
計八隻	七万四千百七十八噸

(三)一等巡洋艦

笠置	四、九七八噸
千歳	四、八三六
新高	三、四二〇
對馬	三、四二〇
音羽	二、九〇〇
計五隻	二万〇五百五十四噸

(四)巡洋艦

嚴島	四、二七八噸

松島	四、二七八
橋立	四、二七八
浪速	三、七〇九
高千穂	三、七〇九
秋津洲	三、一七二
和泉	二、九六七
明石	二、八〇〇
須磨	二、七〇〇
千代田	二、四三九
計拾隻	三万四千三百三十噸

(五)報知艦

八重山	一、六〇九噸
千早	一、二五〇
龍田	八六四
計三隻	三千七百二十三噸

(六)裝甲海防艦

鎭遠	七、三三五噸
扶桑	三、七七七
沖ノ島（前名アプラキシン）	四、一二六
見島（前名セニヤーヴヰン）	四、九六〇
計四隻	二万〇百九十八噸

(七)砲艦

金剛	二、二八四噸
比叡	二、二八四
高雄	一、七七八
葛城	一、五〇二
大和	一、五〇二
武藏	一、五〇二
天龍	一、五四七
筑紫	一、三七二
摩耶	六二二
鳥海	六二二
赤城	六二二
磐城	六六七
宇治	六四〇
計十三隻	一万六千九百五十四噸

總計　五十貳隻貳拾五万一千八百八十九噸

外に百餘隻の驅逐艦水雷艇あり

吾人は玆に附記す、近き將來に於て我れは戰鬪艦香取、鹿島及び一等裝甲巡洋艦の竣工を見るべく、また仁川に於て引揚中の巡洋艦ワリヤーグ、並びに旅順口より引揚げ得る見込ある戰鬪艦六隻等をも加へ得べきが故に、更らに約十万噸の增加を見るべし、然れども其の總數尙ほ四十万噸に達せず、乃ち知る海軍擴張の事また戰後の經營中の大問題たるべきを（六月二十日稿）

高島體操學校長に與へて現時の教育を論ずる書

藤井健治郎稿

高島平三郎兄足下。

僕曾て雜誌「教育學術界」に於いて、中等教育に於ける體操科の旨趣を論じて、教育上、殊に訓育上非常に緊要なるものである、然るに實際の狀況如何と顧みれば、其旨趣の殆んど大半以上は失はれて居るのみならず、教育家の念頭に寧ろ閑却せられて居るかの觀がある。そは實に邦家の爲め、教育の爲め、長大息すべき事件であると述べたことあるは、君の既に知られて居る處なりや否や。又僕は此弊の原因を以て、一は體操教師に適材のない爲めと、一は教育界一般が、未た充分體操科の旨趣を認めないことに歸したのは、君果して首肯せらるゝや否や。又僕は當時急に良體操教師を得ること難かるべきを以て、一時の應急手段として、學校長又は教頭は、必ず體操科の監督をなすべきことを警告したのは、君果して贊同を表すべきか否や。

然るに歲月匆々流るゝが如く、僕が此論を草してから殆んど六七歲になる。其間世間教育界に多少の反響があつたやうに見え、僕の知て居る二三の學校長から、態々贊成の見を表して呉れたものもあつた。又噂さには東京高等師範學校でも、其後可成修身科と體操科とを聯絡しやうとの方針を執つて居らるゝとかの事である。然れども僕の論旨が、未だ世間多數の贊同を得て居らないやうに觀ゆるのは、僕の實に心外千萬とする處である。

生徒の多數は、依然として體操科を輕蔑して居る。體操教師の位置は、依然として他學科教師の下班に列して居る。體操教師の俸給は、依然として他學科教師の並になつて居らぬ。而して世間教育家の多數も、依然として體操科の重大なる旨趣を認めて居らぬことは、體操教師の取扱方の無雜作なることが、何よりの證據である。斯んな有樣で、訓育上果して幾何程の効果を擧ぐることが出來やうか。何時までもいつまでも、斯んな有樣が持續するといふことは、僕は我が教育界の爲めに痛心すべきことであると思ふのである。さりとも僕の痛心は、僕の間違つた考から不必要の痛心をするのであつて、世間教育家の考が正しいのであらうか。將た又世間教育家の方に、未た誤解が殘つて

居つて、僕の見に執るべき所あるであらうか。幸に君の明斷を請ひたいのである、僕は戰後、否戰後と謂はず戰中でも、我中等教育界に刷新すべき事業がありとせは、此體操科の革新の如きは、實に其急中の急なるもの丶一つであると確信して居るものである。君以て如何となす。

高島平三郎兄足下。

君此時に當り、蹶然起て日本體育會に入り、其事業として體操學校を起し、君自ら之を統攝せらる、深く教育界の時務を知り、篤く邦家の前途を念ふものにあらずんば、寧ぞ斯かる擧をなすを得んや。僕當時私かに君の事業を壯とし、手額邦家の爲めに慶したのであつた。

今次の開戰以來、是迄中等教育家の體操教師の職を占めて居つた、多數の豫後備の下士士官等が召集せられたので、體操教師が遽かに缺乏を告げ、爲めに文部省は一時の權宜として、一週三時間の體操を、當分二時間に減ずることを得との訓令を發するの已むを得ざるに至つた事情は、君の既に聞知せられて居るが如くてある。一時たりとも斯の如く多少の制限を爲さゞるを得ざるは、一面から之を見れば、大に悲しむべきことのやうであるが、又他から見れば是が體操科の革新に取つて、寧ろ好機會であると見ゆるのである。君の統攝せらる丶學校が、斯道の爲めに、大に奮發精勵して、良體操教師をドシ／＼教育界に送り出すべきのは、げに是れ此秋と思ふのである。

高島平三郎兄足下。

僕に忌憚なき語を發するの自由を與へ給へ。有體に白狀すれば、君の學校の從來の卒業生は、世間教育界に於いて、餘り芳はしき評判を得て居らぬやうである。是迄の體操教師と、餘り多く異つて居らぬと評せられて居るやうである。僕私かに君の學校の爲めに之を惜み、又教育界の爲めに私かに歎聲を漏したのである。そは或は一二の卒業生の力が充分でない、或は操行が面白くないものがあつて、延て卒業生全體に累を及ぼしたといふやうな事情もあらう。又是迄は草創の際て、同じ卒業生と謂つても、玉石同架を免れ難い點もあつたらうと察する。是は縱令草創てなくも、私立學校經營上に殆んと免れ難い拙き運命、難點であつて、獨り君の學校を責むるは、無論酷てある。等しく私立學校經營に從事して居る僕は、私かに同情に堪へぬのである。又實際卒業後の世間の待遇に省みて、師範學校、

中學校の卒業生の秀才は、多く君の門に入るを欲せず。孰れかと謂はゞ、將來に餘り多くの望を囑し難い、中以下の者が最も多く君の學校に遊ぶといふ形跡もあつたらうと察する。是れ又君の學校の罪でない。世間教育界の誤解が、其禍根と謂はねばならぬ。然れども既往は咎めずてある。既往のことは幾何繰返しても、畢竟愚痴に過ぎぬ、畢竟無益の駄辯に過ぎぬ。それよりは却て君の學校の將來に向て大に囑望したき點がある。

そは外でもない、年々修身の中等教員檢定試驗に及第せるものや、或は早稻田大學、日本大學等の卒業生にして、修身科の免許狀を有するものやの多數を、君の學校に收容するの工夫をして貰ひたいのである。而して是等の人々は、八ヶ月乃至十ヶ月にして卒業するやうにし、卒業の上は、無試驗檢定の資格を得るやうに其筋と談合の上に、設備して貰ひたいのである。平時にあつて、生兵を練つて、立派な國家の干城に仕立上げるのに、一ヶ年で充分であるとの事である。既に一學科の教員免許狀を有つて居る位のものが、體操科の技術、要領を習得するには、八ヶ月か十ヶ月位あれば充分であると思ふ。是が一面に於いては、良體操教師を得る所以の方法であり、一面に於いて適材を適所に置くの道であると思ふ。檢定試驗の方からいへば、修身科試驗の出願者は、年々約四百人に近い。而して愈々考試に登第する者は、其一割、即ち四十人あるかない位である。此位篩ひ落すからには、愈々及第する人物は、學問、見識、相應のものと謂はねばならぬ。又早稻田大學や、日本大學の卒業生にしても、中學校若しくは師範學校卒業後、約三年半も、各講師が諸方面から敲きつけ、鍛へ錬て、ふるひにふるつて出すのであるから、是れ又中學教員として敢て故障のあるべきものでない。此等の人々を收容して、體操を專修せしめ、體操科の教員とせば、無論理想的の體操教師でないとするも、從來のそれに比すれば、固より數等上にあるものなるべしと謂はねばならぬ。又一方から謂へば、修身科の免許狀を有つて居る者程、就職の口の少いものはないのは、實際の現狀である。それで漸く就職の口を得たるものでも、實際修身を受持つ者は甚だ少數で、唯修身科受驗の際に、其準備に少々習得した國語漢文を受持つとか、又は英語を受持つとかいふは、普通であつて。甚しきは唯々一書記を勤むるとかいふ者さへある。是れ適材を適處に置く所以でな

く、本人は不得意の學科を受持されて迷惑であり、學校では學科の進歩上大に懸念すべきである。斯やうな人達は、寧ろ體操科を擔任して、修身を體操及學校全體の監督、管理の上に實現するの工夫を凝すが、學校の爲めにも、教員本人の爲めにも。寔に至當の方法であると信ずるのである。君以て如何となすか。

僕私かに君が當年の抱負と、企畫とに敬服した。今僕が獻芹の微言、敢て君が無雜作に斥くるなきを信ずると同時に、又併せて文教當路者の一考を煩したいのである。(終)

六月二十日稿

▲前號豫告し置きたる藤井健次郎氏の『ストア學派と日本の武士道』は、其研究頗る精細を加へ、未だ脱稿の運びに到らざるよしにて、遺憾ながら之を次號に廻すの止むを得ざることゝなれり、此段深く讀者諸君に謝す、

戰後改革意見(下)

島田三郎

それであるから社會では國に大難があり危難があつても之を理解する心を何れの所に求めても生じやうがない、其心を生じたのは何であるかと云ふと是は普通教育の周く國民に及んだところの結果としなければならぬ、併ながら唯だ國民たるの資格を備へしむるだけで國民をして情の上に國のことを思ふと云ふ心を起さしむることは出來ない、是は詰り不十分ながら議會を起し又地方議會を起して公けのことは公けの儀式に依つてやらせる、國民が間接に投票に依つて此目的を確定した制度の餘澤であると思ふ、徴兵を缺いても勝つことが出來ない、普通教育を缺いても勝つことが出來ない、並に憲法の制定を缺いても國民が國事に同情を起すことか出來ないのでありますから日本人は形而上の力に依つて戰爭の意味を理解して勝つと云ふことは制度の上に求めて見たら教育の法徴兵の制度並に憲法實施、此三つの重なるものが助けになつたと思ひます、是が勝つ所以であるならば後來戰後の上の改革の箇條として私は此三つの制度を成るべく善き方に改革するの必要と云ふことは其引續きとして起つて來ることである、其引續として國民に滿足を與へるやうな方針に改正を加へる必要があると斯う思ひますのが私が戰後の改正に依つて此三ヶ條を擧げる所以であります、是に付いて私は第一には憲法に附帶する

選擧法

の上に付いて論を立てゝ見たいと思ふ、憲法と共に發せられた選擧法は旣に一回改正を加へられたが、此改正と云ふことが戰後に於いて緊要中の一てあるから之を論じて見たい、選擧法改正に付いては私は從來改正のことは嫌ひてある、詰り運用の妙は一心にありと云ふことは兵法に於て之を言ふべき事柄で又あらゆる事業政治の上にも又然りてあつて、之を運用する人が高尙な心を以て運用しますれば同じ法律であつても相當立派に行けます、法律が非常に良く出來て居つても之を運用する人が低い心を持つて居れば矢張法律の效力を失ふ譯てございますから唯が選擧法だけを改正したからと云つて選擧が立派に往かう奇麗に往かうと云ふことを信じて居らぬがために從來選擧法の改正の論が起る度每に私はそれに向つて同情がなかつた、ところが此箇條て私が曾て考を是に向けて居りましたが、今回是に向つて考を集めたのは他のことでなくして選擧權の擴張てある、直ちに普通選擧にするか一段階を經て普通選擧にするかと云ふことは是は別問題でございまして唯今の衆議院議員の選擧權は年稅十圓の額を納めて居る人に與へて居りますが、之を下ろして五圓にするか三圓にするか或は普通選擧にするかと云ふことは中の箇條の問題でありませうけれども、兎に角選擧權を擴める一段に至つては旣に最早一點の疑ひがなく必要であると思ふて居ります、玆に至るまで私は餘程考へた、曾ては是に向つて私は反對の一人たる考を持つて居りました、決して擴張する必要がないと思ふた時がありましたが、今日は選擧權を擴張する必要があると思ふ、此私が說を變じた履歷を諸君の前に明白に御話をして置かなければならぬ、私の心の變遷を御話したいと思ふ、選擧權を擴張すると云ふのは明治二十三年議會を開くと直ちに起りたのである、其前から唯今では實が變り名が更つて其黨が無くなりましたが、普通選擧法は自由黨の黨議であつた、普通選擧を唱へ或は五圓の選擧權で宜しいと云つて自由黨は唱へて選擧の際に之を選擧人に告げたらしい問題があるために議會が開けると共に選擧權擴張と云ふことが出て來た、其時には政府が絕對反對て、政府は一體議會を二十三年に開くことが進まないのであるか抑々國勢開かざるを得ぬと云ふので開いたのでございますか、是は疑問てありますが、政府は十五圓の納稅者に選擧權

を與ふる選擧法を以て之を何處までも維持しやうと云ふのてあつたから選擧權擴張論者自由黨の黨議を議會へ持出した人とは非常な隔たりがあつて屢々此案が議會の上に現はれまして其時は或は五圓にしたことがあり、十圓と決議したことがありましたが、無論貴族院は大反對て十五圓の現法を据置くと云ふことてあつたから貴族院が之を受取れば相手にせぬて沮却してしまひましたから兩院の問題にならないてしまつた由來ある問題てございます、其後に段々進んで來まして擴張と云ふことが事實の問題に現はれて、さうして十圓と云ふことの論と五圓と云ふことの論とある場合には五圓と云ふことの論が非常に多數であつた、一度は五圓と云ふのが衆議院を通過致しました、此十五圓を一時に下げて五圓とすると云ふことは外國であればなか〳〵の大問題で國民の間に非常なる議論の起るべきことてありますが、其時には議會の中で甚だしき議論のあつたにも拘らず國民は寂として聲が無かつた、是非之を五圓にして貰ひたいとか十圓にして貰ひたいとか、或は保守の議論を民間に立て丶唯今迄の選擧權を維持して貰ひたいとか云ふ議論が國内に起るべき筈てあつたが、一も起らなかつた、唯だ議會だけの議論て終つたゞけてあつた、私は此時斯う思つた、私の全體の考は政治の權力は之を望むところの國民に與へるのが正當なる道理である、望まざるところの者に強いて與へたところが其與へた權力を適當に用ゐると云ふ能力が果して是に副ふや否やと云ふことは疑問である、ミルが代議政體の必要を論じて、之を維持する力のある國民に代議政體を與へよと云ふことて、如何に自由論者と雖も亞弗利加の沙漠の中で代議政體を立てよとは言はぬと言つたと私は記憶して居りますが、我國從來の實際に依りますと棄權するところの者が非常に多いのてあつて、投票が法律上與へた數だけは何時でも集らぬのてある、さうすると十五圓の納稅者に選擧權を與へても未だ十五圓の納稅者が選擧權を用ゆるだけの政治上の熱と政治上の意見を持つて居らない時に更に之を低める必要ありや否や、望む者に與ふべし、政權を惜んで望む者に與へずと云ふのは政治上の罪てある、併ながら望まざる者に強いて與へることは人望を買はんがための一の策略と見えるやうに感ずるのてありますから、斯様な場合に於て選擧權を多く設定すると云ふことは此の如くに重大な問題が實地の政論となつて議會に現はれて國民が是に一の感覺を持たぬと云

ふ有機の時に選舉權を擴めるの必要ありや否やと云ふことを私は非常に疑つて居りましたから、五圓と云ふ案が出ました時に私は一時に十五圓と云ふものを五圓に下ろすよりは寧ろ十圓に引下げて民間の形勢を見ると云ふことが一番穩かなる議論であらうと思つて十圓説を主張した、遂に衆議院は之を五圓に決して貴族院が十圓と復活してさうして唯今は十圓になつて居る、是は他の諸君の方面から見ると極めて守舊の考を持つて居つたことが事實であらうと云ふことに始終考を向けて居りました。

併ながら其後の國民の變遷並に國の形勢を見ますと今日に至つて最早舊見を維持するとが國の利でないと考へるに至つて選舉權の擴張を主として主張することの自白をしなければならぬと思つて居ります、どう云ふ譯かと云ふに、一方には選舉權の狹きがために階級立法の弊を生じて居るのが今日の選舉擴張を主張する所以である、一は國民として選舉に熱心せしめざるは國民其者の罪にあらずして寧ろ政治家の罪であると思ふ、議會が未だ開けざる場合に於て日本の政論は其事果して健全であるや否やと云ふことは疑問でありますけれども極めて熱情があつて何れの政治上の集會でも多數の人が集つて國民の意を表する機會が屢次あつた、又言論文章を以て意見を公表しなければ多くの人の同情を取ることが出來ないと云ふのが顧みて議會の開けざる時の日本の政界の形勢であつたが、日に〳〵政治上の活力は沈退してしまつて今日は政治家と稱へる人が政治上の意見を世の中へ發表する慣習を失つて國民に同情を生ぜよと云ふことを促すのは國民自身の冷却にあらずして政治上の活舞臺に立つて居る人が立憲政治の全體の成功を誤つて居る罪であらうと思ふ、其人が政治の意見を公言することは其人に一身に束縛を受ける、何故ならば後來此の如き釣合で政論壇上に立つとか或は政治の活舞臺に立つと云ふことを公けに告げると云ふことは是は契約の如きものであつて言質を國民に呈するのである、直接には選舉人に言質を呈するのであるが、屢次議會の中で變節をし議論を改めるのに前以て言質を出すのは甚だ不便であつて又束縛を受けるから屢次世の中に誓ひを立ることは政治家がやらぬと云ふのは政治上德義の衰微であると思ふ、是がために國民は寧ろ言論交換として公けの集會の必要を感じないから唯だ形式的に期限が來ると賴みに應じて投票するだけて其人の政治論を信じ其人の節義を信

じ其人の德義を信じて投票をすると云ふ道德上の活力を失つたのは國民自から進まざるにあらずして政治家自から退いた反應であると斷言して差支ない、一般の國民の活動力が盛んになりますれば無論左樣な弊を避けることも出來ますが、イザと云つた時に國民も力を添へ得らるゝ制度が必要であらうと云ふことから段々考へて私は階級立法の弊を破つて選擧權を擴めなければならぬと思ひます、且日本の國民の果して公共心に乏しきや否やと云ふことを試驗して見なければならぬが、吾々は國民に向つて無限の尊敬を拂はなければならぬのは今回の日露の大戰に於て、國民が普通選擧に依つて政權を與へられる與へられないと云ふことよりは寧ろ國民の安危に向つて國の大難を各自に荷ふと云ふ精神を惹起したに至つて日本國民が公共心の乏しいと云ふ判決を下すことが出來ぬ名擧を得たのは私は實に喜ばしきことであると思ふ、即ち日本國民は公共心の盛んなる國民であると云ふことは日露戰爭に依つて遺憾なく發表されたのである、然るに同じ此精神を何故に政治上に發現することが出來ないかと云ふことは何か原因がなければならぬ、イザ有志の人が立つて國民を勵ませば此の如き公共心を振起して諸外國に日本國民は恐るべき敬すべき國民であると言はせるだけの國民でありながら何故に政治上に於て投票の棄權をして政治上の議論に同情を持たぬ國民であるかと云ふと之は他の方面に原因を求めなければならぬ、之を以て國民が公共心なしと云ふことを判決すると云ふのは寧ろ偏頗の見解であらうと私は思ひます、それならば

階級制度

と私が前に言ひましたがどう云ふのが階級制度であるかと云ひますと、私の自論としては成るたけ國民は一時に平等に往かないでも平等に赴かしむる總ての立法を要求するのであつて日本國民の幸福は多數の人が平等なる生活をして何れの邊に至つても生活の上に困難を感じない國民が多かつたならば理想に近い國民である、是は理想であつて直ちに實現することは出來ないけれども、一層の進みを以て是に向つて其間に非常なる懸隔を生ぜしめて窮する者は愈々窮すると云ふことはやりたくない、成るたけ窮する者が少く戶々足り人々定ると云ふ方法に向けて往くと云ふのが立法の目的で、さう云ふ風に稅法を立てゝ他の法律を改めたいと思つて居りますが、今日の場合ではさうでないので

あつて段々租税の現時の方針を見ますと云ふとどうしても此方法で往きましたならば愈々貧しき人の方が多くの負担を受けると云ふ取方であつて取り易いと云ふ唯だ一時の便利のために間接税消費税が起つて來る、此間接税消費税は無論多數の人の頭割に出す税が多い、例へば鹽の税の如きは臺灣の鹽を扱ふ專賣局の人の公言した處に依りますと其事の未だ實地試驗中で內地一般のことは分りませぬが此税の起らんとするに當つて臺灣のことを參考として調べて見ましたが、臺灣の事務官は日本は鹽專賣法を起してそれに依つて取つたらどう云ふ割合になるか、一人前三十錢宛の税を課することになる、それは輕い税だと言つて居ります、それは多くの給料を貰つて居る者は僅か一年一人前三十錢は輕くて意とするに足りますまいが、五人の家族を持つて居ります一家が一年に三五一圓五十錢を是のみに拂ふのは重い税であつて當り前に鹽を買ひましたならばずつと低いのでありますから是は貧民が最も多く負担する税である、それならば金持は錢倍食ふかと云ふと凡そ人間の衞生上必要なる鹽の分量は巨萬の富を持つて居る人も漁戶山家の貧民も鹽の分量は同じことであるが故に此の如き税は巨萬の富を持つて居る人と一日數十錢を受けます勞働者も同じだけの税を拂ふのでありますから所得と實質の間の割合を見ると是は貧民に最も重い税である、是は唯だ私は例として擧げたのでありますから之を以て推すと云ふ譯ではないが、此例確かに當るだらうと思つて居ります、此税に依つて一番ひどく打擊せらるゝのは貧民である、低い階級の人でありますが、此税を取る時にどう云ふ所から反對が出たかと云ふと鹽を商賣とする問屋の方から今迄自分の營業して居る者を政府の方へ移されるのでありますから反對になりましたけれども、一般の鹽を必要とする全體の人々を誰が代表して此反對を唱へるかと云へば惜むべし議會の內外に於て一般の衞生上一般の生活上を根據として總體の利害を代表するところの議論が極めて微弱であつた、極めて少數であつたと云ふことを見たならば今日の一般の利益を代表する政治家が極めて少くて階級を代表する政治家政論家が多いと云ふことが是に依つて分るであらう其他の税に至つても此調子である、私は唯だ鹽の一例を擧げたのでありますが、消費税が屢次增加せらるゝのはさう云ふ理由であつて、是は國民全體の利益であるから總體の爲に是は贊成しなければならぬ、總體の爲に反對しなければな

らぬと云ふ一般の代表の分子が政界に無いのである、是は地主の代理者である、是は釀屋の代表者である、是は何の業の代表者であると云ふことになつて居る、それならば他の方面に於てどう云ふ關係を現はしましたかと云ふと戰の場合に於て餘儀ないことであつて、國民の全體の大利害でありますから焦眉の急には何をか避けんと云ふので成るたけ取り易い所から取ると云ふことに付いても私は餘儀ないことゝ思ふ、併ながら其中に付いて選ぶだけの餘地があつたならば成るたけ階級の上にそれ程の差異のないものを取るのが一番宜からうと思ふ、若し營業税と所得税の上に付いて論を立てゝ見ますならば私は營業税に割合を多くせんよりは寧ろ所得税に割合を多く課けて最も富んで居る人に割合を多く課けるが宜しい、此上に付いても營業税の方が反對が多くて所得税の方が反對が少ないことは何であるかと云へば吾々は所得税を納めぬ者であると言つて議會に運動なる者はない、營業税の方は營業者が運動するから議會の內に反對が多くして所得税には反對が少ない、寧ろ理論で言ひますれば所得税は純益に課するのであつて營業税は資本と其人の智惠と勞力をかけて營業するのだから營業税に重く課けるのは人の働く邪魔を爲するのであつて所得税に重く課けるのは餘地のある人に課けるので私は理論としては所得税の方に反對があるべくして營業税の方に反對なかるべき筈であると思ひましたが、事實は所得税に反對少くして營業税に反對が多いのは營業者の運動を代表するところのクラスを代表する人が議會に多いと云ふことの是が證據であらうと思ひます、相續税に付いても此の如し、相續税に付いて重く感ずるのは富貴の人である、此所得税は一方には多數の日本の內に籍の在る人が國民軍としつ出ると云ふ危急の場合であつて此國民軍として出る危險と勞力を國に献するばかりでない、一番家の中で多く働く人を取られるのであるから家族に向つて財產上非常な租税と見なければなりませぬ、是すらも忌むことの出來ない場合であるならば他の餘地のある者は永久税としては議論も開けることでございませうが、戰時税としては反對の少なかるべきことである、國民を繰出す場合に他の方は餘程議論が鎭まるべきであるのに衆議院に於ては左程でもなかつたが、貴族院に於て相續税に反對が强かつたと云ふことは無論貴族院は全體を代表する集會でない、矢張同族を代表し富貴を代表する議論が一番强いと云ふことが分る、

是は何てある、唯今の選擧法の貴族院は特別の性質てあるから取除けますが、段々進ひと云ふものはクラスレヂスレーションがあるために變化を存するので、兎に角クラスレヂスレーションが積り〳〵てさう云ふ富貴のために壓迫を受けて極めて難儀をする人が割合に多く取られて之を防ぐ政治の議論と云ふものが議會の上に現はれぬと云ふことが國の弊害であると私は思ひますから成るたけ此の如きものを減じたい、之を減じて無に至らしむるならば結構てありますけれども理論は直ちに發現すべからずだから、發現するまては理論に近ける傾きを造らねばならぬと思ひます、其弊害を止めるには一般多數を代表せしむるに近い選擧法を造るより外には此弊害を止めることは出來ない、

私は一箇條として唯今選擧權の擴張を主張するのでございますが、それよりは租税を納めない者に選擧權を與へると云ふといろ〳〵な害が起ると云ふ議論もありました、是は常に外の側から出て來ることてあつて、其事に付いては私は二つの經驗を持つて居ります、新聞紙の發行をしますに證據金を入れないといろ〳〵な新聞雜誌が出て政府が取締に困ると云ふので證據金を廢する時の反對は何時も貴族院である、選擧權を金を持たぬ者に與へられぬと云ふのは貴族院から來るのと貴族院と同臭味の者から來るのでありますが、私の常の考では若しも自由を許さなかつたならば今日露西亞と日本と戰ふことが出來ない、總ての者が戰爭の意義を理解するのは少くとも出版の自由が與つて大に力あると思ふて居ります、守舊の人が初めから口を開かせぬ方が大丈夫であるならば此論理を推詰めて往くと專制政治の方が宜いと云ふことになるから、自由の發議を許すと云ふことで若し害があつたならば之を止めるだけの餘地を蓄へて害があつた時に止めると云ふやうに國民があれを止めたのは尤であると云ふ公平な處置をしたならば、自由の發議何の恐るゝ所あらんと思ふて居ります、然らば金の無い者て淸廉であるか否やと云ふことを考へるとどうてある、貴族院の多額納税者は全く金の標準で出て來る、此多額納税者の十五人の選擧の際に賄賂が行はれると云ふことがあるならば淸きところの人が淸き慣習に育てられたならば金の有無に拘らずして淸く、惡いところの人が惡い慣習に育てられたならば金持愈々汚ないかと云ふことが問題である、決して金の有無を以て選擧權を限る必要がない、若

し金の有無を以て論じたならば全く己れの志願でなくして官命で這入つて往く、自分が軍人になると云ふ者は昔の武士が戰に從事する如く其職分にして其志で往くのでありますけれども、國家の義務として出掛けて居る多數の軍隊の中に金持が多いか少ないか、唯だ金の上で立つて居らぬ自分の力で立つて居る自分の力で稼いで居る人口が多いかと云へば確かに私は徴兵の義務と云ふものはいろ〳〵の特權を持たない教育に付いて利益を失ひ金の上に付いても利益を失ひ朋友の關係に於ても利益を失ひ外國に逃れることが出來ず、學校に逃れることも出來ず金の乏しいと云ふ人が一番多く現役に服するのである、此現役に服して居る人が最も國に不忠義であるかと云へば至る所の戰の報告を見ると實に感服すべきところの犧牲の精神を振つたと私は茲に斷言します、若し大山大將をして露西亞の軍を率ひしめクロパトキンをして日本軍を率ひしめたならば今日の戰は決して今日の結果にはならぬと思ひます、私は今回の戰を以て國民を代表して居るところの吾々の軍事上の代表者の力が根底となつて之を率ゆるに相當なるところの良き士官が之を運用して勝てたと致しますと云ふと全く公共心と云ふものは養ひ方一つにあつて國の氣風一つになつて政治家自から政治家だけの崇高の風を持つて居りますならば一般の國民に金の上から制限する必要はないと思ひます、是等の點から私は戰後の經營の第一箇條として今回こそ選擧權を擴張する時節が到來したと思ひます、

それから徴兵令の改正と云ふことに這入ります、私は

徴兵令

を簡單に平等にするのとも一つ些と年限を短くするのが徴兵令の改正の綱領でございます、全體申しますると日本が若し此大陸と關係が開けませぬ舊日本であると陸兵を置く必要がなかつた、時勢の變化と並に學問の進歩で交通の大路であつた海は各國を隔る屏風で無くなつてしまひました、海峽を隔てた大陸朝鮮は經濟的共通の國となるでございませう、滿洲も又戰役の形勢に依つては日本が世話を燒かなければならぬ義務があり、努めなければならぬ職分がありますのと並に是に附帶した利益を得べき權利がある、是は日本が任じなければならぬ、日本の勢力の及ぶ所最早免るべからざる關係を生じたのでありますからさう致しますと私

は武を好むにあらざるも兵の數は今までの數では滿足することが出來ませぬ、是は唯だ政治家が兵を蓄へることの口實のために平和を維持するために兵は增しても宜いと云ふ簡單なる意味でなくして、形勢が然らしむるなり時勢が然らしむるなりと確信して居ります、從來亞米利加が陸兵を多く蓄へ海軍は粗雜なものに過ぎなかつたのでありましたが、近來に至りましては亞米利加は一般海軍を擴張することに努めて居ります、現在の大統領が此說を主張しましてそれで亞米利加は斯う言つて居ります、亞米利加は別に武を用ゐやうとは思はないけれども此世の中に公平な說を主張する時に其公平な說を他に用ゐさせるだけの實力がなければ公平な說も効力が無いから亞米利加の主義を世の中に擴めて世界と交をする時に歐羅巴に不道理なことがあつたら其不道理の人を抑付けて自分の說に同意させるだけの兵力が入用だから海軍を擴張しなければならぬといふて居ります、誠に尤な議論で、確かに現在のルーズベルドは公平なる說を持つて居ります、是と同じ意味に於て今日の日本に於ては海軍に向つて大に力を入れなければならぬ、又戰後の經營として海軍を整頓することに心を傾けましたならば是と同時に大陸の關係を開いた以上は日本の陸兵もイザ事の有つた時に多數を得るだけの基礎を整へて置かなければ徒らに理論に僻して兵を減すと云ふことは到底行はれぬと思つて居ります、大陸の關係を開いた以上は義務として滿洲朝鮮の平和を維持するために是非日本に任ぜしめなければならぬ、他國に任ぜしむることが出來ぬ、又例へば最も親密なる同盟國の英國が尙更に同盟を繼續して其範圍を擴めやうと云ふ時に日本の陸軍と英國の海軍と共同したならば同地の安寧に枕を高ふして維持することが出來ると言つて居りますから英國が日本の陸軍に重きを置くとすれば日本が此大陸に對するの義務として陸軍をイザと云ふ時に多く集めるの基礎が必要と思ひます、それがためには私は今回戰が止みまして常備軍を著しく增すことが必要か否かは問題であるが、幾らか增さなければならぬと思ひます、支那が自家の兵を以て滿洲の境を維持することがむつかしければ日本が代つて其守りを堅くしてやらなければ百戰して亂を鎭めたことの詮がないので、始めあつて終りがないのである、それには朝鮮なり支那なりに守備軍を置かなければならぬ、守備軍を幾らか增加する必要が起りませう、兎に角國民軍までを召集する時は日本の

資格を維持するだけの實力がなければならぬと云ふと今までの兵をスタンダルドに置くことは出來ない、斯うなると日本國民が必要のために義務のために兵に服することの範圍を是がために擴めることが起つて參りますから餘り國民の迷惑をしないやうにして此必要に應じ双方の間を調和し得る改正が必要であらうと思ひます、それには私は直ちに

二年兵役

を主張したいと思ひます、今までの所で二年兵役説が隨分民間にありましたが、私は同情を持つて居りましたが、兵に精しくないところから之を主張する根據を持つて居らない、然るところ佛蘭西に二年兵役論があり、現時獨逸も二年兵役が實行されたところを見ると矢張大陸國の陸軍に重きを置かねばならぬ國柄で多くの兵を蓄へて置くと同時に多くの兵を長く置くと云ふことは國費が多額になりますのと其兵に服する人の迷惑の度合が多いと云ふところから二年の兵役にして相當の熟練が出來ると云ふ見込が立つて最も兵を有し最も兵に精しき獨逸が二年兵役を實行したのであらうと信じて居る、然るに是と同時に吾々が之を調べるだけの餘地を持たないが、目擊した事實に於ては二年兵役を主張する信仰が以前より固くなつた、それは今回國民軍を召集しましたけれども國民が久しく兵役を離れて居りまして前に熟練した慣習を失つて居る、又國民の第二流に至りますと前に兵營に居らなかつた人で召集された人があります、さう云ふやうな譯で召集された人が極く速かを要する時は三ケ月調練をして戰地に送りますのもあります、六ケ月調練して戰地に送りますのもあります、若し普通の敎育を受けてあたり前の算術を知つてあたり前の文字もあり、あたり前の書も讀めると云ふ人であつたならば私は歩兵科は一年にして相當なる熟練を得ることにむつかしくないと思ひます、人間は敢爲眞摯であれば總てのこと爲し難くないと云ふことが私の信仰であるがために兵も又規則に拘泥するには及ばずして强健であつて爲すべき事務に熟練したならば國を守るに付いて目的を達することが出來ると思ひますから、一年にして相當敎育を爲すことが出來、一年半にして人を敎へることが出來るならば二年の年月を取つたならば平均して十分であらうと思ひますが、今三年兵役より三分の一だけを減して二年兵役にすると云ふことは餘りむつかしいところの議

論にあらずして實は出來べき議論である、若し三年の兵役を二年に減ずることが出來ますならば其人の一生に付いて三年の兵役に時を費すよりは二年で元の籍に復することが出來、農たり商たり其他の總ての事に從事して大なる便利を得ると思ひます、是と同時に

總ての特權

を廢してしまひたいと云ふのが私の議論であります、是は頗る重大な議論で他の方に餘程關係がありますが、私は國家のことは成るべく苦しいことでも善いことでも平等にやるのが一番國の治まりが良くて人心の滿足するのは此處にあると思ひます、詰り富の上にも餘り不平等のないやうにして義務の上にも餘り不平等のないやうにして成るたけ國は國民全體が共同生活の上に維持して外に向つて國の利權を立て内に向つて國民の一致を圖ることが國家として理想に近い考だらうと私は思ひます、それにしまするには今迄の通り兵に取られた者は三年の間非常な不便を受けて免がれた者は全く免がれてしまふと云ふことは理想の國家の一致を圖るには面白からぬことである、餘りに兵の義務が重過るから之を免がれることに智慧を費すことは國民のために面白からぬ思想ではないか、今日に於て日本の人は華族も徴兵年限になれば出て行く、畏多くも皇族の方でも少尉から進んで總て現役に御就きになつてそれから或る場合には少しも他と違はぬ義務に服し、危險に於ては同一の危險を御侵しになることが國の安危と云ふことになりましては今日日本の國民に愉快を與へ滿足を與へて我も戰に赴かなければならぬと云ふ忠義の心を起すのは此平等の主義が或る度合まで行はれて居る結果であらうと思ひます、若し此主義が行はれずして或者が是に服すると云ふことになりましたならば兵に對する觀念に於て一の弊害が起る、昔から階級制度の弊と云ふものは勞役に服する者は賤い者が服する、貴族は勞役に服さないために貴いと云ふことがあるために勞役其ものが賤いと云ふやうな間違つた考が起つた、印度のカストの制度の如き是は弊害の極度に至つたものである、昔は總ての國に於て僧侶と並に總ての政治を執る人が上に居つて農工商と云ふのは下の方に働いてさうして公けの制度に與からぬと云ふことが古き階級制度の結果であつて、今日の支那が此の如く逸するのが貴くして勞するのが賤いと云ふのが經濟の上に付いても病的觀念である、兵役の上に付

いても病的觀念であると思ひますが、不幸にして今日に於て特權多き時代に於て兵其ものは智惠が無く金の無き者が止むを得ずして兵に就くのであると云ふところの此觀念は日本の永遠の榮え永遠の富强のために私は望ましきところの觀念でないと思ひます、例へば敎育の高き人は特權を以て勞に就くを免がれ、金のある者は洋行して海外に學を修めると云ふので兵を免がれ、役人の方に傳手のある者は何ぞ免がれる手續が定つて免がれる、さうすると才智のある人と金のある人學問のある人は勞に就かないと云ふことであると其反對に才智がなく敎育がなく金のない人程一番ひどい所を荷ふと云ふことは是が健全なる思想であるか、一方には兵を大變に尊び軍人を貴しと拜みますけれども根底には才智のなく敎育のなく働きのない金のない人が軍人になるのであると云つたら識者が本統に兵に對して尊敬心が起るかどうか、公平な心を以て見るならば何れも是は病的觀念である、一方では特權など、極めてしまうのは公平でない、一人の特權なしと極めて置くのが必要である、決して兵は避るものでない、イザ戰があつて日本が襲はれた時は年齡が盡きて居つても戰はねばならぬ、國の大事と云ふ時に安危のために犧牲を出さねばならぬと云つたら上下擧つて戰はねばならぬ、其國を守る義務は上下貧富貴賤共に順番に當つたらやれ、やる代りに他の職業を決して妨げぬやうに兵役の年限を短くして、いろ〳〵の箇條に依つて其行が修まり其技が熟したならば規則に拘泥しないで早く兵營から出して職業に就かしめると云ふ親切心が起つて士官も此心を以て是に臨み政治家も此考を以て是に臨み敎育家が學校をして徵兵避難所と爲す感を止めたならば宜からうと考へます、是は單に兵制の上の改革として論ずるにあらずして實は

學問其ものゝ

ために此說を主張する、今日の學問の上に付いてどうしても政府が國費を以て餘り高尙なる學問を國民に授けやうと云ふことをやつたところが數に限りのある間はそれで間に合ひますけれども國民の希望が段々高尙になり國民に平等の觀念が行渡つて多くの人が餘地があるならば其子をして高尙の學問を修めしめやうと云ふことに國民の希望が進んで參りましたならば大抵の人は大學までやりたい、高等な學校までやりたいと云ふので仕舞には中學で終る人數が少ない、小學で終

ると云ふことの多いと云ふことに止つて居ることが出來ない、高等學校と同一なる專門の學校へ入れたいと云ふ希望が續々起つて來るのでありますから今日政府が此國費を以て國民の要求に應ずることが出來ないとすれば後來愈々此要求に應ずることが出來ないのでありますからどうしても私立學校を以て此缺乏を補ふより外に國民に滿足を與へることが出來ない、而して私立學校に此缺乏を補はしめんとするならば私立學校をして眞に品格を備へ眞に比較的立派なものに成立たしめると云ふことの制度を立てなければ到底此要求に應ずることは出來ませぬ、今日の如くにして置きましたならば私立學校が健全なる發達を遂げると云ふことは出來ないのである、それは何であるかと云ふと政府の學校が特權を持つて居るがために種々の便がある、私立學校が此便利を得なければ政府の學校と並立つことが出來ないから此特權を得んと熱中するは是は私立學校として相當な希望であると思ひます、是がために文部省の數人の役人の鼻息を伺はなければ學校が成立たぬと云ふのは教育の打擊であると思ひます、一たび文部省の役人の意に逆らうと學校の特權を取られてしまつたならば其學生は殘らず徵兵に取られる危險があるから他の學校へ移つてしまう、さうすると特權のあるものゝ中に立つて特權のないものが成立てないからどうしても特權を取らなければならぬ、特權を貰ふに付いて公言の自由もない、今日私が演壇で言ふやうなことを學校の先生が言つたら直ちに叱られる、私が此の如き批評をするの自由を持つて居るのは文部省の役人の厄介にならないから出來るが、學校の先生が言つたら叱られるのみならず直ちに特權を取られ學校は倒れる、斯う云ふ譯であるからどうしても教育の獨立がない、教育の獨立がなくては教育を施して人物を造るにあらずして唯職人を造る、天下の人才を養つて日本の幸福を求るは木に緣つて魚を求むるが如し、私はそれを以て決して教育の盛んと云ふことは出來ない、百般の弊害是から來るのであるから私は有爲快濶なる青年を斯樣な不健全な空氣の下に養ひ、後來第二の國民を造るところの人を養はしむることは百千年永續すべき學校でないと確信して居る。これゆゑに一方の學校に特權があり他の學校には特權がないと成立てないから一切特權なしとして、官立學校も特權なし無論私立學校も特權なく、總ての學校皆な特權なく、學校は學校として立たうぢやありませぬかと云ふことが私の青

年の御方に相談して日本全體の氣風を改良するに必要なる箇條だと思ふて居ります、此箇條が無くなってしまへば其代り二年兵役が出來るので、年限は必ず二十歳て取らぬて一番學問の妨げにならぬ時に取るが宜しい、必ず二十歳て取らなければならぬと云ふ意味てない、今日四十近い國民が大陸へ往つて露西亞人と戰つて恐れない所を見れば是から七十八十歳まて公けの事に働く元氣があれば何も二十歳てなければ兵役はいかぬと云ふ規則に拘はるに及ばぬ、一番學問に妨げのない年代になつたならば二年と云ふことであとはぺた押しに特權なしにしてしまうことが宜しい、さうして外國へ往つて唯遊んで居つて金があるから外國へ往つて金を捨てゝ居りさへすれば兵に就かないても濟むと云ふ賤丈夫は社會から排斥してしまうが宜い、私はさう云ふ精神で前に申しました選擧權擴張を以て國民をして政治上の國事を思はしむることをする、二年の兵役にして總ての人が國の艱難に應ずることにする、學問は獨立して俗吏の支配を受けぬ、殊に其敎授と云ふものは獨立の學說を學校で授けることにしましたならば方々に私立學校が起つて其私立學校は相當の人望があり並に委託する人に信用があれば文部省が何と言つても學校がそれに付いて利害を感ぜぬて維持が出來たならばそれて學問の獨立學問の隆盛は是から發達するだらうと思ひます、

此を約めて見ますならば政權の上には國民を成るたけ平等にせんがために選擧權を擴張する、是と同時に代議政體の活動のためには政治家が己れの政治論を公けの場所に於て選擧人に告げる、選擧人は其說を聞かない間は選擧しないと云ふ勢力を手の中に蓄へて置いたならば選擧權を擴張しても決して腐敗は來さぬことてある、金に依つて兵役を免かれると云ふことは餘り露骨の言ひ方てあるが、實は高い敎育を受けしめるにも金がなければ出來ぬ、外國へ旅行させるのも金がなければ出來ぬ、金があれば往けるのである、學校に特權を置いて裏面を窺へば貧富不平等の結果の致すところてあると思ひますから敎育の特權を廢してさうして兵役の年限を減じて迷惑を少くすることと並に敎育を普及させることになりましたならば今日までの不十分な制度ても敎育に基き並に其自由制度の力に依りて露西亞と拮抗して彼を制することが出來たならば戰後に於て此觀念を實際に現はすことが出來ましたならば私は日本百年の爲に世界の强國に決して讓らぬところの基礎を立ることが出來るであらうと思ひます　（完）



本誌に掲載する處の海外新潮に依つて歐米列國の大勢を知らんと欲するもの頗る多きが如し、歐米の大勢を知るは即ち世界の形勢に通ずる也、吾人が之に多大の費用と精力とを傾注するもの、各國語に通ぜざる人をして現世界をより多く熟知せしめんが爲め也、これ蓋し我國現時の急務なりと信ず

日本海海戰の大捷と歐米の論評

○英國

▲タイムス新聞は平和問題につき論じて曰く、今や露國は戰鬪を繼續するの望を全く失ひたるものにして强ひて之を繼續せば益々自國の不利を醸すに止まらんのみ此の如きは理の最も觀易きものなるにも拘はらずツアルスコエセロの行宮に於ては其慮りの未だ玆に出でざるやの觀ある・は露國の爲に誠に惜むべし又大陸新聞中に日本戰勝の結果として黄禍の益々恐るべき事を說く者あるに對し論じて曰く佛獨其他何れの國にありても正當なる戰勝の結果を日本に得せしめざらんと欲して聊かたりとも運動をなすもの〻如きは毫も之なきを信ず苟も斯かる類の運動を爲さんとするものあらんか英國は一切の手段を盡くして飽くまでも之を拒むべきの責ある事は世人の共に知る處なり遼東還附の當時に於けるが如き恐を今日に再びせんとするものあらば假僞の黄禍を唱へて却て眞實の黄禍と爲すの道を開くに至らん斯かる不條理愚策に出づるものあるに於ては無論英國だけは之を峻拒して措かざるべし

▲スタンダード新聞は　ロヂエストウエンスキの行爲の勇敢なりし事及び其國家に忠實なりし事を賞賛したる後今回の大敗は露國に平和を促すの機とならん事を望み且つ曰く今や露は鋭意平和の基礎となすべき條件を考究するに至りたるや疑ふべからず日本の政治家は先づ平和の問題を提供するは露國よりせざるべからずと主張すべし是れ理の當然なるべき所なれども開戰以來日本が常に愼重の態度を取つて苟も平和を失するが如きことなかりし事實に徴すれば其偉功を發したるの今日にありても必ず過度の要求をなすが如き事あらざるべしと而して筆を擱くに臨み日英同盟の事に說き及んで曰く該同盟の世に裨益あることは勿論之を認めざるべからざれども又之をして永久に存せしむる事を努めざるべからず或は英國の該同盟を繼續せんとするを妨げ又英國が該同盟より生ずる一切の責任を負はんとするを阻止するの擧に出でんとするが如きは是れ實に國家を誤るものと云ふべきなり苟も政治家にして國家に對するの責務を知るものは輕々一黨派の利を計らんとして同盟條約の大義に悖るが如きの擧に出でざるべし

自餘の大新聞も亦自由黨の新聞と共に露國に勸告するに利のある處に鑑みて和を請ふべき事を以てせり

○米國

▲華盛頓タイムス曰く、露國の敗衂は文明の凱旋なり迷信に惑溺する者宗教の故を以て人を虐ぐるもの金城鐵壁を破壞せるものなり從て人類自由進歩の最大障害物の崩壞し去れるなり

スラヴ人種とアングロゼルマン種族とは二十世紀中決死の爭鬪をなすべしとは嘗て奈翁の豫言せし所なり此豫言は全然事實となるか否かは知る可からずと雖も今や其一部は既に實行せられたるものと云ふべし何となれば日本國はアングロゼルマン理想の正當なる承繼者にして其發展者なればなり

世界が露國の敗衂を喜ぶ所以のものは他なし世界に於て露國政府の目的と政略とを憎み此の敗衂は以て平和を來すべしと信ずればなり今や平和は必然の勢にして其事實となるべきの時機は大に近づきたりと云ふべし

然れども余輩は此必然の趨勢を見て歡喜すると同時に兩交戰國の勇士と其家族に對し衷心深き同情を表せずんばあらず此の爭鬪に於て徒に人命を損したるは大に世界の悲む所なり而かも世界に此人命損傷の責を以て敢て兩國民衆に嫁せず全く之を貪欲傲慢懦弱の統治者に歸せり



A GLOOMY OUTLOOK.

THE RUSSIAN BEAR—"And they say he is to arbitrate for me. Heaven help me!"—Bartholomew in the Minneapolis *Journal*.

世界は露國民衆に同情を表し其前途に望を囑し尙武勇敢の日本人に對しては其の勇武を稱揚し其策略の巧妙を驚嘆し以て萬歲を唱ふるものなり矮小のデーピット巨大のゴライアスに會しデーピッド果して勝利を得たり

▲紐育サン曰く、日本が露國艦隊を殲滅し以て事實上同國の海軍力を碎破したるは海軍史は勿論、全世界の史乘にて其類例を見ざる偉業なりと云ふも過言にあらず日本の文明世界に對して開國せるは今より僅に五十年前の事にして其泰西文明の典型を採用してより未だ二十五年を出でず而して其稍や見るべきの海軍を有するに至りたるよりは未だ十年の星霜をも經ざるに玆に一躍して世界海軍國の首班に列する事となれり日本は陸上に於て既に世界の優勝國たるの實を舉げたる末、今回の朝鮮海峽に於ける海戰は世界の兵力及び軍旅の分配上に一大變更を來したるものなりと云ふべし今回の海戰に依りて卜知せらるべきが如く日本いよ〳〵露國に勝たんか强國としての日本の地位は駸々として昂上し其進歩發達十年前征淸以後の步趨に劣らざるに於ては今世紀の未だ終らざる内に宇內に首位を占むるに至るべきを疑を容れざる所なり

新式海軍機器等實用に供せられ新式戰鬪艦現今發達程度に達したる以來充分の實驗を經たるは實に朝鮮海峽に於ける海戰を以て嚆矢とす我米國海軍のマニラ及びサンチアゴに於て西國艦隊を擊破したる事實は未だ以て此の如き實驗と爲すに足らざりしものなり尤币は今回の日本海に於けるが如き成果の不可能にあらざるを證したるや疑を容れず何となれば西露兩國の艦隊何れも同じく敵國艦隊に著しき損害を加へずして擊破せられたるを以てなり新式戰艦は堂々として交戰するに於ては互に損傷なきを得ざるべしとの說は今回の一戰にて全く打破せられたりと云ふべく日本は實に海戰史上に最も著しき勝利の一に加ふべき勝利を博したるのみならず自ら損傷を蒙ることなくして能く戰勝の功を收めたるものなり日本が露國に對し海陸軍事上共に優等に位するや歷然たり日本は實に戰勝國たり借問す歐洲諸國中遙に優大なる海軍力を有する英國の外日本に對し露國に優りたる結果を收め得べものありや否や而して日本にして今回の勝利に乘じ愈々發達して止まざれば英國と雖も餘り遠からざる將來に於て其の後に瞠若たらざるを得ざるに至らざるなきを保すべからず我米國に至つては即ち如何去る土曜日及び日曜日の海戰は二十世紀中文明開化の趨向を全然變更するに至るも未だ知るべからず



DELAYING THE WOLVES.
—Ralph Wilder in the Chicago *Record-Herald.*

○佛國

▲ルタン新聞　露國は其艦隊既に壞散したるを以て全然制海權の恢復を斷念せざるべからず而して其制海權を有せざる以上は再び旅順口を取らんことは不可能に屬すリネーウイッチ將軍に於て如何なることを爲したればとて戰前の舊狀態に恢復するをは到底兵力を以て爲し得べき處にあらざるを確然なりとす露國は頑固に其敗績を挽回するの必要ありや否やは奉天戰役後に至て人の思想に上りたる所の問題なりしが余輩は速に媾和を遂ぐるこそ策の得たる者ならんと思惟せり露國は今日最後の決鬪を試むるに決心したる者也余輩が去る三月十一日に論じたる處は今日益々確實となりたるが如し露國は其版圖の一極端にのみ其の全力を集中し以て其の他の地域に於ける活動を萎痺せしむることを得す此の如き冷靜の心胸より出づる愼重の勸告は若し佛國にして露國に同情を寄せざる者とせば決して之を提供することなかるべし蓋し余輩は露國の同盟に熱中すること敢て前日に異なる所なく此同

盟を以て我れに對しても將た露國に對しても歷史的必要となすが故に余輩は露國并に我國の利益に適合するものと確信する所の意見を發表するを憚らざる也

▲ヂュルナル新聞　先づロヂエストウエンスキー提督の勇敢に對し若干の賞讃を述べ烈しく露艦四隻の降伏殊にニコラス一世、アリヨルの降伏を非難し（其著しく日本海軍力を增加すべきを云々し）たる後結論して曰く此海戰の今後の結果に就き露國に取りて最も良好に推測を下すも其海軍は全滅に期したるを認めざるを得ず而して日本艦隊は如何なる損害を受けたりとするも東郷大將は尙偉大なる優勢を占むるもの也

▲レピリユブリツクフランセーヅ新聞　露國は今後果して何事を爲すべきかとの問を起し而して述て曰く露國は既に海上に敗績せること明白にして陸上に於ても亦決勝を得ること蓋し難かるべし無謀の頑剛は無用なり今や露國は其自負心如何に傷害せらるゝも最早其妄想を脫却し去らざるを得ざるの時期正に至れりと

▲ジユル・フラ新聞　露國利益の爲には勿論既に幾分か既に痿痺したる國際的利益の爲めにも亦平和の必要を論じ戰後に於ける日佛露三國協同のことに論及せり

▲レピユブリク・フランセイス　日本の勝利は單に戰爭の期間に對して間接の影響を及ぼすに過ぎず即ち露國宮廷に於ける平和派の風勢を興奮すべきこと之れ也然かも戰爭にして尙ほ繼續せられんには戰爭の唯一の效果は是れまで浦鹽の攻擊を遲延せしめたる危恨の念を除去したるに在り然れども海上に於ける日本の全勝は他の點に於て大に興味を有するもの即ち太平洋に生出したる大海軍國は向後列國の連衡を動搖するに至るべきことなりとす英米の人民も爲めに危懼すべく佛國に至ては既に久しく日本の成効の結果に關して焦慮する所ありたり佛國は日本勢力の非常なる增進を寒心しつゝある各國と遂に事を共にするの已むを得ざるに至らん是假令佛國が露國に對する同情の爲め强らんとを爲しとするも佛國自己の利益の爲め即ち亞細亞に於て佛國の位地を維持せんが爲に事茲に出てざるを得ざるべし



BEFORE THE SEA FIGHT.
MARS—"Now for a fresh game! Shall we play for money?"
NEPTUNE—"No. Our stakes shall be the lives of men—and the happiness of peoples." —*Humoristische Blatter* (Vienna).

▲エコート・パリ　ロゼストウキンスキー艦隊の擊滅後に於ては英佛兩國が各自の同盟國に對する友誼的干涉問題は不日現實上交涉の問題を構成すべく又官邊に於ては昨日平和談判目前に迫りたりとの談論盛なりし

との風說を掲げたり

▲チロール　從來親露論者が總て露國の敗戰は其實勝利なりと解釋したりしとを痛論し又露國の眞友は旅順陷落後媾和を勸告せしものなりと言明し進で露國逆敗後に於ける國狀に付冷評を下し且つ問て曰く此慘憺たる悲劇は何れの日か其れ終了せんとする乎と

▲アントランジャン　今回の戰敗は露國の爲め媾和又は崩壞の意なり而して崩壞は即ち死滅なり凡そ一國の君主は其臣民を率ゐて殲滅に陷るの權利を有するものにあらず他日露國人は假令ロジエストウエスキー及びネボカトフ死したるも露帝の尙ほ生存せらるるを認知するに至るべし事玆に至つて露帝が事の不可能に關するにも拘らず尙且固執敗衂の勢を挽回せんとするに方て愈々其責任を重大ならしむるのみ皇帝は國運の危急なるを解せざる也各强國は須く彼に勸告するに人命の尊重すべきを以てし依て帝が更に許多の人民を落さんとするを抑止すべしと

▲プチト・レピュブリク　露國がバルチック艦隊の如き士氣沮喪せる勢力を以て氣運を挽回せんとの愚昧なる抱負を酷評し斷言して曰く斯くの如き犯罪的愚策を頑守するものは實に之を監禁するの價値あるのみと

▲クロア　大文字を以て其結論を出して曰く戰爭愈々永續するときは平和條件は愈々苛酷となるべく革命黨は團結して竊に運動し露國政府は殆ど内外の敵に向ひ永く對抗するを得ざるべく左れば假令露國は其自負心に對しては忍ぶべからざる所あるにせよ敗餘の今日將來無益の流血を避けんが爲め平和を請求せざるべからずと

○獨國

▲ロカールアンツアイゲル新聞　日本艦隊は戰勝の利に乘ずるや至らざる所なく其追擊は精悍を極め且つ至倖の好果を收めて敵の敗殘艦を捕獲し一日遁逃せるロゼストウインスキー、フイルゲルザムの兩提督を俘虜とせり巨艦四隻久しからずして新に旭旗を其艦頭に飜さんとするの事實は日本軍の依然として安全なるべきを證するに餘りありと云ふべし

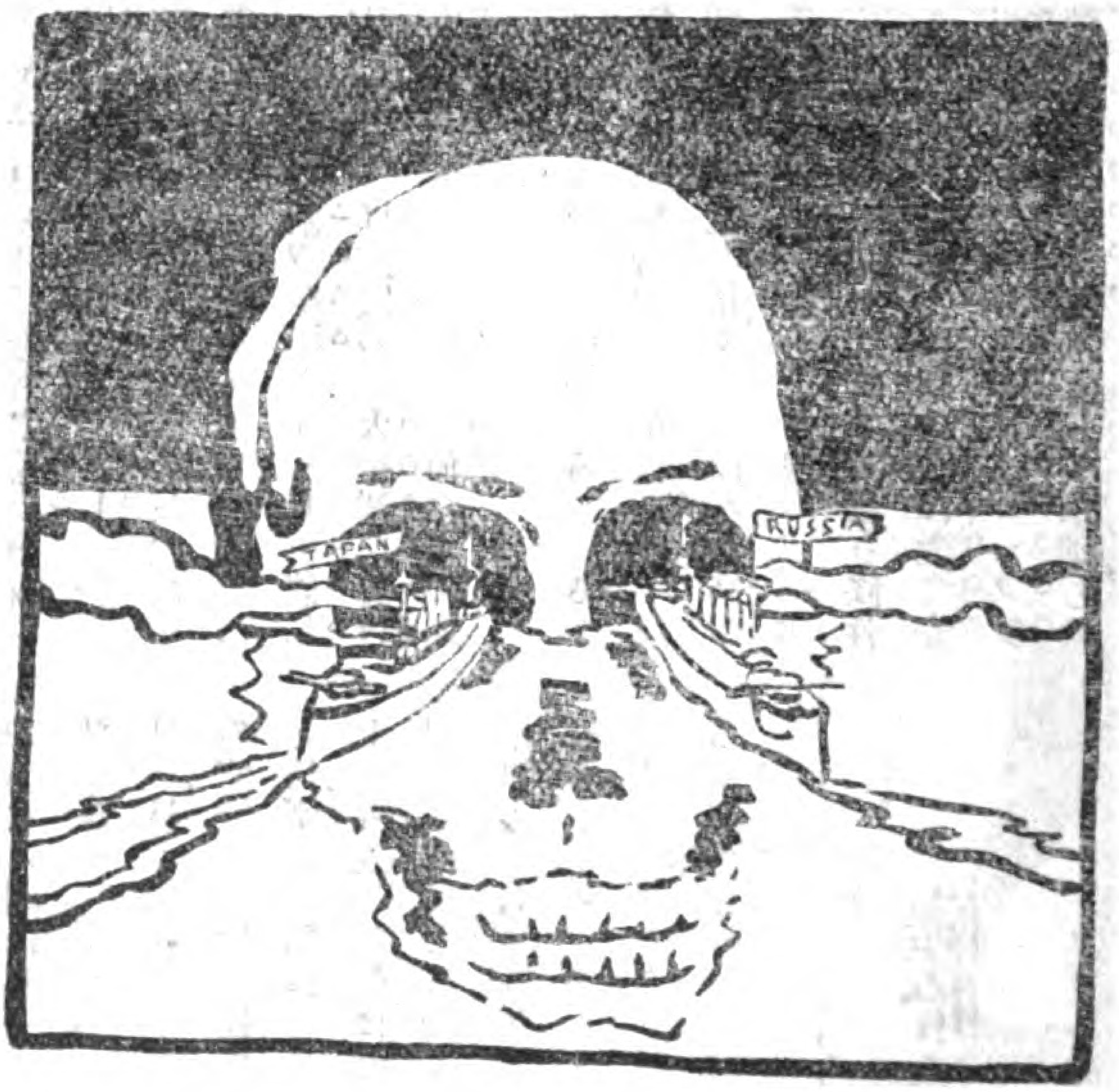
▲フオッシッエーツアイツング新聞　日本軍の作戰は海上に於ても陸上に於ても等しく燦然たる光彩を放ち其將帥、組立、監理及交通制度は全世界の嘆賞する所にして將卒は居常如何なる任務に就くことをも辭せず且つ能く自ら抑損し勤厚以て事に當り命令あれば何時にても職務に服し連戰連勝の功を致し以て優者の地に起ち既に奉天を屠り更らに滿洲の露軍に打擊を加へんとする準備中なるに今や東鄕大將は敵國の驕慢なる最後の希望を絕ち同國皇帝の軟弱にして最も深く自信する所ある望をも今回の東洋大戰爭は終局日本の敗績に終るべしとの念慮を絕たしめたり玆に於て乎露國は今後多年間東洋海軍國の班伍に列する能はざるとなり嘗て獨逸皇帝をして最强國の元首として謳歌せしめたる威名赫々たるニコライ二世も其戰勝者に對し大敗を恢復するの望なき事となれり露國は其國境を防禦し且つ革命運動を鎭定する爲め歐洲に數十萬の兵を留めざるべからざるに日本は即ち國を空にして海外に送兵するを得るの位地に在り何となれば寬大なる憲法のあるあり全國民擧つて皇帝の聖意に服すれば也露國皇帝より媾和を提出するは今の時を好機とす蓋し同皇帝は今にして媾和せざればバルチック艦隊の全滅は革命派に聲援を與ふること頗る大なるべく戰爭を繼續するは媾和條件をして益々重大ならしむべく且諸外國も無謀の戰爭を繼續するの資金を供給せざるべきを知悉せられざる理由なきを以て也而して各中立國の位置は方に旅順陷落の後に等しく露國に對し自ら進んで忠言を容れ或は何等の勞を取らんと提議するの要あるを見ず然り而して日本は其戰捷及其國民の良好なる態度禮義及び愛國心に依り文明國及び强大國の間に無比の好地位を占むるを得たり此地位たる戰爭の今日終局を告ぐると其の繼續せらゝるを問はず長く失墜せ

らるゝことなかるべきもの也

デルカッセ氏の効績

「ウエストミンスター、ガゼット誌」

デルカッセ氏は過ぐる數年の間歐洲に於ける第一流の外務大臣たりしことは疑もなき事實なり、彼れの熟練と才識と其人格の偉大とを以て彼は佛蘭西をして歐洲の政治界に於ける最高最要の地位に復せしめたり。而して彼が之をなすに當りて敢て征略を用ひしにあらず、敢て揚言をなしたるにあらず、極めて忍耐深き決心を以て平和の間に着々之を處理したるもの一層彼に多とせざるべからざる所なり、彼は露國との同盟を維持すると同時に、伊太利との不幸なる商業上の爭を鎭め、且つ大英國との交誼を厚うせり、日露戰爭の開始せられし以來、彼は極力戰爭の擴張を防ぎ、殊に露國と大英國との間の平和を維持することに盡瘁せり、若し今日の歷史を書くべきの時期に



THE LAST PORT.

—Webster in the Chicago *Inter-Ocean.*

到らば必らず彼の効績に對する公平なる記述をなすことを得べく、殊に戰爭開始よりの最初の二週間の如き危急の秋及び聖都彼堡とスモーレンスクとの事件、殊に北海事件等に於ける彼の効績は當さに史上に特筆せらるべきものたるを疑はず、彼は實に露國と大英國との間の爭を起さゞらんとするに全力を盡し、而してよく之をなし得たるは彼の外交上の手腕に歸せざるべからず、彼の同盟國たる露國と彼の友邦たる英國との間の調和は實に至難の事業にして若し一歩を誤れば佛國をして非常の苦境に陷らしめざるべからず、而してデルカッセ氏のよく此間に處して誤らざりしは以て彼の偉大なる効績なりといはざるべからず、ランスダウン卿もデルカッセ氏を賞讃したるは宜なりと謂ふべし。

媾和に對する日本の要求

「スペクテートル誌」

こは日本海大海戰前に書かれたるものなり、讀者其心して讀まれんことを望む(記者)

日本人は極めて鋭敏なる國民なり。彼等の要求する平和は、少なくとも三十年間持續し得らるべきものたるを期せり、第一彼等は露國の滿洲撤兵を要求すべし。蓋し此の廣大なる土地にして支那に還附するときは、日本帝國は之れに依つて防禦的藩屏を有するに均しければなり。彼等は第二に旅順口の領有を要求すべし。蓋し此の地は日本人が莫大の血と財とを費やしたる所なるを以てなり。勿論旅順口と共に遼東半島の領有をも要求すべし。彼等は第三に過剩人口の供給に必要なる倉廩として朝鮮を領有すべし、第四には彼等は浦鹽港を割讓せしむるか、若くは之を中立地たらしむるを要求すべし。蓋し彼等は此軍港を認めて彼等の頭上に臨める小銃なりとすればなり。彼等は又樺太の割讓を要求すべし。蓋し此の地は彼等の舊領土なるを以てなり。第五には露國の北太平洋に於ける軍艦派遣力に制限を加ふることを要求し、又英國の外、如何なる强國にも抵抗し得べき海軍力を編制するに必要なる償金を要求すべし

願ふに露國は佛國及獨國の力を借りて、如上の要求を削小するを謀るべく、而して此企圖にして失敗せば、彼等は戰爭を繼續するを善良の手段なりとせむ。蓋し戰爭の繼續は、露國內地の擾亂を招くの危険を含めりと雖も、一方に於ては露國の人民に對して不法の壓抑らしく見へ、一方に於ては三世紀間不斷の發展を爲したる露國の王威を挫折する如き條件に屈從するよりも、寧ろ戰爭を繼續するを以て露國の專制政體に取て安全なりと彼等は信ずればなり。唯だ記憶せざるべからざるは、ロマノツフ家の自負は、貴族としての彼の位地の自負、即ち連綿として永續したる繁榮なる舊家といへる自負に外ならざること是れなり。彼れば其の蓄積せる富の有らむ限りは戰爭するを避けざるべく、而して吾人は露國人民が租税負擔力の渴盡したるを信ずる能はず、又彼等が寺院の財産を擔保として公債を募集の條約を好まざるべし。然れどもザールは族長なるを如何せむ。

吾人の見る所に依れば、積極的戰爭の止息は、一方に於ては露國をして一週間約五十万磅を節約し、一方に於ては動員中止の結果、能く革命黨の最も有力なる武器を破壞するに足るべし。勿論百姓一揆にして益々蔓衍せば、國庫は之れが爲に空虛となるも知るべからず。然れども露國は廣漠なる國にして、其の經濟的事情の如きも、地方に依て大に異れり。又軍隊にして柔順なる限りは內地の秩序を恢復するに難からざるものなり。且つ問題は、歐洲の政治家が可能事とするものに存せずして、露國の官僚が、數世紀間背後に有したる專制君主と共に、自ら斯くあるべしと信ずるの點にあり。土耳古には歐洲流の政治行はるゝ土地なしと雖も土耳古政府は尚ほ能く存立し、且つ大兵を戰場に出だすを得るなり。露國は其の强大に於て固より土耳古の上に在り。平和は漸次に近づくべし然れども日本を愚弄するは到底困難なり。日本は歐洲の聯合に依て壓伏せらるゝか、然らずむば露國の攻擊に對し或る大なる且つ永久の保證を得るに非ざるよりは、必ず露國に向て休戰以上の危険なる條件を要求するや必然なり

薩哈連島と日本

「ブラック、アンド、ホアイト誌」

薩哈連島は遂に皇帝（ミカド）の軍隊によりて占領せらるべし。我等は日本が其占領について計畫しつゝありとの報知を聞くこと屢々なり。此薩哈連島の住民の半數以上は皆犯罪人にして、而して概れ殺人罪の犯人なり、所謂國事犯の罪人は此島に送られず、皆非國事犯の重罪人を以て充さる。

試みに地圖を披攊せば何が故に日本が之を占領せんことを望むかの理由を見出し得べきなり。其天然の位置自ら日本の屬地の如く、日本蝦夷の島と僅かに宗谷海峽を隔て、日本群島の極北をなすものなればなり、且つ歴史的にいふも前世紀の始め該島は日本の有にして日本國旗此島上に飜りつゝありしも、五十年後千島列島と交換し遂に露國の領地となれるものなり。

薩哈連の長さ五百九十哩にして幅は十七哩乃至百哩なり、而して一千八百九十八年の調査によれば其人口凡そ三万人なり、日本との間を離す危險なる海峽（宗谷海峽）は其廣さドヴアーとカレーの間の英吉利海峽に等し、島の表面は概れ原始的森林に掩ばれ、僅かに河川を以て通行するの外道路なき程密に繁茂せり、河川は夏期に於ては小舟にて航し、冬期に於ては犬又は馴鹿の橇にて氷上を行くべし、西比利亞と薩哈連とを隔つる狹き間宮倫宗海峽は冬期氷結するを以て航行全く絶たれ、郵便物は一騎の犬によりて引かるゝ橇に入れてニコライプスクより持來さる。而して島人は細かに分てば五種の人種あり、各々多少の特徵をあらはせりといふ。



The figure of the man is as one blindly struggling upwards, overthrowing in the process the palaces and monuments of Czardom. In the air the double-headed eagle of Russia is fighting itself. The elements in the struggle are also shown here in actuality—the palaces of the autocracy above with types of the people below.

From the cartoon by W. A. Rogers.

トルストイ伯夫人の戰爭觀

「倫敦タイムス」紙

トルストイ伯夫人其の友に送れる書簡に曰く

一筆申上候御許樣には今は國外に御住居に候へども妾等國内に日を過ごし居るもの丶等しく心を惱まし居る事ども御察し下さるべく今はおもに刻下の戰爭につき思ふ事二ッ三ッ書き送り申候

近頃我國は國民の輿論感情の一致を缺き只管意見の同じからざる者ある樣聞き及候妾は「ノヴォエ、ヴレミヤ」「モスコフスキア、ヴィエドモスチ」等同情なき諸紙の何等政治上の考量をも經ずして徒らに戰爭繼續を叫び平和に反對する所論を見て痛心に堪へず候、妾は衷心戰爭繼續のたゞに不必要を感ずるのみならず、戰爭によりて人の生命を輕くし血に向つて目當てもなく野獸の如き渴きを愈やさんとする幾多の不平兒の爲めに我國の招く損害と秩序の紊亂との益々大なるべきを信じて疑はざるものに候、かへすがへすも戰爭の爲めに辯護する人々の心を解するに苦しみ申候。

此等の人々が人道に對する先天的愛情を失ひ又善の何たるかを了解する能力を失ひ—否其想像だもなす能はざるに至るは人としてなし得べき事に候哉又彼等は罪なき戰の犠牲者と及び後に遺されたる家族等と今や此の吾國全土が呻吟しつゝある救ひ難き痛苦の下に共に生活し得べき事に候や

人或は思はん人民は戰爭を以て智慧あるもの、爲す事となし平心以て死に赴くものなりと然れども之れ謬見たるを免れず候妾は此の國に住し妾が一子は遠く軍に從つて城外にあり妾は我子との別るゝに當つて身自ら心さかるゝばかりの悲しみを經驗致し又同じ思の多くの人を見申候其結果はいつも涙となり哀哭となり遂に戰に向つて呪はざるを得ざるに至るを知り申候

幾多の人は平和を以て恥辱となせど決して然らず戰に敗れたるは元より國の不幸には相違なきも決して恥辱となすに足らざる事に候日本人の如く精神上よりいへば進歩せざる非基督教的國民は愛國の念盛んなれば戰に捷つは當然の事に候而かも此の愛國主義は同胞相憐れむ基督教主義即ちいひ換ふれば非戰主義に反對する所のものに候我國民は今や此の主義に向つて歩を進めつゝあるもの日本人は猶此の階段にも達せざるものに候

且つ人の子を苦めてあらゆる大罪惡を犯さしむる戰爭其物は之れ大なる恥辱にあらずして何ぞ恥づべき誤用せられたる文明の力を假つて成れる殘酷野蠻なる方法を以て人の生命を奪ふもの之れ大なる恥辱にあらずして何ぞ

世に殘されたる幾百万の人々—或は父を失へる小兒或は子を失へる老人彼等は食ふに食なく着るに衣なくして死す又幾百万の人々——血に泣ける母妻父子彼等は悲痛の極或は死し或は病に犯さる未墾の土地は空しく殘され而かも莫大なる國の負債は末代迄も之れを負擔せざるべからず——嗟呼殘酷も玆に至りて極まれりといふべく候

昨日外よりて歸途一人の青ざめたる顔の女身は骸骨の如く痩せ衰へて力なくも我家の門口の柱により物乞ふもの有之候妾は其望む所を問ひ候處其女の曰く「私どもは飢え死にしさうでムいます、ドーゾお助け下さい五人の子供と私を」夫は如何せしかを尋ね候へしに「病院に居ります戰で負傷致しまして今は働く事が出來ません」かくいひて女は大息(トイキ)つき「戰爭は如何です、間もなく止みますでしょうか」と問ひ候故妾は然る噫は少しもなき由答へ候時又もや「ア、世の中には飢えて死なんとして居るもの孤兒(ミナシゴ)となつて乞食をして居るものがどれ程あるか知れません、ア、「ザアー」「ハー」と例ふるにものなき悲しみの口調にて續け申候

嗟此の如きは今や等しく人民の訴ふる所に候一般母たるもの、等しく感ずる所に候否生きとし生けるもの、感懐は正に此の如くなるべく候然れども「ザアー」及諸將にして若し平和を以て恥辱と考ふるならば吾々母たるものは此等の虐殺者に對して憚りなく反抗の態度に出てんとするものに候以上

マキシム、ゴルキーを訪ふ

「ビショップ、ウイルキンソン氏」

予一日マキシム、ゴルキーをビルデルリングスホッフに訪ふ。予が伴へる旅館の主婦アナソン夫人は完全に露語を操り得るの人なり。予等が彼を訪へる時彼折り惡しく病氣にして多くの訪問者を謝絶しつゝあるを聞きたれば予等も亦空しく引返さゞるを得ざるべきやを氣遣へり、先づ

名刺を通じて面會を乞へるに稍あつて使丁來り、予等と面會することを喜ぶとの挨拶をなせり、予等は小さけれども居心よき室に通されたり、其室内の机上には書籍、筆墨等散亂せり、彼が臥しつゝありしならんと思るゝ安樂椅子には粗なる毛布を敷き、室の側に寄せあり、二三分の後小說家は入り來り、懇ろに握手し、低く腰を屈めて坐に就かんことを勸めたり、丈ば高き方にして痩形なり、顏色は總ての露西亞人の如く惡しくして僅かの口鬚を生せり。而して彼の談話は神經質的に急速にして其都度其の口鬚を扭じ居たり、髮は極めて長くして衣は黑し、彼は風邪に罹りつゝありしも其音聲は極めて明晰にして優美なり、一ヶ月間幽囚を受け、濕氣と寒氣に惱まされ、獄衣の粗なるを着せられたるも番卒及び獄吏は彼の著作を讀み演劇を觀たるを以て皆親切にして尊敬したることを語れり。彼は徒歩にて露國を巡り。或は僧庵を訪ひ或は寺院を觀て其宗教の現在を搜りたるに、僧侶又は牧師なるものは一般に其本務とする宗敎なるものを知らず、偏へに迷信と形式を以て宗教なりと誤解し、或は聖僧の事蹟を談し或はヴアージン、マリアの偉德を語るも遂に眞の福音を說くことなしと攻擊せり、彼は又予に訪ふに彼の著作を讀めることあるやを以てせり、予は其二三を讀めることを告げ、一言も批評を加へざりしに對し、彼は决して宗教に反せる著作をなさず否な大に眞正の宗教を人民に敎へんとするの希望の切なることを告げたり。

予は夫れより戰爭に對する意見を求めたり、彼曰く、戰爭は全露國を通じて最も嫌忌せらるゝものなり、露國人は决して戰爭を望まざるのみならず、又何が故に戰爭をなすかを解せざるものなり、實に戰爭は農夫を困しめつゝあり、否な全國を惱ましつゝあり、軍人巳に戰爭を厭ひ、妻子之を厭ひ、全國之を厭ふ戰爭は畢竟露國のために戰はれずして官局政治のために戰はれつゝあるなりと。

雜錄

（左の一篇は前號所載の『御製の英譯』に就いて野口米次郎氏が批評せられしものを、特に同氏より本誌に寄せられたるもの也、前號の末松博士の英譯と並べ讀めば一層興味深かるべし）

御製の英譯批評

「フロム、ゼ、イースタンシー」の著者　野口米次郎

○日本の和歌を英譯するは天下至難の業である、和歌の世界の詩上一異色を放ちて居る理由の一で其大なる所は所謂 divine simplicity（神聖なる單純）である、其單純――神聖なる單純を複雜で規則的な英語では移植することが出來ぬ、英語は形容詞と動詞が動いて文字の妙を添へるので複雜なるが故に自然精細である、以て單純、大なる單純、言を換へて云ふと神聖なる單純を移植して言顯はすことが出來ぬ、又和歌には一種調子に

美があつて一句一句は餘り感心せむでも一讀し終りて快感を覺へるといふ全體の上に於けるハーモニーがあるのである、之と全然別調子なる英語て、全體の上に於けるハーモニーを論ずるよりは先づ一句一句の意味が通ぜねばならぬといふ窮屈な英語ては言顯はすとが到底出來ぬのである、日本の和歌は日本の絹の衣物の樣なもので身體にクッキリ合はずフワ〳〵して居る所に言外の妙があるので、英語は所謂西洋服で身體に能く合はねばならず英語で日本の和歌を飜譯するのは西洋の羅紗で日本服を作る樣なものである

○或る外國の批評家が日本の和歌は、日本の墨繪の價値と同じ價値を以て居ると云つたが蓋し至言である、日本の墨繪か筆の跡墨の色に重きを置いて其意匠を論ぜざるが如く和歌に於ても之を適用するとが出來るのである、故に日本の和歌を英譯するとまづスチールのペン先で日本の墨繪を類似た樣になるグッ〳〵とペンて引ばつて暗雲に大く線をしたといふ跡が見えるのである、余は極言すれば Let them be alone といふのである、チャンバレーンが日本の和歌を飜譯して失敗したのは其理由てある、アストンも左樣である、若し和歌を英譯せねばならぬといふ場合があるとせば——余は全然斯かる場合の必要を認めぬのであるけれど、出來るだけ其儘を直譯して讀者の想像力に訴へるより他に方法が無いのである、和歌の形式と詠ずる所の意味が變化して來ない間は完全なる英譯を望むのは愚の極と云はねばならぬのである

○近來御製の英譯が出版せられて余は以上の意見を確かにした次第である、一冊の本としては帝國大學の講師ロイド氏の英譯あり、末松博士の英譯は倫敦の雜誌より轉載せられて前號の本紙に掲載せられて居る、之を一々批評——決して酷評はせぬ——するも英學者のみならず、一班讀者社界の利益する所も少からずと思ふが故てある

○ロイド末松兩氏の英譯は共に平仄が踏むである故——余は何故に平仄を踏む必要があるかを知らぬ、若し日本の和歌の如くしたしといふならば、其綴を三十一にするより外はないのである——多少原歌を延長してある所は許さねばならぬ、今四方の海といふ御製は余之を直譯すると

In the age, I deem, the Universe,—the 'four seas' are to be in brotherhood, why the waves and winds do thus rage?

といふのである末松博士の英譯で三行四行目にある弱い言葉で詩の上よりいふと平凡極まるものと成し終つたのである、即ち winds が rage するといふ以上は fierce といふ字が少しも響かぬ、又 fierce といふ容形詞は餘りに普通である、dash and spread は凡中の凡て僅々四行を以て成り立つ詩に於ては斯かる平凡な句を許さぬのである、否ある時は其詩は詰まらぬものと成り終るのである、元來詩の上乘なるものは其一字一字が拔き差しの出來ぬものといふので其字は其字の意味と必要とを完全に顯はして無くてはならぬといふ價値が無くてはならぬのである、fierce だの dash だの spread だの有つても功無ければ無くても差支への無い字は詩の點よりいふと舟に必要ならざる船頭の類てある、シャバン、メールの記者がロイド氏の英譯を批評するに當りて斯ふ譯した

O'er all the wide sea
Broods the still calm of peace
And in the world we love,
Whence then this turmoil
Of tempest-tossed waters?

tempest-tossed waters て波風を聞かしたは、其平凡たるは平凡なれど末松博士の手腕より飜譯者として上なるを認めるのである、又四行目の then といふ一字が能く響いて居る、然し最初の三行は意味に於ては不都合が無けれど原歌通りて無いのである

又參考のためロイド氏の英譯否作り替を左に載せる

My heart's at peace with all, and fain would I
Live, as I love, in peace and brotherhood:
And yet the storm-clouds lower, the rising wind
Stirs up the waves, the elemental strife
Rages around. I do not understand
Why this should be. Tis plainly not our fault.

○子等はみなの御製を直譯すると、シャバン、メール記者の如く

Gone all the children
Gone to war's garden,
Here in the farms and fields
Only the old folk
Garner the grain sheaves.

と(少なからず入用ならざる句ありとするも)するか、余に之を直譯さすると唯斯くいふ許りである

All the sons are gone to the battle-field, and the

old sire salone keep the mountain and field.

所が末松博士の英譯になると、第一 I suppose など丶いふ字が詩を弱くするのである、之を譯すると『余は想像する』といふ字なので何にも想像するなど丶いふ餘地のある和歌で無いのである、又 to the front といふ上は、二行目の To do their duty all under arms といふ句が少しも活動せぬ、有つても無くても差支のないのである、又三行目で alone といふ以上は at home といふ字が全然死むで仕舞ふのである、（余は極言する末松博士は詩人で無い詩の作者で無いのである、）又四行目の guards and watches も平凡極まれば lonely farmes も原歌の山田ならざるのみならず、『寂しさ』といふ形容詞は餘計のものである

流石に和田垣先生は斯く英譯せられた

The sons all, ere this fall,
At the country's call
To the front are gone,
Leaving farm and field and all
In the hands of the aged sires alone.

之れ以上の英譯を望むことは出來ない上乘の出來である、一句一句がドッシリと座つて居る美なる飜譯の例とせねばならぬと、余は斷言するのである、而してロイド氏の飜譯に至りては、意味に於ては相違は無からむも餘りに說明的で原歌の美なる單純といふ所を全然失つて終つたので、飜譯としては不得要領なものである

They're at the front

Our brave young men, and now the middle-aged
Are shouldering their arms, and in the fields
Old men are gathering the abundant rice
Low bending o'er the sheaves. All ages vie
In cheerful self-devotion to the Land.

○夢醒めての御製で末松博士の英譯の each time は、寧ろ有つて詩の全體の上に於て妙ならざると共に二行目の comes up at once to me も平凡極まるのである、而して how matters go there など丶云はむでも外に云顯はす句があるのである、千早振るの御製の英譯を見るに、第一行目の句 so stern and just て the power を形容するのは、此の詩として少ならしむるのである、千早振る神の心とのみ云へばこそ難有しといふのである徒らに形容して其意味を付けるのは詩の作者としては下等のものと云はねばならず、二行目の as I dare

hink も子等はみなの I suppose と同じく余は何故に入れられたるかと疑ふのてある、又三行目の sweet sincereness の sincereness sweet て形容するのも、可笑きのみならず、余は民の誠といふ大文字ならずと思ふ、是に於て余は寧しろジャパン、タイムスの英譯を良しとするのてある

Fealty so faultless
As that of our people
Will gladden the hearts of
The Gods in high heaven."

而してロイド氏の飜譯に至りて寧ろ滑稽と云はねばならぬ

We've tried to be sincere in deed and word
And have exhausted every means to state
A clear and truthful care; but all in vain.
Now may the God that sees the hearts of men
Approve of what we do."

○國のための御製に至りては、ロイド氏の英譯は和田垣先生の子等はみなの英譯の如くまづ完全に近しと云はねばならぬ否な此れ以上を望むとを得まじと思ふのてある

The foe that strikes thee, for thy country's sake,
Strike him with all thy might.
But while thou strik'st,
Forget not still to love him.

末松博士の英譯も比較上出來の方なれど、二行目の弱い句て妙ならず、'that bass our path は仇なすといふ句の適當なる譯て無いのみならず、平凡極まるのてある、ロイド氏の that strikes thee て意味を蔽つた方が上出來と云はねばならぬ、要するに末松博士の英譯は平凡なる形容詞と力の無い動詞て詩としての價値を發揮せぬのてある、流石日本人丈けて意味の點に於ては少しも誤謬が無いが、ロイド氏の英譯の或る部分の如く美的英譯としては末松博士のは失敗と云はねばならぬ

○いくさびとの御製に於ても、余は末松博士のよりはロイド氏の英譯を取るのてある、即ち

Importunate mosquitoes, light of wing
With trivial song and sting disturb my rest
This sleepless night.—
—On what dark lonesome field,
Midst what great hardship lie my soldiers brave?

餘りに細く說明的で引き延はされては居るが、忍へぬ程では無いのであらふ、(否な忍へぬ程引き延ばされたりといふ人があるかも知れぬ、)末松博士の英譯の二行目は餘りに弱くいかなる野邊を末松博士はUnsheltered place と譯されたが思ひ足らぬ感があるのである

○まつりことの御製の末松譯の二行目は全然不必用である、つはものゝの御製でも We may be sure とか、fatigue or fear などいふ句で詩が自然頗る弱いものと成り終るのである

端居しての御製で『端居して』は果して seated in my balcony であるか、余は今其適當なる譯字を知らぬのである、月を Luna としてローマン、ミソロジーに借りたは何の意味なるやを解せぬのである、普通に moon とす可きである、ムーンとしては平仄が合はぬといふならば少しも前云つた通りで平仄を合はす必用を認めぬのである

國を思ふの英譯は、完全なものといふに近いのである、誰れても此れ以上には出來まい、御製の和歌として優長なる調子も、英語にて相當に移植せられて居るのである、末松博士の英譯十六篇の中、其他に無難に忠實に譯せられたと思ふのは古へのものである、原歌を有りの儘に譯せられたのである

○ますらをの御製の譯で my heart mounts high は如何なものにや妙ならずと思ふのである

又靜かにもの譯も無難なるのみならず、上乘と云ふ可してある

人は妄評なりと云ふかも知れぬが決して妄評では無いのである、讀者其心して讀め

余はロイド氏末松和田垣兩博士に多謝するのである

前號和田垣博士の譯詩第五行目 hand は hands の誤りなり

指環說 附帽子論

法學博士　和田垣謙三

▲日本人も近頃は大分ハイカラになつて婦人は勿論男子までも指環を嵌めるやうになつたが、昔は日本に指環といふものはなかつたのぢや。きら〳〵した飾りをつけることは日本人の趣味(アースト)に合はなかつた。斯様な趣味(アースト)は野蠻人と歐洲人との有して居たものである。然し日本人が現今の如く盛んに指環を嵌めるやうになつても扨その指環といふものゝ出來た因緣に至つては知て居るものは恐らくあるまい。で吾輩はこゝに指環(リング)說

といふものを一寸話さうと思ふ。これは極めて眞面目な研究て又極めて嶄新(オリジナル)の議論の積りてある。

▲西洋ては指環を結婚式の時に用ひるものだ。黄道吉日を選んて甲某と乙某とが結婚をするといふ時にブライドグルームがブライドに——花聟が花嫁の指に指環(リング)を嵌めてやるのだ。女の謹むべきはリンキてあるから、リングかといふと、決してさういふ意味てはない。

▲冠婚葬祭といふ、大禮の中に數へられて居る結婚式に、指環を用ゐるといふのは、何か理由がなくては叶ふまい。今ては男女の別なく指環を嵌めて居るのてあるが、結婚式の時に男が女の指に嵌めてやるといふ其プライマリーの意味に遡つて考へて見ると、必ず何か理由があるに違ひない。て吾輩は最初は牛の角や鼻に輪をつけると同樣に、一種の符徴てはあるまいかと思ふた、然しまさかそんな意味てもあるまいと、或學者に聞いて見ると其説はこうてある。

▲指環といふものは所謂る環の端なきにて始なく終なく無邊無窮てある。No beginning て No end て perpetual のものてある。夫婦は偕老同穴、同心一體て、共に頭の禿げるまて、末長く連れ添うといふものてあるから、其印として用ゐるものてあるといふた。然しこれは餘り Common な平凡な説てあつて、少しも面白くない。

▲吾輩は其後歴史を調べて見て、其副産物として結婚に指環を用ゐるの理由を悟ることが出來た。

▲昔ヴェニスといふ所は、非常に通商が盛んて、アドリアチック海は勿論、其近海に於ける海上權を握つて居つたものである。それて當時のヴェニス人は、アドリアチック海の權を握ることは、即ちアドリアチック海を妻とするのであるといふ觀念を抱いて、年々歳々アドリアチック海との結婚式を擧行したものである、其結婚式の時に Doge といふヴェニスの大統領が海に向つて、黄金の指環を投げる、ダイバーと呼ぶ潜水者が其れを取つて來て大統領に還す。抑々此黄金の指環といふのは、其の昔 Pope がDoge に與へたものて、其時 Pope が Doge に向て use this ring & marry her……「此指環(リング)を以て彼女(海)と婚せよ　」といふ冒頭を以て「此指環は Chain 鎖てある、鎖の代表てある、鎖は海を bind し束縛し、其權力の下に置くものてある。此鎖をしるしとして彼女を娶れ、決して一年も之を絶つべからず、且つ後世をして知らしめ

よ、ヴェニスが海を治むること、恰かも夫の妻に於けるが如きことを」といふ意味の、いはゞ勅語のやうないとも嚴かな命令を下した。といふことがある。即ち結婚に指環を用ふることは、一個人と一個人の間のみでなく、都市と蒼海の如き great scale に於ても行はれて居る。結婚式に指環を用ふるのは、即ち男が鎖を以て女を束縛する意味であるといふことを、我輩は之によつて悟つたのぢや。

▲犬は首に輪を篏める、牛は鼻に輪を篏める。人はまさか首や鼻に篏める譯に行かぬから指に篏めるのぢや、指に篏めるのは即ち鎖でつながれ、束縛せられ、奴婢となり、捕虜となつたことを示すのぢや、この指環は何千圓であるとか何万圓であるとかいふて誇とする指環は光れば光る程、私は奴婢である、誰かに捕虜せられたものであるといふことを示すのぢや。

* * *

▲又帽子のことを序に話さうが、西洋の婦人などは何か宴會があつても、又式場に行つても帽子をかぶつて居るあれは日本人から見ると甚だ無禮のやうだが決してさうぢやない。「何だ人の前で脱帽せぬなんて、篦棒な奴だ」などとやつけたいやうだが、實は却つて謙遜の意味を表して居るのぢや。

▲一體帽子といふものは、自分の皮膚――頭をかくす爲に用ふるので、甚だ卑下した意味から來て居るのだ。野蠻人すら眼ばかりキョロつかせて顔の全部を掩うて居る。西洋婦人の veil などは其少しく進化したものて帽子ばかりとなつたのは、今一段進化したものてある。或人の説によると、脱帽すのは英國で出征軍人が凱旋をした時に始まつたもので、それは「おい、僕の頭を見て呉れ、カスリ傷さへないぢやらう」といふ頗るプラウドの意味でやつたのださうぢや。

▲現に今でも英國の議會では、演壇に登つて演説をやるものゝ外脱帽せぬ。議員はみんな帽子を冠つて居る、これは昔野外で議會を開いた爲めに帽子を冠つて居た遺習もあるぢやらうが、脱帽せぬのは決して無禮てはないからである、支那でも朝鮮でも常住帽子を冠つて居る、印度人や猶太人は儀式の時に帽子を脫るのを非常の失禮としてある。我日本でも昔はさうてあつた、陸海の軍人を見給へ、ドンな場合にも決して脱帽せぬてはないか、神佛の前に於ける神官僧侶の頭上を見給へ、脱帽の非禮たる事を眼前に證據立てゝ居るぢやないか、

▲要するに歷史上から考へて見ると、帽子をかぶるのが禮であつて、とるのが無禮なのぢや、西洋婦人が今でも人の前て脫帽せぬのは昔の風俗が僅かに存じて居るものといふてよい。

明治闇黑史（七）

和田垣博士が談話の一端を筆記したるもの、文責は記者にあり。

○自由民權論の勃興（一）

有磯逸郎

『馬鹿に序文が長く爲つた、サア之から、自由民權の本舞臺に入り、我輩等が空拳を以て政府と戰つた、政黨勃興時代の消息を話さう。考へて見ると、明治の歷史も、年月より云へば、僅に三十八年で有るが、今日に至る迄、種々の變遷を示してをる、明治初年より西南戰役、民權論の勃興より憲法發布、國會の開設より日清戰役、それから今の日露戰役、斯う數へ立てると、一ト息に、明治の歷史は讀み盡されるが、內情に入りて、その經過を見來ると、今我輩の話すやうに、さら〳〵サッと、今日に至つたものではない。特に德川幕府を、倒ふした薩長政府と、日本國民、といふとチト言葉は仰山ぢやが、西鄉の失敗に經驗した板垣等は、武器の代りに言論を以て、薩長政府と戰つた政黨勃興時代の當時を顧ると、我輩も渦中に在りて、當時は無我夢中であつたが、今日より回想すると、頗る妙味を覺ゆるのぢや』

『前に話したやうに、天下崇拜の的と爲つてゐた西鄉先生も、世人が期したほど強くはなく、脆くも城山の露と消えたが、西鄉先生が敗れたといつて、當時日本國中に磅礴してゐた反政府の思想は、岩倉大久保等の前に降伏するものではない、天下は西鄉等の失敗の爲に、武器を以て政府と戰ふの愚なることを知つた代りに、今度は遂然と碎け、ハイカラに爲つて、言論といふ利器を提げて、政府に衝突つたのは、面白いではないか、特にその急先鋒は、幕末の頃既に言論を以て天下に鳴つた土佐人てあつたから、ます〳〵面白いのぢ

や』

『西南戰役中は、生命懸の仕事を林等に讓り。靜かに風雲を眺めてゐた板垣退助は、西南戰役終り、人心は少しく落ち付けりと見るや、猛然として、自由民權を標幟として、天下に現はれた。當時西郷の失敗の爲に、氣を腐らしてゐた民間有志は、明治初年より重望を負ふてゐた板垣が、南海の一隅に起れりと聞くや、何れも城下で死んだ西郷が再來したやうに覺え、手を拍つて、多事の時代到れりと喜んだ。間もなく板垣は彼の立志社を中心として、愛國社を創設し、爰に土佐の地盤を定めると共に、大石正己、寺田寛の兩人を左右に携へて、大坂表に乘り出した。それと聞いて、我輩の如きも、二三の同志を伴ふて、大坂の檜舞臺に出て、板垣等と出會したのが腐れ緣、遂に政黨の爲に、一ト方ならぬ苦勞を味ふとと爲り、御覽の如き今日の身の上に陷つたのぢや、ハッ〱』

『土佐表にて、愛國社組織の報、天下に聞てゆるや。電のやうに四方に閃めき、先づ岡山に民權家有志聯合會起り、次で福岡市にも、民權家の會合開かれ、血氣にはやる關東人も、筑波山上に大會を開き、到る處の地方に、此種の會合起りて、自由民權の聲は、燎原の火の如き勢を以て、天下に彌蔓した。恰かも此の時。千葉縣の櫻井靜――左樣ぢや、今、帝國議會の片隅に小さく爲つて、頓と世間に知られない彼の櫻井が、國會開設懇請協案といふ印刷物を、鍛から棒に、全國の府縣會議員其の他重もなる有志に配布し、東京に大會を開かんことを唱道したのぢや。此の無名の、地方有志の手に成つた一片の飛檄は、非常な雄辯と爲つて、有志者の思想を動かし、各地の民權家は、東より、西より、南より、北より、國會開設の請願書を懷ろにして、東京に集つた』

『關東は斯んな鹽梅に、民心の動いてゐる時、板垣は、維新の元勳といふ金箔に四邊を輝かせ、前に言たやうに、大石、寺田の二人を前に立てゝ、悠然として大坂に乘り出したのであるから、天下の衆望一に板垣の身に注き、期せずして十數縣の有志は、板垣を中心

として、大坂に集つた。當時維新の元勳といへ相近くべからざるやうに思つてゐたのに、板垣は、洒然として、老書生の態度を以て、是等の有志に接したものぢやから、大坂に出た地方の有志は、皆んな板垣に感服し、明年を期し、再び大坂に大會を開かんとを約して各々國に歸つたが、當時大坂に集つた有志者の精神は、それは實に純白なものであつた、何れも死を以て、國家に盡さんとを期してゐた、之は西南戰役の終つた翌年――明治十一年の事ぢや。

『いよ／＼十二年の十一月は來た、豫期の如く、民間大懇親會は、大坂に開かれた、出た、出た、各縣の有志、無慮八万七千人を代表せる九十幾名の委員は、大坂に集つた、彼の林の陰謀事件に一寸顏を出した島地正存は、發議者と爲つて、速やかに國會の創設あらんとを天皇陛下に請願する事、といふ個條をも、各地遊說等の個條を議した、終りに、

假令幾年月を經るとも國會の開設を見るに至らざれば敢て此の同盟を解かざるべし

といふ大決議を定め、出席委員は、何れも血をすゝつて、之を誓つた、當時は、我國では、最も民間有志者の意氣の揚つた時であつたらうと思ふ。爾うして、此時、東北より出席した河野廣中と、それに片岡健吉の二人は、委員總代に選ばれた、左樣ぢや、河野と、片岡とは、此時から、有志の間には、隱然重きを爲してゐたのぢや』

『眼を轉じて、當時政府の模樣は如何(どう)であつたか、と言ふに、西南戰役の跡仕末を附け、漸やく安堵の胸を撫て下ろすと、今度は又もや百姓原が口八釜しき民權論、櫻井靜の勸誘に依つて東京に出た有志者は、每日のやうに、元老院の門前に詰め掛ける。人民の聲、と言へば、初手から輕蔑してゐた當時の政府は、門前拂を食はせて、受け付けない、門前拂を食つても／＼有志連は、根氣よく、元老院に詰め掛けたが、石佛のやうな當時の役人には、更に通ぜぬ。其處(そこ)で、各縣の有志も意地と爲り、互に連絡を通じ、地方聯合會事務所を拵へて、政府に當ると、佩劍を帶びた巡查は、左

庭に來りて、その標札を取り外づす、如何した次第だ、と詰問に掛れば、まア亂暴な政府もあつたものぢや！直にその有志者を引ッ捉へて、監獄にぶち込むんだから、驚いたらうではないか」

「難て、甚しきに至ると、斯んな事も起つて來た、路上て、聲高に、自由民權の言葉を口にすると、直ぐ探偵に取り捲かれ、その儘言句も言はせず、監獄に投ぜられたものもあつた、政府が、餘りに言論を雍閉するので、政論に關係のない近衛歩兵伍長の小原彌八といふ男は、之を憤り、皇居の門前て自刄し、新潟縣の赤澤常容といふ靑年も、同じく大政官の門前で割腹せんとした、之は目的を果さなかつたが、當時少しく氣慨ある者は、誰も、彼も、政府の所爲を憤らないものはなかつた。何んぢや、政府の此の鎭壓策は、成功したかと聞くのかへ、馬鹿を言へ！、民心は斯う動いて來ると、區々たる鎭壓は何に爲るものか、却て、刺激劑と爲りて、鎭壓すれば爲る丈け、それに比例して民間の氣勢は加つて來た」

「政府が右のやうな鎭壓策を施してゐる際に、大阪大會は開かれたのであるから、列席した委員の意氣込凄まじく、言ふべからざる活氣の中に、議案は討論せられてあつたが、爰に滑稽であつたのは、此の大會の途中に、東京にては、彼の有名な集會條例――警官の認可を得ずして、三人以上の集會を禁ずるといふ、暴惡なる鎭壓條例は、發布されたとぢや、之れは無論大阪大會に打擊を加へんが爲に發布されたのであつたが、その布達の、大阪に達した時は、大會が重要の議事を終つた時て勢込んで、大會に驅け付けた大阪の警官も、口あんぐり、隨分見物てあつたのさ、アハ〳〵」

「集會條例の發布は、斯んな鹽梅式に、大會に間に合はず、トンチンカンであつたが、會主より集會條例發布の事を聞いた時は、出席委員は悉く憤怒の情に堪へず、殺氣場に滿ちて、それと言はねど、何れも決心の緒を固めた、此時誰てあつたか、斯んな俗謠を唄つたものがあつた。

・乗り出した舟だよ、果て那處までも
　おも舵取り舵ぢや、互の胸に在る
重も舵、取り舵、互の胸に在る！集會條例發布の報を聞いた此時の出席委員は、唯心、傳心、互に默會して、粛然と、散會したのぢや」

「片岡、河野の兩人は、大會の決議に基づき、國會開設の請願書建白の爲に、上京すると、當時の政府は又候難題千萬なる布達を發布した、其れは、人民の上書建白は、一般の公益に關する者は、何等の名義を以てするも、凡て建白と爲し、府縣を經て、之を元老院に提出すべし、といふ布達ぢや。東京に出て居た請願委員は、之にははたと閉口した。が、陰極れば陽て、上京委員一同、一時は大に當惑したが、此の杓子定規の爲に、爰に一條の活路を認めた、といふのは中央の運動は、此の布達の爲に、頓挫したが、之を機會として、大に地盤を固むべしと、いふの議論は有志の間に起つたのぢや、その首唱者は、當時關東派の牛耳を握り、門下に幾多の健兒を養つてゐた大井憲太郎、又の名、馬城臺次郎ぢや」

「大井憲太郎といへば、今は生きてゐるのか、死んでゐるのか、頓と音も沙汰も聞へないが、明治十三四年頃の大井の勢といへば、實にすばらしいものであつた、酒を飲むと、亂暴、狼藉、仕様の無い男であつたが、平日は極めて謹嚴で、例令田舎をぽつと出た襤褸壯士でも、ふいと大井を尋ねると、整然と、羽織を纏ふて出て、食事時に爲れば、初面の若者にも、必らず膳を出だし、叮重に待遇ふので、壯士間に於ける大井の勢力といふものは、それは非常なものであつた。最も酒を飲むと、腕を揮つて、威張り初めたが、醒めて居る時は、言葉も穏やかで、如何に後進の者に對しても決して尊大の擧動が無かつた……後日は大井は、耄碌して、如何歟すると自己の功に矜るともあるさうぢやが、當年の大井は、自己の功に矜るといふやうな下劣な眞似は、藥にしたくも見えなかつた。考へて見ると、色んな事が思ひ浮ぶが、此の謙遜な、壯士間に評判高き、好親分たる大井も、唯、彼の星亨に對する

と、何時も暴慢を極めたわい』

『當時の星亨が、星亨は、遙然と遲くれて、民權黨に加入つた男であるが、その頃から、傲慢で、現金で勘定高い男ぢやつた、自由黨に加入ると、直ぐ林包明と喧嘩したので、當時有志者の中では、何んだか氣に食はない奴ぢや、との評判が起つてゐた。林包明といへば、今は何を仕て居るか知らぬが、自由黨創立の當時は幹事を勤め、年は若かつたが、學問があるといふので、黨内では、なか〳〵羽振を利かせてゐたのぢや。星亨は、ぬつと自由黨に加入ると、此の若造の林は、羽振を利かせてゐるのが、癪に障つたもの歟、喧嘩をおつ初めたのぢや、星は、自由黨に加入匆々、斯んな風であつたから、最初は有志の間には不人望であつた、が、星の事ぢやから、黨内の人望不人望は意に介せず、大きな顏を仕て、宴會の席などは、何時も上座に据つて、無愛相な理屈を駢べてゐた、之が大井には面白く無かつたものと見え、兩人相對すると、何時も喧嘩が初まる、氣の短い大井は、理屈は面倒臭ひと傍の燭臺を取つて、眞向から浴びせ掛ける、や、どうも大井と星と、同座すると、何時も斯んな騒動が起るので、他の順々しい黨員は、星と大井と同席するを見ると、そつと席を外づすのが常であつた、此時やッと後ろから抱きついて、加古川本藏の役を勤めたのが、矢張幹事でゐた、群馬組の親分宮部襄さ』

『ホ、話説は傍路へ外れたが、國會請願書建白時代の前文に戻りて、話説を續けやう。大井は禍を轉じて福と爲すの策に出でゝ、地方立脚論を唱へると、片岡も河野も、大井の動議に贊成し、上京委員は悉く之に附加して、おの〳〵地方に歸つた。政府は、一片の法令を以て、上京委員を地方に逐ひ歸へした、が、依然として壓制の綱を緩めず、地方官に命令を與へ。有らん限りの干渉を加へて、政治團體の撲滅を謀つたが、民間の有志連も、その裏を掻き、政社と政社との間に盛んに、秘密の連絡を通じてゐた、左樣ぢや、今日から言ふと、彼は秘密結社の類であつたらうよ。民間黨は嚴重なる政府の監視の下に、秘密の連絡を謀ると、今

度はまた政府も厭ふべき一種の陰險手段を弄し初めた。

『何だと思ふ！判らぬ？政治の闇黒時代に常に最も行はるゝ秘密探偵』

『探偵！、探偵！、や、どうも此の探偵といふ動物には、我輩等は實に氣を揉んだ。陰謀に熟れると、餘り此の探偵を氣にせぬやうに爲るが、最初の間――特に集會條例發布の當時は、高言放論を遣つてゐる最中にふと胸に浮んで、氣を惡くするのもは、此の探偵といふ奴の事で、それと胸に浮ぶと、愚劣な事をいふやうぢやが、話してゐる相手の顏が、なんだか探偵のやうに見ゆる。市中を往來してゐても爲樣て、曲り角に佇んだ、うろんな者を見ると、此奴探偵ぢやあるまいかと、胸どきどきであるから、宴會の席などで、口論の種といへば何時も此の探偵論、疑心に暗鬼を生じてその擧手は、鐵拳飛び棍棒舞へ、亂痴氣騷ぎ！今から思ふと、馬鹿らしいほど此の探偵の研究に浮身を窶して、いや、笑ひ事ぢやない、實際之であつたのおや、なほ後にゆつくりと、我輩の實驗した探偵談を聞かさう、詳しく』

米國の婦人記者

白柳秀湖

（一）婦人記者の職務

嘗て社會百般の事變が、女性の情的觀察によりて一種異彩を紙上に放ちたる時、社會は之を喝采し、婦人記者も相應の歡迎をうけ、男子と肩を並べて、一欄に割據したる事ありき、其後間もなく小説類が新聞社會に流行するに及びて婦人は全く其地位を失したり、當今米國に於て婦人記者として良好なる地位を獲得せるものなきに非ずと雖、概して彼等は常に男子との激甚なる競爭の下に冷遇と酷待に惱みつゝある也。

合衆國に於て、目下婦人記者として正業に復しつゝあるものは、總計三百人以下なり、之等の婦人が記者として、如何なる方面の事務を受持ちて、其地位を保ちつゝあるかといふに、現下に於ては別に婦人としての特長によりて、傭聘されつゝ在るに非ず、文筆に於ても事務に於ても男子と劣る所なきの故を以てのみ、即ち男子との競爭の下にある也。

平均大都市の新聞社には、五人位の婦人記者あり、保守的の社にて少きものは、僅かに二三人に止り、彼等は單に集會記事や、流行欄の記事を擔任する位なり、或種の新聞社に於ては、婦人を探訪記者として聘するものあり、彼等は男子と先を爭ふて東奔西走し、夫婦喧嘩より相續爭へ

點として、かけ落、盗難、火災、などに至るまで、よく現場に立ち入りて、事實を精査し秘密を訐發して報告す、或はストライキの主領を訪問し、或は資本家の談話を聽く等、忠勤をさ〳〵怠りなし、もし石炭坑の勞働者間に同盟罷工にても起る時は、直に現場に出張して、資本家新聞の機關紙なれば、極めて巧妙なる應對を以て、勞働者の要などをなだめ。利益ある談話を紙上に掲載し、而も非常に窮態に陥れるものあるを見る時は、之を以て平生の飲酒の結果となし、其無教育より生ずる自業なりとし、平民黨の機關紙なれば、極めて義憤の筆を奮ふて、慷慨淋漓の文をやるなり。茲に注意すべきは、輕業的新聞（黃新聞とか赤新聞とかいふものなるべし）には常に八人より十人位の婦人を傭聘し、他に比して多大の給料を拂ひ、最も危險にして、慘酷といふべき職務に服せしむ、時には、婦人としての品位も名譽も、拋たざる可からざるが如き場合あり、例へば、都市にて有名なる高塔などの絕頂に、街路より綱にすがりて攀ぢ昇り當時の寫眞と共に、其感想を叙して、紙上に掲載し。讀者の好奇心に愬へ、或は、纖弱なる體軀を挺して輕氣球に乘じ、高く昇騰して其光景を叙し、情感を述べ、或は絞罪に處せらるゝ罪人の最後を見て慘憺の筆を染め、以て人間の暗黑なる野性に媚び、其好奇心を挑發せむとす。

此間に在りて婦人として稍良好なる地步を占むるものは專門家なり、例へは動植物學の專門家が、季節に因みて趣味ある文字を日曜附錄に掲ぐるが如き一例なり。

政治經濟の論說に於ては、婦人の能力、到底男子に及ぶ可くも非ず、されど例外としてニューヨークのケート、フヒールド、の記者、シカゴのマオレット、サリバンの記者の如き、論說家として筆鋒銳利、議論堂々男子に比して一步も讓らず、實に稀有の天才也。

婦人は概して事實よりも構想に巧み也、故に筋肉の力によりて男子と競爭せんよりは、趣味想像の天地に於て、之と對峙するにしかず、詩、滑稽もの、物語、其他の情的小品に於て其旗幟を樹つるを妙とす、此種の婦人に於て成功したる現今の婦人を擧ぐれば、まづ、マーリー、ドッチ。マリアン、ハーランド。エリア、ペーチー。ライネ夫人等、最も有名なる者なり、されど茲に注意すべきは、婦人が文學を通じて新聞記者たらん事は極めて容易なれど、新聞記者を通じて文學者たらん事は到底望むべからざる事なり、職業の選擇者は注意すべき也。之を概するに當今米國に於ける婦人記者は、異性の特質によりてパンを得つゝあるに非ず、體力、智能、事務等の激烈なる競爭によりて、其地位を得つゝあるものといふべきなり。

（二）婦人記者の生活問題

普通婦人記者の給料は、ニューヨークに於て、一週二十弗より三十弗までにして、非常に恐るべき職務に服する、輕業的新聞に於ては一週五十弗より百弗をを給與す、されど其職業の危險にして過激なる。之に從事する事四年なれば、如何に健康の婦人と雖、必ず其體力を消耗し盡すに至るべしといふ。極めて經驗ある婦人記者嘗て人に語りて曰く、婦人記者が平均一日に十時間、一週間に六日、一年に五十週働くものとすれば。一年には三千時間に當る、而して一週三十弗の給料とすれば、一時間五十錢の割合也、今之を女教師に見るに、平均一日に九時より二時まで。一週間に五日、一年に三十六週間働くものとすれば、一年には九百時間也、今女教師が一年に千弗を得るものとすれば、彼女は婦人記者が千五百弗を得ると同じ時間の二倍を、教師就職の餘暇、己の欲する事業に費す事を得べしと、ヴエームス、アーレンは現今米國に於て有名なる女

流作家なるが、其始彼女は小學教師として就職の餘暇殊に休暇を利用して、其作に筆を染め、彼女が作家として立つまでに充分の基礎を固めたり。

新聞記者とし云へば何となく聞えもよく、虛榮心盛なる婦人が其女教師としての地位を抛ちても、此華美なる名の下に、集るは、無理ならぬ事なりと雖も、彼女が確實に筆を執りて衣食し得る迄は、決して輕卒に事を起す可からず、如何なる婦人と雖、女教師として一年に八百弗を得べし、吾人は婦人が此好地位を捨てゝ、尤も困難なる新聞事業に身を投せんとするの、心事を了解するに困しむ也。

(三)　婦人は記者に適する乎

事務の最も煩忙にして競爭の最も劇甚なる新聞記者は、婦人にとりて最も困難なる職業の一なり、婦人にして若し一度此職業を撰擇せん乎、彼小學教師其他實業外の事務員に比して遙かに早く其體質を損はしめ、其體力を消耗せしむるもの也。エドワード、ボーク曾て最も成功したる婦人記者五十名と、有名なる男子記者五十名とに就て、親しく其娘を記者たらしむる乎に就て質問せしに、婦人記者の中之れに答へたるもの四十二人、内三人は之を是とし、三十九人は之を非とせり、男子記者中之に答へたるもの三十人、盡く之を非とせり、以て此職務が如何に困難なるものある乎を察すべし。

又一記者は、婦人記者に關して、極めて趣味ある統計を舉げたり、曰く余は過去二年間に於て最も健康なる婦人記者十八人を傭ひたり、其内四人は結婚したるが、皆其職業を捨つる事を喜べり、六人は健康を害し又之に從事する能はず、二人は目下入院中にして、他の二人は、甚だ倨傲なる女となりて、吾人の下を去り、殘りの四人は目下就職中なりと。

吾人は以上の事實に徵して玆に婦人の職業としての新聞記者を排せざる可からざるに至りぬ、されど吾人は此皮相の現象に驚きて徒らに固陋頑迷の說をなし、婦人の使命てふ美名の下にかくれて、其奴隷的地位を辯護せむと欲するものにあらず。

(四)　批評

抑も近年何が故に婦人は其隱退的生活を捨てゝ、社會の表面に職を求めざる可からざるに至りし乎、其原因に二あり、一は男子の晚婚の結果也社會の貧困は男子を驅りて家をなすの困難を感せしめたると、他は機械產業の結果也、機械の精巧は腕力と技巧との價値を減ぜしめ、市場に於ける商業上の競爭は工場主をして賃金の最も低廉なる婦人勞働者を歡迎せしめたると則ち之なり。而して婦人記者の如き前者に屬するものにして、結婚の困難を感じ來れる老處女が、纖弱なる躰軀を挺して自由競爭の激浪に來出したるもの、而も此の如きは、手を折り足を挫きて荒山窮野に捨てられたる盲人の如し、其運命知るべきのみ、

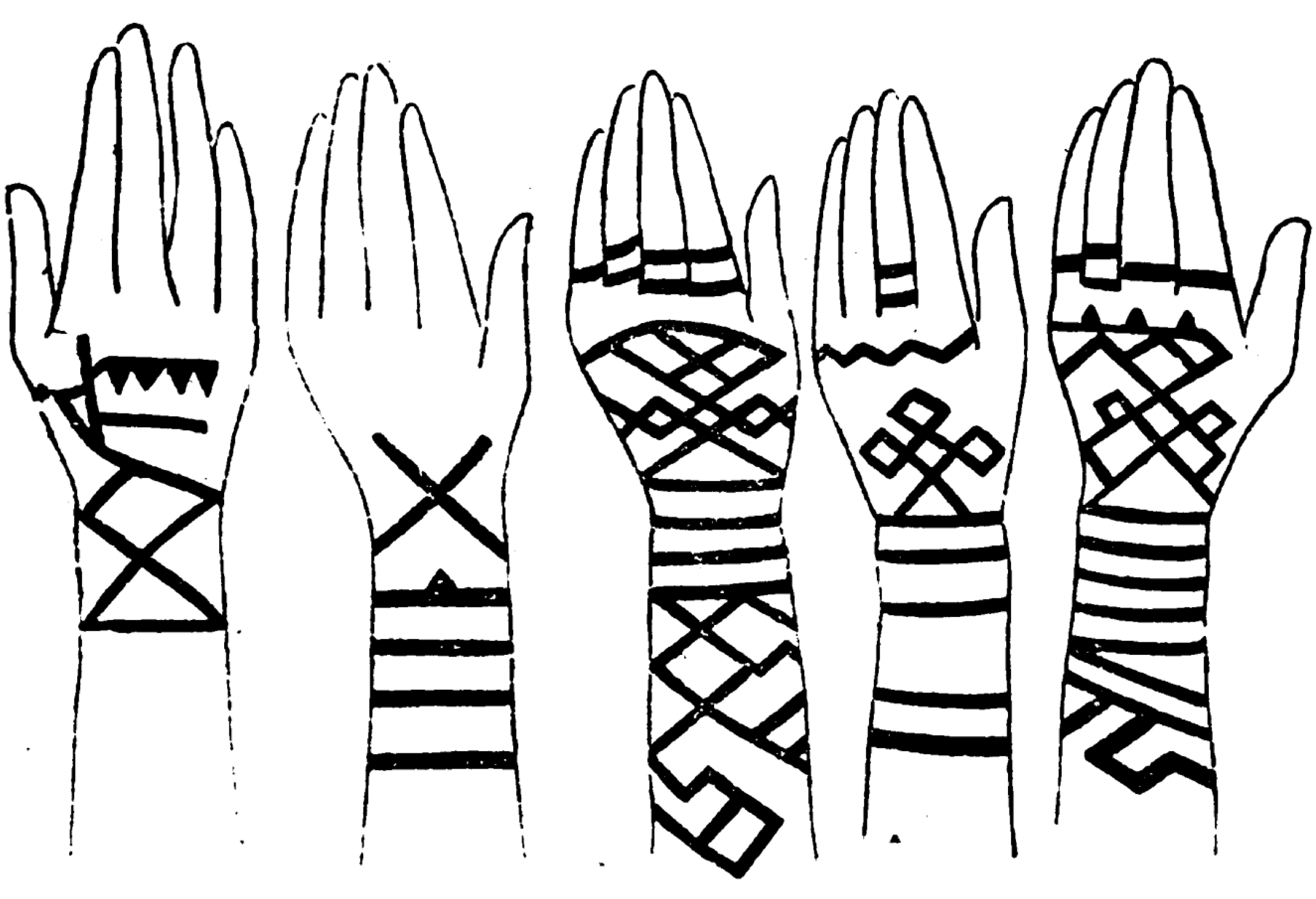
玆に於てか一派の頑迷なる保守論者は、早くも此慘狀を絕叫して、盛に婦人の人格論や、解放論を嘲罵し、婦人が人格を唱へて職を社會に求むるが如きは、之現今の家庭を殲滅するもの也、社會の單位たる家族組織を破壞するもの也、斷じて不可なりと、以て從來の奴隸的地位に滿足せよと要求す。然れども論者が今日の婦人が、所謂獨立をなすを以て、解放論者の理想を律するは不論理の甚しきもの也、今日社會現象として起れる婦人の獨立は、之婦人の解放にあらずして婦人の放棄なり、然り貧困なる社會は一部の女性を、荒山窮野に捨てたる也。此問題は社會の單位が私有財產や家族組織より革まりて、各個人の社會的自意識を以てする時代に於て始めて解釋さる可き也。今や千離万裂其統一する處を知らざ

る婦人問題も百川の東海に注ぐが如く、滔々として、社會的革命の一點に集中してやまざるものあるを認る也。

土俗雜話（二）

理學博士 坪井正五郎

○アイヌは男女を通じて耳へ輪を嵌めて飾りとする。子供の時から耳朶に針で孔を開けるとか兩面から押し平めて薄くして自ら孔が開く樣にするとかして、此所に糸を通し、それを輪とし或は內地人から得た赤い布切れ抔を結び下げる。大人に成ると金屬製の輪を嵌めるのですが、是れは蚊帳の釣り手の輪位の大さのもので、太さはモ少し細く兩端は連接せずに重なり合ふ樣に成つて居る。其一端は外に曲げ即ち直徑の方向に延ばして有つて其所に金屬製若しくは硝子製の飾り玉が着けて有る。斯樣な細工は勿論アイヌ自身には出來ぬので何れも內地人からの供給を仰いで居るので有ります。耳輪の一端は細く鈎の樣に成つて居るので、此所を耳朶の孔に差し通して半廻し廻せば丁度輪が下に垂れる樣に成るのです。常々下げた儘に爲て置く者も有るが又特別の場合にのみ下げる者も有る。耳輪の事をアイヌの言葉ではニンガリと云ひます。男子中には之を着けた儘で林の中を駈け廻り抔して輪を木の枝に突き掛け耳朶を割いた者も有る。甚しきに至つては耳朶が三片に成つて垂れて居る者さへ有ります。耳輪は生前飾りとして用ゐる計りで無く、死後も墓所に納める事が有ります。又女子中には耳に下げて居る物の他に餘分のを所有して居る之れを胸飾りに引き掛けて置く者が有ります。他にも類例の有る事ですがアイヌの耳輪の如きも



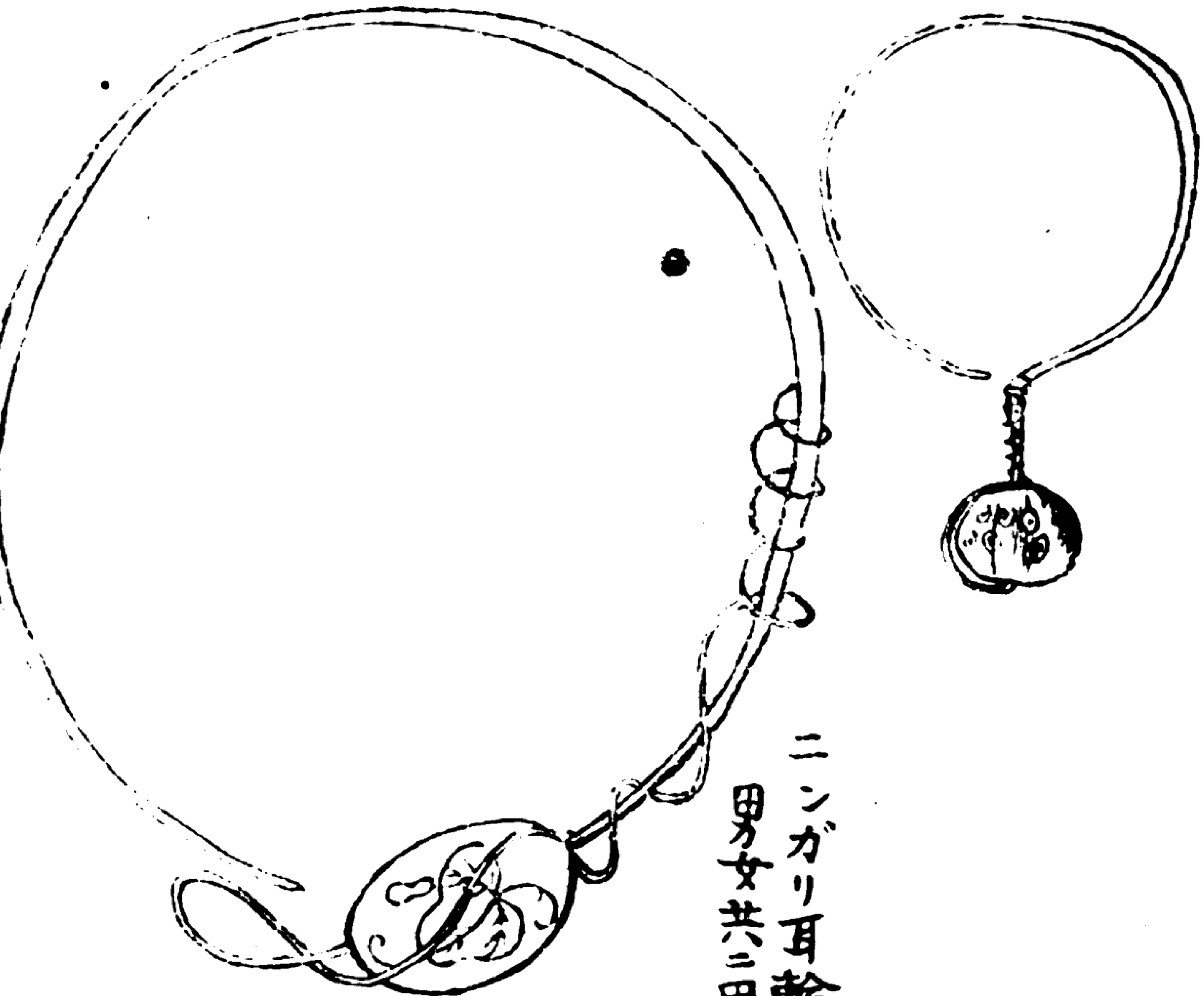
亦、用ゐる者は造らず、造る者は用ゐずと云ふ例の一て有ります。

○次には入れ墨の事を申しませう。アイヌの入れ墨には三種の別が有ります。第一は裝飾の爲めにするものてこれは女子の間にのみ行はれ、第二は信仰の爲めにするのでこれは男子に限り。第三は治療の爲めに作つた疵に



墨を入れるので男女に付いての差異は無い。先づ第一から云ひますが、此技術は誰でも出來るとは行かず、其事に長じた者が行ふので有ります。準備として入用なのは鍋、タモノキの皮及び樺の皮の薄く剝いだので有ります。鍋には水を充たしタモノキの皮を入れ、其下に樺の皮を重ねて火を點ずる。燃えるに從つて湯が沸いて澁が煑え、鍋底には煤が溜まる。術を受ける者は少女で有りますが、最初は上唇の上に少し墨を入れ長ずるに從ひ段々付け加へをして年頃に成れば口の周圍全體と腕と手の甲とに入れ墨が出來上がる。口の周圍のは恰もレスピレートルを掛けた樣な形、腕の表裏と手の甲とのは雷紋、菱形、人字形、久字形等を組み合はせた樣なもの。地方に由つては額に一本筋を橫たへたり、左右の眉を續けたりする事が有る。日本風の入れ墨は多くの鋭い針りを束ねて肌を突き此所に墨を入れるのですが、アイヌ流は中々そんな手軟な事では有りません。マキリと稱する小刀で掻き疵を作り丁度鉛筆で畵を描く樣に細かい線を幾つも造し、血の出る所をタモノキの煑え澁で洗ひ、其跡に樺の煤から出來た鍋炭を擦り付け、疵口に擦り込むのです。痛い事の烈しいのは勿論の事。本人は苦しいし、傍觀者も同情するには違ひ無いが何分にも古來の習慣で、入れ墨の無い女子は一種の不具者の樣に見える所から我慢して行ふので有ります。時とすると卒倒する。其時には冷水を面に吹き掛け、活き返ひして置いて又施す。如何に

も野蠻な風で有るので政府では嚴禁して居るのですが、どうしても禁令が行はれず、いまたに古風が存して居るのです。人の妻と成つて入れ墨をすると思ふのは誤りで實は入れ墨の出來上がつたのが結婚の出來る時期に達した印しに成るのです。男子が信仰の爲めに



ニンガリ耳輪
男女共ニ用フ

すると云ふのは肩の邊か手の拇指の付け根の邊に簡單な繪を書くので、斯くすると弓術が上手に成ると申して居ります。治療と云ふのは毒血を去るとか暴れる子供の腿を傷けるとか云ふ類で其疵口の害を避さぬ樣に墨を塗り込むのです。

斷雲片月

高瀬文淵

▲草花の辿る夢路

○薔薇といはず、椿といはず、藤といはず、菖蒲といはず、百合といはず、野菊といはず、菫、蒲公英、蓮花草、桔梗、苅萱、女郎花、四季折々の野山を飾る草花は、姿態燦亂、まことに限りなき眺めであるが、いづれか自我實現の面影を宿してゐないものかあらうか。

○我を顯はすといふことは、まさしく彼等の目的らしいが、その爛熳掬すべき姿は、そも〳〵いづれの邊より得て自己の特有としたのであらうか。

○彼等が役する材料は、等しく一樣の土塊である。美

の本源が、もしも材料にあるものならば、滿地の草木皆悉く同じ姿でなければなるまい。然るに、材料は同じでも、その形式は全く異つてゐるといふは、深い原由があるらしい。一樣を變じて多樣にすることが出來るのには、何か秘密があると見える。

○嗚呼爛熳たる美の形式。これを地上に求めて得ざれば、いづくに求めてよいてあらうか。四季折々の草花が、さながら夢路を辿る如くに、天の一方を憧れ慕つて、喜びつゝ、又笑まひつゝ、勇んで進みゆくを見れば、恐らく彼等が認め得た美の世界でもあるものか。

○これを野の百合にたづねても、たゞ笑つてゐて答へてくれない。これを菫にきいて見ても、菫は只羞澁んてばかりゐて、何も存じませぬとばかり。そも〳〵彼等の向ふところ望むところは、果していづれの邊てあらう。

▲宇宙萬有の終局目的

○彼の鰐魚を見ずや、その腦蓋は扁平で、口は恐ろしく強大てある。若夫爬蟲類が一歩を進めて、鳥類となり、獸類となり、人類となるや、その腦蓋は次第に高まり、腭は短くも弱くもなるが、獨り體格ばかりではない、精神狀態も亦次第に變じて、殘忍なものが寛厚となり、他を活かさうと思ふ心は、殺さうと思ふ心を壓し、私利的なるものが進んで公利的となる。

○すべて動物といふものは、その階級の進むに從ひ、育兒に要する時間の長さを增すもので、育兒の時日の增すにつれて、又その腦蓋の傾斜の角度を增すのである。動物の低い階級に屬するものは、匍匐し爬行するに過ぎぬが、次第に高級に進むに從ひ、終には直立し得るに至る。地を離れて、天に即く。これぞ動物植物の進化の狀態であるとすれば、宇宙の終局目的の存する所も、恐らく知りにくいことてはあるまい。

▲心の天、神秘の世界

○星學が開けるに隨つて、世の迷信の根底を殆ど破摧し盡したもの、人の精神狀態は、それが爲に極めて偏狹なものになつてしまつて、まことに落莫の感に堪えない。營利以外、名譽以外、權勢以外に、何等の目的もないやうになつたのもそれが爲だが、この物質世界の外に、世界は最早無いのてあらうか。彼の蒼々たる天の外に、天といふものは無いてあらうか。

○植物といひ動物といひ、皆悉く蒼々たる天の外な

る幽玄神秘の天に向つて其の歩を進めつゝある今の世に、獨、人間のみ物質世界の天地に身を置いて營々たるに至つたのは、近時の奇觀とも謂ふべきであらう。むかしは、さうでもなかつたので、希臘人などの考では、アポロの神や、ジュピターの神の住ふ天地もあつたのである。イスラエル人などの思想を見ると、この人間の世界の外に、エンジエルの住まふ天といふものもあつたので、印度思想では十萬億の佛土を認め、三十三天を認めたもので、我々日本人の祖先等は高天の原の存在を信じて居たのであつたが、星學の進歩は、俄然として、かういふ世界の存在を否定し、この天地をして極めて狹いものにしてしまつたのである。

○滔々たる今の世界の人間で、この物質の小天地の外、心の大天地といふものを自得してゐるものが幾人あらうか。廣大無邊なる心の天地のあることを、明瞭に、又確實に自覺してゐるといふことを斷言する者が幾人あらうか。

▲物質世界と超自然界

○物質世界の廣くして而も大きいといふことは、實に驚くべき程である、光線が一秒時間に走る速さは、三十萬キロメートル、即七萬六千餘里で、一年間に駛る距離は二萬五千億里である。然るに地球に一番近いセンタウルズ宮のアルファ星でも、その光線が地球に達するには四ケ年かゝるといふことで、最遠い星になると數千年を要するといふ次第である。

○これを見ても、物質世界の廣大無邊といふことはわかるが、しかし、我々の靈の活動の速さといつたら、到底光線などいふものゝ企及ぶべき所でないので、この廣大無邊の世界を横絶するのに僅に一刹那の時間すらも費さず、尚且、物質世界を超えて、その絶域にある理想世界に到達するにも一轉瞬の間も要しないといふのは實に駭くべき限りである。一秒時間に七萬六千餘里を走る光線が、數千年間走つても、尚到達することの出來ない星もあるといふのに、僅一刹那に之を通過する靈の働きの速さには誰でも驚かずに居られまいが、さういふ靈の働きを以て幾年も幾十年も幾百年も考へ續け、乃至無究の年月を積んで考へても考へきれない程の理想世界が、物質世界の彼方にあるといふことは、實に驚くべき次第である。

○この廣大無邊の世界に名をつけて理想世界といふのはどういふ譯であるか。さういふ廣大無邊な世界は、

その現存を實見することは出來ないが、思議することとは出來るので、理想世界といふのである。その狀態を確認することは出來ないが、想像することは出來るので、理想世界といふのである。

▲眞善美の本源

○この理想世界といふのが即心の天で、その莊嚴なるさまは、到底言葉では言盡せない。善といふも、美といふも、眞といふも、皆其の根源を理想世界に置いてあるので、縱令この地球が彗星と衝突して碎けてしまつても、理想世界には寸毫の影響さへも與へずに、その存在は永遠に無窮に無限に傳はるのである。

○エンジエルの住まふ天といふも此處のことで、十萬億の佛土といふのも此處のことで、八百萬の神々のましますところも此處のことで、我々人間の靈魂の以前住つてゐたといふのも此處のことで、あらゆる草や花などが夢幻のやうに慕つてゐるのも、矢ッ張り此處のことである。

▲天堂の回顧

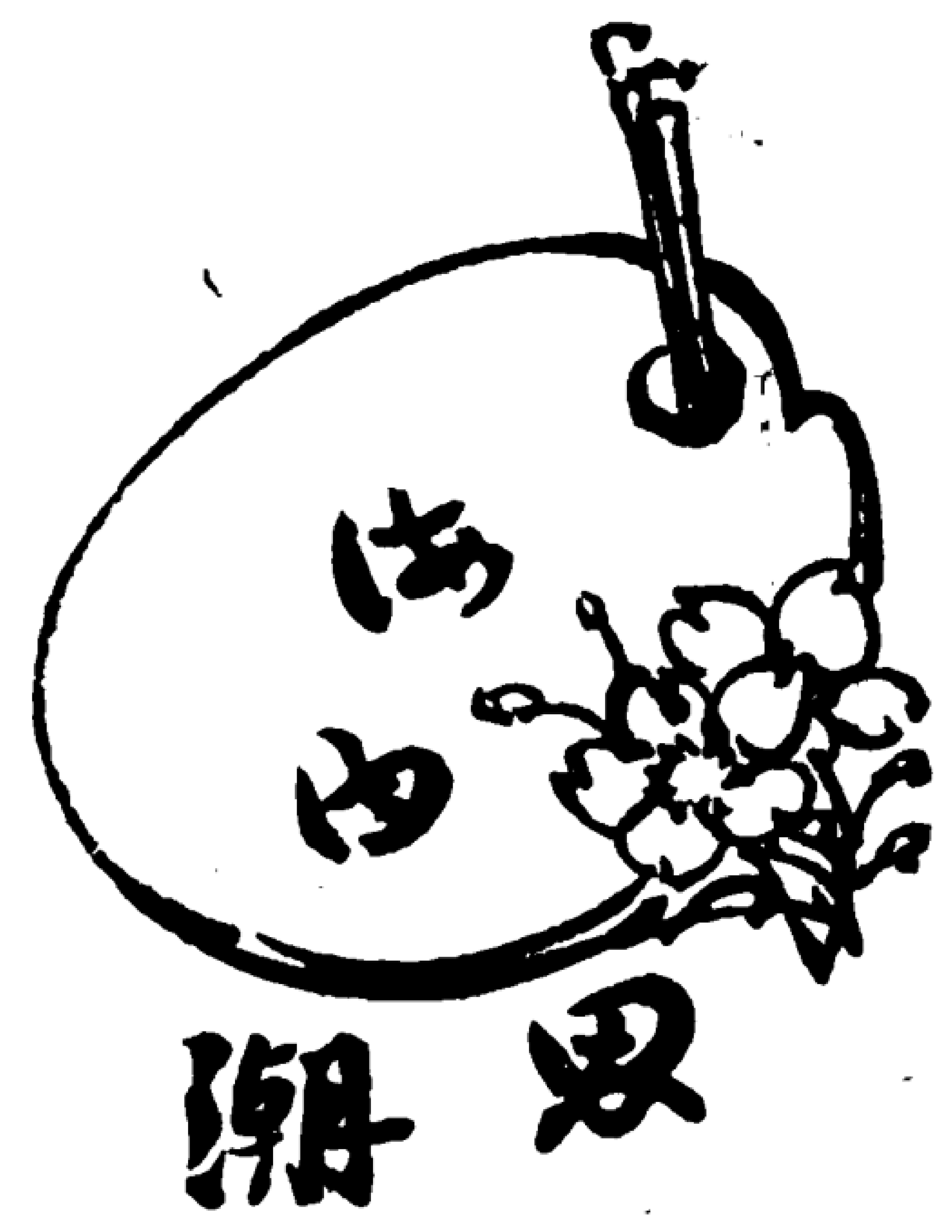
○なぜ我々の靈魂が一たびは此處に居つたものらしいと言ふかといへば、我々は、この物質世界では曾て經驗したこともない莊嚴端麗なる天使を夢想し、菩薩を夢想し、諸佛を夢想し、さうして、その天使、菩薩、諸佛は、初めて逢つたものではなく、遠い〳〵幾千萬年かの太古に於て馴れ親んだことのある思ひをせずにはゐられないので、その記憶のあることが、むかし人靈が天堂にあつた立派な證據ではあるまいか。(未完)

▲▲▲▲▲▲文士初對面錄(その十八)

かの子

▲野口米次郎樣　日本に生れて、そして外國の詩人として、大名を擧げたお方であるから、まあどんな方か知らと、そろ〳〵長ろしい樣な、尊ひ樣な、妙な感じがして、實はおづ〳〵者でお目にかゝりました。けれども流石は米國仕上げておあんなさるだけ、至つて平民的で、まづ日本流に申せば詩人らしくない性格の方だと思はれました、風采が一寸寫眞で見るバイロンのやうな處が見え、日本人らしい處は少いとつてよござんしよ。

御自分でも米國の方がなつかしいと見え、日本の空氣の不活潑なこと、興味の少いこと、米國では天地萬物が生々として居ること、殊に此夏の樂みの無限なこと等を頻りに話して居られました、談が日本の文壇に及ぶと―「何んてさあ、日本の文學は餘り文章を作へる傾がありますが、あれを文章は只意味が解りさへすれば可いとして、ありのまゝを眞寫するやうにしたら世界的の文學になりましやう、文をひねくつただけぢやあ、これかアら駄目でさあ」と云はれました、之はほんの斷片的で、精しくは伺ひませんてしたが、單に其お口振りを御紹介したまでゞす、



露都攻略論

『太陽』

大石正己

一、露西亜に致命傷を與へるまでは斷じて戰爭を繼續するといふ事、即はち露都を攻略して彼をして城下の盟を爲さしむるまでは飽までも戰爭を繼續しゆくの意味なり、之に關する財政上の考案は定らざれども、要するに此大方針に向つて國家の力を悉く集注し鐵道其他一切の平和的事業は一時全然中止し總て軍事の一方にのみ傾注する事とし同時に軍費の上にも出來得る限りの倹約をなし以て之れが財政に持耐ゆるの途に出でざるべからず、而して斯くするには差向き西伯利亞鐵道を複線とせざるべからず、破壞し去れるものは多少の修理にて足るべく如何に大破壞を爲しゆくとも地盤までは片無しとなることなかるべきが故に、此の複線工事に要すべき費用は三億位ゐにて足るべきか、同時に海上に於ては又た凡そ三億萬圓の見當にて新艦を建造せざるべからず、これ等を臨時費とせば、之れが海陸進撃の軍費として年に五億を見積り十年計畫を立つべし。予の立案の餘りに粗笨にして或は痴人の夢を說くに類するが如きを笑ふものあるやも知れずと雖も、露國の艦隊がすでに大迂回運動を爲して遙々東洋に出かけ來る以上、獨り日本のみ出來得ざる理由なきなり。而して五千萬の同胞は悉く職工となり、勤倹精勵、力の限りを盡して一片の綱、一系の微と雖も之れを海外に賣りて軍費にかゆるといふ如き大經綸に出づべし、それを上策となす。

二、所謂中策は戰局の現狀に更らに一歩を進めて哈爾賓より浦鹽を攻略したる後ち、バイカル以東を確實に我有に收むるの途に出で、然る後ち適當の守備軍を配置して、幾年にても敵れと對峙し得るの方法を取る事、然れども之れが爲めに要する費用は恐らく露都の攻略に要するものと何程の差もなかるべく、殊に守備線の甚だしく延長するが爲めに起る面倒と、此間に民心に及ぼす影響をも慮るの必要あるが爲め決して上乘の策とは云ひ難きものあり。

三、下策は失費を出來得る限り少くして永く續けるといふ事、斯くするには全く滿洲を放棄し單に遼東丼に鴨綠江畔に沿ふ一帶の地を確實に守備するに止め十年にても二十年にても敢て動かざるの途に出でざるべからず、併しながら茲まで退讓する位ならば外交にて今少しく望みある方法あるべし、日本は之れ以上に進まぬとすれば滿洲は固より再び露國の有となるべきが故に寧ろ此際日本より進みて平和談判を開始し滿洲は清國に返戻し遼東は占領のまゝ、朝鮮、サガレンは固より我れに收め又は黑龍江沿岸の地を割かしむることは必ずしも難きに非ざらんか。

假名遣改正と棒

文學博士 井上哲次郎

『國學院雜誌』

絕對的に假名遣を改良するに及ばぬといふのは、甚だ偏頗固陋の說であつて言語の變遷を認める以上は、その寫し出すべき文字の綴り方にも改良を加へねばならぬといふのは當然の理である。又特に普通敎育の上で從來の如き假名遣を墨守する必要は毫も認めないのである。言語學者國語學者などは、無論從來の假名遣によつて語根語源などを硏究することは、今日よりなほ將來は盛にやらねばならぬことであるけれども、この一部の專門學者のために國民最大多數の不便不自由をも犧牲に供するといふことは甚だよろしくない。とにかく國語の綴り方を簡易にして敎育の效果を早からしめるといふことは、いはゆる保守家を除いては、天下の最も多くの人が望む所であらうと思ふ。それ故假名遣改正といふことについては、無論異議のあるべき筈がないのです。

しかし今回文部省案の如き改正は、果してその當を得たものであるかどうかといふことは、十分硏究せねばならぬ。これについては色々我々の方で硏究し調査してをることであるから、今文部省案について一々これはよい。これはよろしくないといふことは申しにくいのです。又私がいふべき限でないとおもふ。唯かの棒に對しては、私一個の說として、昔から激烈に反對してをるのであります。まづ棒のいけないといふ主なる理由は三つあります。

第一、棒は文字でなく器械であること。

第二、棒は書きもの印刷の上できたないこと。

第三、棒では國語の音をあらはすことが出來ないものがあること。

右の三大理由について、少しくその大概を述べて見ませう。第一、棒は文字でなく器械であるといふことは、いふまでもないことで、この棒には名がないのである、長音符といつた所で、それは符牒で、文字の名でない。文字としては、名のない器械的のものが文字の中に用ひられるといふのは、甚だ不都合である。かういふ書體は、世界のどこにもないことである。符牒などは符號のやうに、或文字の傍について用をなすべきものであるのに、符號そのものが文字のあらはるべき場所に單獨にあらはれてくるといふことは、いかに考へてもよろしくない。そこで或人は「引」といふ字の旁をとつて、棒文字に代はるものを作らうとしてみたけれども、直線ではよろしくないので曲線にしてみたが、平假名の「し」の字とまぎれて、どうも甘くゆかないのです。それ故どうしても棒は國字の資格がないものといはねばならぬ。無論或特種の場合即ち洋語などの發音を直寫するために棒を用ふるのは妨ないとして、日本の國字としてこの棒を用ふるのは、甚だ感服しかねるのです。國音、棒は暴に通ず、棒論は暴論なりと世の人に冷笑されるのも、決して無理でないことゝ思ひます。(下略)

東鄕大將に對する所感

尾崎愕堂

『讀賣新聞別天地』

◎古來の英雄何ぞ限らん、若夫細觀詳察して其性行を彙類するときは、千狀萬態、筆紙の能く盡す所にあらざるべし、然れども試に大別して二種とすることを得、一は即ちハデなるものにして、他は即ちヂミなるものなり。

◎所謂ハデなるものとは、力めて自己を顯彰若くは誇揚せんとし、然らざるも時に應じ、機に觸れて胸中の英氣を煥發するを辭せざる者を指す、而して此中又分ちて三樣の類を品することを得、彼好んて自己の功業を語り、勳績を述べ、擧止騷揚、眼中人無きが如きものは第一類に屬す、或は恭謙士に下り、時に喜んて施興し、故らに弊衣を纏ふが如きは、全く第一類と其途を異にするも、深く心裏に入りて剖析するときは、其自己を顯彰若くは誇揚せんとするに於て些の異なる所を見ず、唯手段方法に積極と消極との差を存するのみ、之を第二類とす、故らに斯る手段方法を取らざるも、時に應じ、機に觸れて胸中の英氣を煥發するを辭せざる者は蓋第三類か。

◎一擧一動他人の視聽を惹き、延ては即ち濁世の警鐸となり、流れては則ち後世の史乘となる、光芒陸離、彩華爛漫、世間凡庸の徒をして、跪拜して近づく能はざるの感を懷かしむるものは所謂ハデなる英雄の事なり、但ヂヨなる英雄に至つては多く之に反す。

◎所謂ヂミなる英雄は、力めて自己を顯彰若くは誇揚するに意なきは勿論、如何なる時に際しても胸中の英氣を發することなし、是故に凡庸者流或は看て以て無能となす、唯事業の大局を達觀し、性行の全般を通覽する者にして、始めて異常傑出の人たるを解す、乃ちヂミなる英雄の本色は、些の衒氣なく、飾態なきは言ふを待たず、寧ろ自ら異常傑出の人たるを悟らざる所の處に在り。

◎之を名畫に譬へんか、ハデなるものは猶密畫の如く、ヂヨなるものは猶疎畫の如し、樹枝草葉の微に及ぶ迄曲に描寫の妙を極むるは密畫の名手なり、兒童走卒といへども亦時に其の美を解することを得、疎畫の鉅匠に至ては筆を用うる少なく、逸氣風神唯其一點一畫の上に流動す、畫に老けたる者にあらずんば决して其妙を認識すること能はざるなり。

◎形迹は倣ふべくして風神は模し難し、是れ密畫に僞物多くして、疎畫に贋品少なき所以か、世の小才を抱き、奸智を用うるの徒が、動もすればハデなる英雄を擬して當面を彌縫するを得るも、畢にヂミなる英雄を學ぶ能はざるは亦宜ならずや。

◎今や東郷大將の大名は赫灼として五洲の外を燭せり、然れども其一言一行の上に於て果して特異の點あるか、謦咳に接する者は唯其溫厚謙虛にして多く語らざるを見るのみ、功績を觀る者は唯其露國の太平洋艦隊、波羅的艦隊を殲滅したるを知るのみ、筆を操て言行の細を傳へんとする者が、其材料の匱乏に困むの風ある固に以ありと謂ふべし。

◎多く語らずといへども十萬の貔貅は其一令に聽て生命を鴻毛の輕きに比し、言行の特筆すべきものなしといへども赫灼たる大名は遍く五洲の外を燭す我是に於てか所謂ヂミなる英雄の實際を目前に睹ることを得たりと、

◎聞く東郷氏西郷南洲と鄕曲を同ふし少時其門に出入して屢々教を受けたりと、蓋し深く私淑する所ありて然るか、余の氏に於ける僅に一二回の面識に過ぎず、豈善く其性行を識ると謂はんや、但最も氏に敬服するは、氏が蓋世の偉功を奏しながら、毫も之を自覺せざるもの丶如くなるに在り、王莽の恭謙は以て愚夫愚婦を欺くべし、以て識者を欺く可らず、東郷氏の鞠躬如たるは作意の恭謙に非ずして、自ら其功業の偉大なるを知らざるが爲めなるに似たり、蓋世の偉功は悉く是れ部下將卒盡瘁の結果にして、我が智謀の結果に非ずと確信するが爲なるに似たり、功は則ち人に讓り、過は則ち自ら居るに非ずして、自ら其勳功を覺知せず、獨り部下將卒の勳勞を思念するが爲なるに似たり、天地を震撼する萬歳聲裏に歡迎せらる丶に方つて、先づ氏の胸中に浮ぶは麾下の死傷者なるべし、唯夫れ此心あり、以て十萬貔貅の死力を收むるを得べし、曠古の偉勳を奏して之を自覺せず、是東郷氏の東郷氏たる所以にして、所謂ヂミ

なる英雄の最上乘なる者に非ずや。

顧問と對韓政策

田中穂積

『早稻田學報』

政府の對韓政策に就て諒解に苦む點は、政府は昨年以來頻りに顧問官の派遣に努めて、先づ目賀田財務顧問官を派遣し、次でスチーヴンスを外務顧問とし、丸山警務顧問を送り、野津軍務顧問を派遣し、幣原學務顧問を派遣し、尙ほ此の外にも加藤增雄と云ふ人が宮內顧問になつて居り、大三輪某と云ふ人にも何か顧問官の如き資格があるようであるが、此外に林權助氏と云ふ全權公使があり、長谷川大將と云ふ守備總督がある譯て、政府はかく多數の顧問官其他の大官連をどし〳〵朝鮮に派遣するが、朝鮮に於て何をやると云ふのであるか、眞逆かに井上公使の故智を學び、一朝にして完全なる法治國を朝鮮に於て作ろうと云ふのてもあるまい、徒らに多數の官吏を派遣する結果は、其間に統一と云ふものがなくなつて、顧問官同志の間に意見の扞挌衝突を來さぬとも限きらぬ、此の如く多數の顧問官を派遣して、朝鮮の萬機を料理させると云ふ名は甚だ結構てあるが、此も空名を貪る政策てはあるまいか、やがて又た日本排斥熱の勃興を來して、困まるやうなことはあるまいか、何故に政府は名を棄てゝ實を求むることが出來ないのであるか、英國は人口に於て略ぼ朝鮮と等しいが、面積に於ては五倍もある埃及を、僅かに特命全權公使兼總領事のクローマー卿のみて、保護國として支配して居るではないか、又た人口は朝鮮の三十倍面積は二十倍と云ふ彼の廣大なる印度は、少壯政治家カーゾン卿の雙手で能く統御して居るではないか、否な現に臺灣を日本化すると云ふ難事業は、殆んど後藤民政長官の双肩に委して居つて、而かも領有以來僅か九年の間に臺灣は全く其面目を一變し、倫敦タイムスをして嘖々として其成効を稱讃させたと云ふ好成績を上げ得たてはないか、素より臺灣の今日あるのは、必しも後藤新平氏の効績のみに歸することの出來ないのは勿論てあるが、責任の歸する所を明にすれば、其結果の觀るべきものあると云ふことは明てあつて、臺灣の治績の上つたのは畢竟するに責任の歸一によるてあるが、政府は何故に朝鮮經營に對しても此と同一の方針を採るとが出來ないか、何故に名を棄てゝ實を取ると云ふ地味な方針を採ることが出來ないか、繁文縟禮的制度や法律の末節にのみ齷齪して居れば、幾年經つても朝鮮の治績の上げらないことは、佛蘭西や獨逸の殖民政略に徵して明てある。

要するに海外發展の第一義は健全なる國民の活動力に依賴すべきものてあつて、國旗が此に伴つて動く必要のあるのは勿論てあるが、干涉に過ぎ繁瑣に過ぎれば、却て國民を萎縮させ、國家に過大の負擔を被らせて、遂には失敗に陷ると云ふことは、爭ふべからざる歷史上の事實が、明かに吾々に示す所てある、吾々日本國民が雄大なる活動力を持つて居る以上は、政府の方針が虛名に溺れ浮薄に陷らざる限りは、獨り朝鮮のみに止まらず、滿洲更らに進んでは支那迄も經營し得ることは明てある。

晩近の西歐樂壇

松本亦太郎

『音樂新報』

△晩近の歐洲樂界　ことに獨逸などは他の藝術もさうですが、音樂も

非常に極端に成つて、結構も漸々偉大になつて、もう一通の刺激では人が靈惑をえず、モツアルト位では承知せず、あらゆる手段で人の肺腑をつかうとして居るのです、けれどもさすが英國は常にモデスティを失はず、佛國はまた風が違つてよほどエキスプレシヨンに秀てゝ居るやうで、どうしても各その國民性が藝術にあらはれるものです、伊太利はまたコミツクオペラ風の輕妙圓轉の調が得意で伊語と極めてふさはしく、誰しも一寸耳を傾けたくなりましやう。歐洲大陸の極端風潮の間にも

△那威のブラームス　の如きナイブな原始的の樂調は大分迎へられます、然し是は對照の爲めでせうか、果して眞に價値ありとして迎へるのでせうか。劇もなかく流行ですが、沙翁劇など讀んで想像したのと、實際とは餘程違つて居ました、折角の獨白を早口にわけもなく云つて仕舞つたり、さうでもと思ふ處を長々と述べたりしますかられ、然し日本から行ッたら矢張り何より、

△歐劇の美くしさ　に興を得るでせう、只少し花やかすぎ大規模すぎて、單純になれた邦人には濃麗すぎる嫌ひはありますが、それとても少し馴れると餘程面白くなります、尤もその歌などは其國人にも解らぬ位、只聞てはとても解されませむ、ですからテキストを讀んで行くとか、其場でくりひろげつゝ見るといふ風に是非なりますので、これも矢張り樂季(十一月から五月)のうちが、一流の妙手が出ます、が二流以下は年中興行して居ます。寄合は普通音樂はありません、尤も長い休憩時間の中などはことに別のそれ丈で終る一曲を聞かせることもあるのです、オペラもいいですが、

△オラトリオの妙　もこれに讓りませむ、宗教樂ですから寺院が一番ふさはしいのですが、たまには舞臺でもやります、寺院ではオルターの後ろに居る合唱隊の歌聲が、大きい圓天井にみなきッて耳に入るそれが眞に深く人を動かすもので、獨逸などでも中々盛に迎へられて居ます。

歐洲大學では、

△音樂史の講坐　が大概開かれて居ます。その實例のため樂器で説明することもあり、ことに名家を招いて大學内に音樂會を開くこともあります、勿論入場料を取るのですが。音樂會は大凡夜の七時頃からですが、その前日若くは前々日午後に練習會があつてそれにはやすい入場券で聞かせます、これらも音樂普及には與つて効あるに相違ありません、何しろ歐米のうちは樂人がドシく漫遊して絶えず妙手が現はれますから都合がよいです、日本などはよし來ても中々あひますまい、私が獨逸に居た時、

△ライプチヒに二樂生　が居て交際しましたが、その一人の男の方はショヨペンと云ッたやうな佛蘭西向がすきて、女の方はごく飾らぬ溫和しい樂風を愛てゝ居ましたが、同じ曲を二人が奏してこれ程違がふものかと實に個性發現の多大なのに驚きました、日本の洋樂家などはまだ形式をたどる計りとみえてそれがないやうです、何しろその學生位の音樂は日本に歸つてまだ聞いたことがありません、上野樂堂でも決して。……またれるのは天才ですれ、素人でも、

△妙曲を聞くときは　自然くにそれを心に印して口に現はしうる位になるもので、妙調を聞いて二三年といふものは心に止つて忘れられないのです、ですから留學生なども外國から歸つて海外の妙曲を心に記して居る間は、作曲演奏にも自分と自分を刺激して推奬してきッと効果がみえませう、がそれがだんく又日本の水に安んじて忘れて來るとだめです、どうも獨逸あたりて絶妙の音樂に接すると、何ともしらず心動き、きく間も聞きし後も様々の情感むらくと湧くを覺えましたが、歸國後未だ嘗て一回も此の想を得られませんのは遺憾です、

△音樂と心理學との交涉　ですか、獨乙のスツンプといふ人は音響(トーン)心理學(プシコロギー)を書きましたが、其後も切りに音から凡ての精神現象を說明しようとして居ます、が何しろヘルムホルツほど斷面の硏究をした人はありません、心理學では音樂といふ複雜のよりも音響といふ單純の方に開拓されつゝあるので、今後聲音に關する心理的硏究は心理學中の新方面で面白い發見があるやうです、硏究はます〳〵專門的に深くなりますから美學中の一分科として音樂を專攻したら面白いでせう

獨佛竟に戰ふ乎

『萬朝報』

輕快なる佛國人は、今や相逢ふ每に獨逸と戰ひを看るべきや否やを語り、獨逸人に會へば卽ち或は肩を叩いて『足下の國と竟に戰ふに至るや否や』と言ふ、此の半ば眞面目にして半ば諧謔なるもの知らず竟に眞面目に苦々しくなるべきや、抑も又芽出度諧謔の笑ひに終るべきか

其の原因はいふまでもなくモロッコ問題にあり、獨逸は曩にメッツに於て壯大なる陸軍演習を行ひ、暗に佛國を擠くの勢を示せしが、ロイテル電報によれば佛國も亦獨逸國境の軍團の兵を充實し（戰時組織と爲せしものならん）且士官の外出を禁じたりといふ、果して然らば兩國の形勢は恰も一昨年秋冬頃の日露對抗にも似たらん乎、イナ其れよりも更に切迫したるものあるが如し

最近に獨逸はモロッコ問題を列國會議に附せんことを提議したり、而して伊墺諸國は同意したり、米國も亦恐らくは不同意には非ざらん、モロッコ國王は素より獨逸藥籠中の代物也、佛國は其外相デルカスセ氏が曩にモロッコ案件を決するや、英國と協商しながら獨逸を疎外したること是れ實に今日獨逸が憤激して而して事を起せし所以なりとて、デルカスセ氏先づ非難の燒點となり、竟に職を去りて首相ルーヴイエー氏餘儀なく其の後任を兼ね、以て獨逸を緩和する新局面を開かんと努めたるも、獨逸の壓迫は益す急を加ふるのみ、英國は佛國との情誼を重んじ、暗に佛を援けて獨逸に當らんとしたること一再に止まらざるのみならず、獨逸の提議せる列國會議說をも斷々乎として拒絕したり

ロイテル電報によれば、英國十分に佛國の政策を支持すべき保證を與へしに拘らず、佛國政治界の憂慮甚だしきを以て、ルーヴイエー氏は獨逸の提議（列國會議を開くの）を拒絕することを躊躇しつゝありといふ、此事實は殊に注目を要す、吾人の視る所によれば、英國の援助あるに拘らず佛國政治界の痛く憂慮するは、獨逸陸軍の勢威依然として雄大にして佛國の陸軍到底之に當る能はざること明暸なるには非ざる乎、佛國陸軍には依然腐敗の形跡あるやの說絕えず、隨つて獨逸の陸軍に抗拒する力なく、英國假令佛國を助くるも、其の海軍のみを以てしては奈何ともすること能はざるには非ざる乎、佛國の獨逸を抑へんとして最も恃む處は露國なれど、今や露國到底恃むこと能はず、是れ佛國政治界の著るしく憂慮して、而してルーヴイエー氏の敢て獨逸の提議を拒絕し得ざる所以には非ざる乎

果して然らば、佛國は恐らくは敢て戰はざるべし、而して竟に獨逸に屈せざるを得ざるべし、俊敏にして多智多謀、功名に急なるウヰルヘルム二世とビウロー公とは、今や坐ろにウヰルヘルム一世たりビスマルクたるを夢想しつゝ揚々得色あるなるべし、假令ウヰルヘルム一世、ビスマルクたるに至らざるも、尙ほ佛國を挫き英國に鼻明かしめて、少くも獨逸の勢威を阿弗利加に發揚するの名譽を有し得べし

之に就けても吾人は轉た日露戰爭の結果の大なるを感ぜざるを得ず、

露國若し日本と戰はず、假令戰ふも今日の如く大敗せずんば、彼れは尙ほ有力なる佛國の同盟たり、必ず獨逸の背を抑へて動くを得ざらしめん、ウキルム二世ビウロー公等智ありと雖も如何ぞモロッコ問題を捉て波瀾を捲起し得んや、唯だ露國大敗して而して民心離叛せんとし、動員令をすら實行する能はず、佛國を助けんと欲するも能はずして、歐洲に於ける勢威全く地に墜ちぬ、ウキルヘルム二世とビウロー公が之を看破して佛國を挫かんとするは、實に機を捉ふるに敏なるもの也、吾人は又之をも感嘆措かざるもの也

然れども智者は智に敗る、獨逸竟に完全に勝者たる光榮を得べきや否や、ロイテル電報曰く『英國が獨逸の提議を峻拒したるより形勢は稍や複雜となれり』と、吾人は絕えず此の形勢を凝視す

媾和條件の基礎とすべき擬案

『日本人』　國府種德

覺書第一

一、媾和の時期は、尙早しと認む。

若し米國に對し、友誼上萬已むを得ずして媾和する場合には、現時の狀態に於て左の條件を主張するを要す。

一、滿洲東三省に於て、未だ我れの占領に歸せざる吉林、黑龍江兩省よりは、直ちに撤兵を實行せしむること。

一、薩哈連、沿海州、東隴加より白令海峽に至る一帶の土地を割讓せしむること。

一、貝加爾湖以東の兵備を解いて、一切の兵員を其以西に撤退せしめ、露國若し其以東に出兵することあらば、日本も亦直ちに出兵するの權利を確保すること。

一、黑龍江の航行權、漁業、及其他必要の特權を我れに收め、之が行使に必要なる一切の條件を我れに確保すること。

一、東淸鐵道の本支線及烏蘇里鐵道を我れに引渡さしむること。

一、滿洲東三省に於ける露國の既得權を拋棄せしめ、併せて將來に於ける一切の發言を許さゞること。

一、烏港并に沿海の各要塞、及諸艦船等は、一切直ちに之れを我れに引渡さしむること。

一、軍費及戰爭直接の損害に對して、五十億萬圓以上の賠償をなさしむること。

一、償金の支拂を畢るまでは、露領後貝加爾州の主要地を我れに占領すること。

一、中立港に竄入せる、武裝解除の諸艦、及之れに附屬せる諸船舶は、一切我れに引渡さしむること。

以上は媾和條件中に必らず記入せらるべきを主張す。

一、兩國全權會合の場所は、之れを馬關若くは長崎に定むること。

一、豫備條約の締結までは、總べて休戰を許さゞること。

一、韓國に關しては、一切露國との平和條件に關係なきものとす。

尙參考として第二覺書あれど、氏の意見は第一に重きを置かれたれば之を略す

新小說

第拾年第七卷◉七月一日發行

文藝雜誌中の一大勢力として斯種雜誌中の覇を以て稱せらるゝ我が新小說は毎號掲載の小說に於て挿入の繪畫に於て常に超然として現下の時流に卓絶す

▲小說▼

愚物……德田秋聲
喜劇 婿選み……薄田斬雲
想はれ人……生田葵山

英詩……野口米次郎
病間錄……綱島梁川
紫田是眞翁……森大狂
富土紀行……前田曙山
小皷吹……泉鏡花
近時の新體詩……後藤宙外
空色の研究……中島孤嶋
壺の石文……大塚甲山
蟋蟀にあたふ……松山白洋
北の森かげより……澤村胡夷
かたみの搖籃……永井萍花
寧齋君と和歌……佐々木信綱
鳴呼野口君……白岩子雲
神樂岡の麓……兒玉花外
鳴呼不孤君……高須梅溪
追憶談……中村春雨
道の人平尾德五郎……齋藤弔花

天國……平野栢蔭
最後の書信……林田春潮
伊達騷動の芝居……伊原青々園
秋の小男鹿……幸堂得知
眞砂座の『金色夜叉』……山岸荷葉
日本女子大學瞥見……鵜群堂主人
裱具屋の今昔……樋口二葉
稽古所……太田宙花
避暑旅行用携帶品……流行子

歛入に付問合の文（言文一致書簡文）……泉鏡花選
懸賞吟詠
煩悶（和歌）……與謝野鐵幹選
盆月（俳句）……安藤和風選
素人演劇（狂句）……前田曙山選

七夕（表紙）……久保田米齋
愚物（口繪）……渡部審也
清風（時世粧）……山中古洞
繪葉書（二葉）……佐藤素洲

實價
壹冊貳拾五錢郵稅貳錢◉六冊前金郵稅共壹圓參拾六錢◉十二冊前金郵稅共參圓五拾六錢
郵券代用一割增

發兌元 東京日本橋通四丁目角 春陽堂

詞藻

をつとの心

かの子

(禁轉載)

第一

宵に少しばかりいたゞいたものですから、つい知らぬ間にうと〳〵と眠つたと思召せ。

今からそんな無分別な、大膽なことは出來ませんが、私もまだ紅いてがらを掛けたばかりの、まあ世間見ずの箱入でございましたし、彼の方も二十歳になるやならず、互に戀しいなつかしいと思ふより、何んの考へもあつたのではありません。追懷しても慄といたします。

それでも平常なら、寢入りばなに一度や二度聲をかけられたつて、なか〳〵氣の着くのではありませんが、夢のやうに嬉しさ戀しさのうちにも、また恐い〳〵物におそはれるやうな氣がして、眠つて居ながら、胸がどき〳〵として居たやうに思ひます。

どん〳〵と表の門を叩く音が遠くのやうに聞えましたが、それも夢のうち、彼の方が寢返りをしたの

を抱えたまゝ。――すると此時

『お孃さん、お孃さん、旦那さま！』

と、けたゝましい呼び聲、はつと思つて起き上ると、細くしたランプの薄明り、お種といつて私より五ツ上、幼い時分からの仲好で、私には極親切な者でしたから、嫁入る時に生家から連れて來た、いはゞ私の腹心、可愛い、美しい、怜悧しい娘でございました。

表の門は又どん〳〵と一しきり。丁度私の耳の傍で叩いてるやうに近づきます。

『さツ早くお片付け遊せ、さとられたら貴女大變』

そのうちに彼の方も飛び起きて、眞青になつて部屋をぐる〳〵と一廻り、御自分の物を引さらへて一目散に裏庭へ、

『あれ危險い！』

と追縋るやうに出て見ましたが、お姿はもう見えませんでした。

第二

洋服をお脱ぎ遊すのを、お種と私がおづ〳〵しながら手傳ひました、旅のおつかれで一層黒くおなり遊ばした首筋から横顏、でつぷりと體格の好い。さうです、當時三十八でございました。

浴衣になつて大跏坐、團扇を使ひながら旅のお話、いつもにお變りのないご樣子でしたが、何となく自分の心が咎められ、覺られじと無理に作る笑顏、わざとらしき言葉の、おほよそ聞き苦しかつたと見

え、ビールを持つて來たお種が、それとなく私の袖を引くのでした。

『何處か惡いのではないか』

と、もの優しく旦那樣が、私の顔をしげ〳〵と御覧遊ばす。

『いゝえ』

とは云つたものゝ、消えも入りたい位、ビールを注ぐ手が震へて居ました、お種はそれでも物なれた方ですから

『別にお惡いのでもございませんけれど、旦那樣がお留守におなり遊ばしてから、どうもはき〳〵と遊ばさないのでございます、二人ツきりではお淋しくていらつしやいますから、私共でさへどうも恁うして居て、何んだか物淋しいやうで、どんなにお歸り遊ばすのをお待ち申したか知れやしません』

と不得要領なことを申すのです。旦那樣はにつこり遊ばして、

『うむ、さうだらう、誰か留守居に頼んで置けば可かつたな、その代りお土産が澤山あるぞ、明日は荷物が着くだらう、玩弄物が欲しいか、何が可いか、はゝはゝ二人とも好い兒だ〳〵』

と御機嫌です。

此夜は平常餘り召し上らないビールを二本まで拔きましたので、肱を枕にそのまゝ大鼾、私も大分元のやうに心が鎭まるにつけ、お種が奧で床を取つて居る間、頻りに旦那樣のお顔を見て居ました、もの優しくて威のあるお眼のまはり、鼻の平たく大きい、髭の澤山な、全然で支那の繪にありさうなお顔です、

私は此時弗つと此人は大層お豪い方だと、恁う思ひました。
夜はもう一時近く、夜風が折々がた／＼と雨戸を搖ぶつて居ました。私はぱッちりと眼が開いて、氣が澄んで、寢返りしても、寢返りしても眠れません。

第三

旦那樣は前後も知らず寢んで居らつしやいますが、そつと寢床を拔け出ゝ、裏の椽側、雨戸を一枚操つて、足を下ろして腰をかけました。冷いやりと心地の可いうへに、白く冴えたお月樣が、耻しい程照らし着け、庭の綠に露を置いたのが、きら／＼と光つて居ます。
餘り心地が好いので、そよ／＼と來る風を胸に受けて、庭下駄を穿いて三足四足、墨繪で畵いたやうな自分の影が、左手の方に印されてあるのを、何氣なく見ると、地に落ちて光るものがあります。影を外づして透かして見ると、これは襟飾りのピンで、先刻彼の方が落して行つたものでしやう。拾ひ取つて、其月の光に照り合ふ美しさに見惚れて居ましたが、いつしか彼の方の事を考へ出して、嬉しいやうな、悲しいやうな、云ふに云はれぬ種々な感が湧いて來ました、嘸今頃は心配して居らつしやるだらう、私と同じやうに此月を見て居らつしやるか知ら、先刻お怪我はなかつたか知ら、と只もうこんな事ばかり。
考へ込んで居ると、後にそつと人の氣勢がします、振り向くとお種です。

『まあ、可うございましたねえ、私ほんとにはら〳〵しました』

と云つて、私の手を握るのです。

其後二三日何のこともありませんでした、少し不思議だと思はぬ事もなかつたのですが、戀する身の果敢なさ、彼の方のことより外、私の頭には何物もありませんでした。

第四

長々の留守居をした褒美に、今日一日はお種と二人で歌舞伎へ行けといふお許しが出ました。旦那様が此日はお留守番。

早くせんと桟敷が無くなるぞ、と旦那様が度々の御催促、私もお種も、仰しやる迄もない早く〳〵と思ふのですが、お化粧に手間がとれて、俥に乗つたのが彼是れ十一時でした。

車夫が梶棒を上げるとき、威勢の好い俥が一輛、我家の玄關に着いたので、見ると媒介人の曾根といふお爺さんです。生憎だと思つて俥から下りて挨拶するうち、旦那様も奥から出て來て

『今日は女共を遊ばしてやらうと思つて、私はお留守居番です、丁度幸ひ、さあこちらへ。お前方は遲くなると可けないから、失禮して』

『どうぞ、お關ひなく、お留守番は此爺が、へゝゝ』といふのでこれ幸ひと隣の婆さんに萬端頼んで置いて歌舞伎へ參りました。

美い男と女の出る時は、あれが彼の方と私だと思つて、身に染々と應へましたが、其僻何んの演劇で

あつたか、それさい些つとも分らなかつたのです、お種は始終泣いたり、笑つたりして居ましたが、私は彼の方のことばかり胸に浮んで、若しや見物の中に見えはせぬか、後妻の似た人が居れば、あれではないかと思つて、お終ひには氣がぼうとしました。

其夜歸家つたのが十二時近いのでしたが、旦那樣はまだ起きて、湯を沸かして待つて居らつしやつたのです。酒の香がぷん〳〵として居ましたから、召し上つたのと聞くと、うむ呑んだ、と仰つたけれど、今夜ばかりはお顔が靑く見えました。

さてその翌日、此日程叱られたことはありませんでした、いゝえ平常から高い聲もなさらず、惡い顏もなさらないのですから、これが叱られ始めの叱られ終ひでした、そして私にとつて忘れることの出來ない日でありました。

今日は會計の整理をするから、お前の方の金錢の出納はどうなつてるか、帳面を出して見い、と仰るから、

『帳面なんかございません、所夫に頂戴いたゞけ使つて行つて居ります』

といふと、乾となつて

『お前は一家の主婦でありながら、そんな不仕鱈で家が治まつて行くと思ふか』

と、たつた一言でしたけれど、旦那樣のお顏は今日に限つて鬼のやうに恐ろしくなりました、そのまゝふいと起つて、何處かへお出かけにならうとするもんですから、私とお種が頻りにお詫をしてお引き止

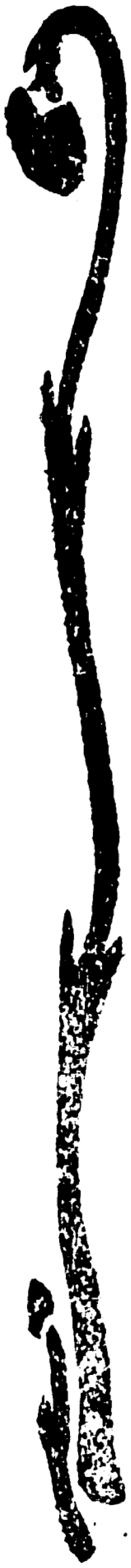
め申したのですが、要事があるッと仰つて、すた〳〵とお出かけ、暫らくすると例の媒介人のお爺さんが來、旦那樣も歸つて來、夜になつて生家から母が來、どや〳〵と混雜しました。私とお種はうろ〳〵と彼方の隅へ立ち、此方の隅に坐りして、ものに魅まれたやうなかたちでした。

とう〳〵、まだ若くて妻たるの資格がないといふことて、其夜のうちに生家へ連れて歸られました。いつそ其時は悲しくもなく、このゝち彼の方と一緒になるのに都合が可いと思つた位でした。併し彼の方ともこれがお別れて、生家へ歸つてからは逢はれもせず、手紙のやりとりも出來ず、紀念のピンが私の手にあるばかりでした。其當時の戀しさといふものは、一時は病床に就いたこともありました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

それから後、もう三年になります、私も餘程物事が分つて來ましたと見えて、此頃では先の旦那樣のお心が知れゝば知れる程、有り難いやうな、哀しいやうな、時折、涙が溢れて、おなつかしいと思ふことがあります。

彼の方と旦那樣、どちらが戀しいかと比べますと、矢張り先の所夫でございます。(をはり)



自然兒

吉野臥城

早乙女

皐月眞晝の照雨に、
くれなゐ深き杜鵑花、
綠の蔭に午餉する
早乙女の頰にかがやきぬ。

あけの襷に紺あゆひ、
白手拭の頰かむり、
その鄙びたる姿にこそ、
天の快樂は見ゆるなれ。

愁の動く眉の根に、
人の化粧を凝すとも、
不安にふるふ唇に、
臙脂の彩を加ふとも、
みやこ女の弱き身に、
活ける血潮のめぐらめや。

朝夕野らに働きて、
倦んぜぬ力父に享け、
馬を劬り、花鳥を
愛しむ情母に得て、
水田の村に女と爲りし
幸を樂む生活かな。

戰爭に行きてわかうどの
在らぬも村は荒さじと、
皐月紅花笠に挿し、
早苗を植ゑる歌の終日。

木瓜の花

ひと具して、朝あけ、
ゆく春のさまよひ、
草青き野のみち、
五歩に立つ駒鳥、
可憐の羽、日に照る。

「一つなり、さあれど
雌はあらむ、ひねもす
雛抱きて巣守るや。」
「さなり今、巣に、雄の
歌を遠にか聞く。」

野を過ぎて岡のべ、
み手とりて立てば、
草の香のときめき、
二筋のながれ
逢ひ合ひてゆく水。

「堰く石にさざらき、
言荒の瀬ばしり、
詩の思語るや。」
「あらじ、今、逢ひては、
とはの戀さゝやく。」

橋越えて野の村、
草葺の一つ家、
「垣の外の葉がくれ
緋にもゆる花木瓜、
ゆく春ぞたゆたふ。

「歌の君、好むや。」
「そぞろなりわが胸、
醉ひごこち夢見る。」
とこしへぞ、み胸に
花をこそかざさめ。」

石

路にまろぶ石塊、
花散るに春知り、
日燃ゆるに夏の日、
霧ふるに秋知り、
冬の夜は凍つるに、
蹴られてぞ泣きぬる。
　安からぬすまひや。

ゆくりなく此の夕、
うたびとに拾はれ、
たなぞこのみ情、
常春とゐまへば、
ころころと一搖り、
棄てられぬ、川中。
　安からぬすまひや。

歌

尾上柴舟選

○　村田愛美

白百合に聖燭うすうかよひ來て神話に似たる夜は更けにけり

京の子が鼓にふくる春の夜を衣桁にかをるむら濃振袖

寂に生きてさびに死すべき身なればか怪しうも寂の歌に笑まるゝ

誰そや君南滿州の野の雲の彩を戰譜にふさはじと云ふ

人の世のそしり百千は何ならずはしき一人に胸いたましむ

百合の香のそゞろに迫る夏の夜や笑に入る子が夢うつくしき

あゝ十年君とあひ見し菫小野ひとり立つ今花だに笑まぬ

○ 中島春羊

夏木立金紋うちし駕籠据ゑて召さす清水のつめたうあれな

夕顔や柱によれるあらひ髪十九の君に月さしいてぬ

小傘して馬子とつれだつ登山道案内をかしき國訛かな

わび住や君もてなすと窓ごしに納豆呼ぶを笑ひたまふな

君も來て五歩の小庭に行水の捨水まくや夕がほの花

春を病みて草踏む力さだまらず御手にひかれてゆく朧夜や

石佛數へてのぼる奥の院なき母ぎみのおもかげ見たり

○ 林漁村

そよ風は君が頰ふき簾吹き河のこなたに琴きくわれに

母こひし故里こひし山寺の庫裏をいでゝは泣かるゝ夜かな

螢とぶ草川へだて君が家とわが家と立てり御琴と笛と

○ 岡田道一

遠き野や雲の峯立つ大椰子のかげに馬乘る黑人の群

○ 大林鶯郁

春の夜を花の宴の灯(ともし)みだれ歌うて歸る憶良を見たり

○ 鹽谷芳谿

鑿の香の古りし伽藍のうつばりや天部の繪の具色さびにけり

○ 小谷寒鴉

はかなくも花野の露にめぐまれて薊の花と咲きては出でし

○ 鷲尾義直

銀杏葉のかげうつくしき書の窓ねざめさびしみ歌書きて見る(病中)

○ 塚田柳虹

壁やれて夕風さむき城の塔涙か花のくれなゐのつゆ

並びゆく駱駝の背に日は落ちて行手二千里夕雲あかき

今日もまた君が御墓にしのび泣きぬいく度泣かば足らむ恨ぞ、

○　朝陽子

蛙鳴いて一茶興ずる夕暮や肘をまくらになる發句の數

さみどりの森の宮居にうまいせる小雀の夢を吹く朝の風

夕風に芭蕉つゆちる蓆（たかむしろ）はなしすゞしき姉が興かな

▲歌募集

七月十八日限り、東京小石川區原町百卅三番地尾上柴舟宛の事

夏野　繞石選

稻苗の根づくとも見ぬ夏野かな　脱子
戻馬にやすく乗り得て夏野かな　同
繭買と連になりたる夏野かな　同
砂たてゝ砲車ひき行く夏野かな　若梅
蝙蝠傘の白きをさして夏野かな　登思
道きかん人も見えざる夏野かな　黄村
紫に明け行く空の夏野かな　枕石
測量の標旗ひらめく夏野かな　美雲
シグナルの遙に見ゆる夏野かな　浦亭

道連の法師怪しき夏野かな　石羊子
夏野原過ぎて國道砂光る　東海子
人絶えて夏野に響く午砲かな　白江
大行李軍馬群れ行く夏野かな　鳴子
夏野十里輜重の車續きけり　英子
雨はれて草に眩き夏野かな　青龍
喰ひさしの瓜捨てゝある夏野かな　蓓人
司令部の一行すぎる夏野かな　四線
海の方へ風吹きぬける夏野かな　五遷
幌かけて遲き夏野の俥かな　同
裸馬夏野の草の雨に立つ　飛槎
藥賣の洋傘見ゆる夏野かな　同
瓦燒く烟低く這ふ夏野かな　同

選者吟

重きもの牛にひかせて夏野かな
夕立雲駕走らする夏野かな
柵たてゝ牧場を限る夏野かな

八月分課題　氷水　七月十八日限
九月分課題　野分　八月十八日限
應募俳句は東京市本郷區駒込曙町十一番地大谷正信宛の事

正誤

前號「豆の蔘つくる程畑廣からず」は「豆の花蔘つくる程畑廣からず」の誤植



評論

沈默以て國民の意向を示せ

ちよいん生

口を開いて大聲疾呼し、泡を飛ばして辯難論諍せざれば己が意向を示すこと能はずとするものは未だ以て外交の事を談ずるに足らざるなり。夫れ戀人すら其戀を成就せんとすれば、口に語るよりは素振に知らせ、素振に知らするよりは眼に物を言はするにあらずや。况んや計を機密の間に運らし、事を陰微の際に決する外交問題に於てをや。若し徒らに呶々喃々、「口開はば五臟の見ゆる通草（あけび）かな」の態度を學ぶに至つては好事逃れ去ること正さに千万里、翔鵬の翼を振うて之を追ふも遂に捉ふること能はざるべきなり。

去月六日、日露媾和の提議、端なくも太平洋の彼方北米合衆國の天地より飛ぶや、七博士の侃々たる論議となり、操觚者の諤々たる辯難となり、我國民亦一齊に起て媾和條件に對する主張を明かにしたり。是れ實に我評論壇上の一大偉觀たるのみならず、又以て我國民の國家に對する至誠至忠の甚だ切實なるを感得せしむるに餘りあるものといふべし、然れど吾人をして忌憚なくいはしめば之れ一方に於て偶々以て我國民の外交に幼稚なることを暴露したるもの、吾人は其志を壯として其擧を非とするの止むべからざるものあるなり

夫れ外交の事、隱密の間に於て虛實の術を盡すにあり。豫め眞直に我虛なるを示す、彼素より之に乘ずるの計を立てん、豫め正直に我實なるを顯はす、彼焉んぞ之を避くるの略を講ぜざらむ。彼已に我虛實を知て一步其裏を搔かば我的は外れて千里の遠きに行かんのみ

かるが故に虚と實との境をなさず、虚なるが如くにして實、實なるが如くにして虚、彼をして五里霧中に彷徨せしめ、以て徐ろに我計略を施さずんば遂に外交の實を收むること能はざるなり。殊に我計略を知らしむるの不利は獨り敵國たる露西亞のみに止らず、世界列强皆飛目長耳我動靜を察して自我の利益を計らんとするに急なり、此秋に當りて我國民たるもの、所謂五臟を吐露して彼の熟したる通草の態度を學ばんとす。吾人未だ其可なるを見ざるなり。

然らば國民たるもの皆沈默して其意向を表白することなく、政府當局者の爲すがまゝに一任すべきか。曰く否、大に否。斯の如きは我國民の膏血をして空しく泥土に委せしむるの恐なしとせず、何となれば我政府は軍事上に於ては遺算あること少しと雖も外交上に於ては未だ以て國民の信頼を繋ぐに足らず、殊に其背後には元老なるものゝあるあり、政府元老相倚りて動もすれば軟弱主義を以て滿足せんとするの傾あればなり。我國民たるもの其意向を示して彼等を督勵し、彼等を鞭撻し、彼等を威嚇し、以て其意向のある所を遂行せしめざるべからざるなり。

讀者或はいはん。汝のいふ所前後相矛盾するにあらずや、先きには則ち國民の意向を表白する勿れといひ今は則ち國民の意向を示すべしといふ。何ぞ其論旨の曖昧模糊たるやと。讀者よ、誤解する勿れ、吾人は國民の意向を言論にあらはすをこそ惡しとなしたれ、未だ意向を示すことを惡しとはせざるなり、否な意向を示すを以て刻下の急務なりと叫ぶものなり。只だ其意向を示すの方法に就て吾人の見る所大に異るあるのみ。

然らば如何にして國民の意向を示すべき。是れ吾人の論旨のある所なり。吾人は國民に向て戀人のなす所を學ぶべしと叫ぶものなり、口に語らずして素振に知らせ、素振に知らさずして眼に物を言はせよと叫ぶものなり。約していへば、沈默以て其意向を示せと叫ぶものなり。

我政友會及び憲政本黨は媾和條件に關する會議を開き其決議を以て密かに政府當局者の參考として呈出し

たり。吾人は此擧を以て流石に大政黨たるに背かざるものとなし、且つ吾人の所謂沈默以て其意向を示したるもの丶適例となすに躊躇せざるなり。

我國民よ願はくは外交の何たるかを回想し、沈默以て其意向を示し政府當局者に參考を與ふると仝時に、列國をして之を看破せしめず、以て巧みに此重大なる問題を決了せしめんことを。

恐る可き頽風敗俗

丁字樓

我が日本人は、實に奇怪なる情態に於てあり。盖し其位地あり、資力あり、學識ありて、精神健全なる可き者は、却つて健全ならず、即ち政治家、學者、代議士の輩にして、心事陋劣、非人の子にだも若かざる者多し。而して寧ろ、位地なく、資力なく、學識なきもの丶意氣昂然、大日本國民を以て自から任じ、敢て何物にも屈せざるもの尠からず。今「淫靡の風」を作れる者、また不健全なる前者にあり

今や淫靡の風、人心に浸染し、甚く其道義を腐蝕しつ丶あり。曰く裸體畫、曰く戀愛文學、曰く怪しき諸强壯劑、曰く避妊法、曰く何、曰く何、是等は皆人間の生存に對して、さも忠實らしき理由を以てして、揮灑せられ、述作せられ、調製せられ、討究せらると雖も、其内秘を窺へば實に奇怪萬狀、概ね是れ好色漢の要求に由りて、或は其賤しむ可き劣情を滿し、或は其厭ふ可き獸慾を遂げしめんとする、媒介物に非ざるはなし。

かの裸體畫や、泰西の人之を見て異まず、彼には美術として見る可き、眞價あるもの丶存すればなり。彼には多く、神として畫けるもの丶在ればなり。而して其の之を畫ける年代既に遠く、習俗亦久しく、見て以て之を怪まざるに至れるなり。我に在ては則ち然らず、年代尚淺くして、習俗同じからず、加ふるに眼高手低、唯繪畫の理論にのみ長じて、實際の伎倆必らずしも之に伴はざるもの丶、漫然又肆然、之を揮灑して、公衆の前に開展す、危いかな。

戀愛文學の如きは、百害ありて一利なし、眞に是れ青年男女を殺すの鴆毒なり。彼れ青年男女や、一たび之に觸れて、興味を感ずるあらば、之を思ふと、阿片

吸烟者の阿片に於けるが如く、其恐る可きを知るも、しかも之を絶つこと能はざるに至る。乃ち其身を墮落せしめずんば、已まざるなり。それ子女を敎育するに最も難きは、春情發動期に在り。この期や、將に燃えんとするの火を、その心の中に蓄ふるあり、之に向つて可燃性の物質を投ずれば、情炎烈々として、身を焚き心を燒く、固より其所なり。かの戀愛文學は、正に可燃性の物質、薪木の如く、石炭の如し。之を火に投ずるの害や、知る可きのみ。

凡そ强壯劑を賣るもの丶多き、今日より甚しきはあらず。其新發明を以て顧客を呼ぶ者、相踵いで起る。是等の中、もとより當に、旣倒の病客を起たしめ、已癈の羸人を健かにし、効能顯著、眞に所謂强壯劑として、其用大なる者あるべく、又正當なる目的に於て、用ゐらる丶者も之あるべしと雖も、しかも或る二三劑を除きては、名を聞きてだに、不快の感を起さしむるもの多し。今にして此强壯劑の流行を見る、其所以なくんばあらざるなり。

避妊法の如きも、近時また漸く人の注意を惹き、社會問題の研究に志すもの丶、之を云爲するありと雖も偶々是れ淫風を助長する外、多く得る所ありと謂ふ可からず。特に知らずや、避妊は一の罪惡なり、而して今日の日本は、國家膨脹の上より云ふも、將た社會改良の上より云ふも、決して避妊(出生制限)の必要あるを見ず。乃ち知る、公けに避妊法を敎ふるもの丶世に出たるは、また其所以なきに非ざることを。

之を要するに、是等は皆、怠惰にして多く爲す事なき貴族縉紳富豪の輩、または放埒にして多く世を憚る貴女僧尼書生の輩が、由て以て劣情を促し、由て以て獸慾を恣まにし、由て以て其結果たる煩累を免れんとする、不埒なる要求に對して世に生産したる者なりと謂ふ可し、吾儕は其然るを信ずる者なり。

更に他の點に付て觀察するに、或者の好色的要求は尙多く淫靡の風を助長せしめつ丶あり。抑も今の時に當りて、人の最も多く口にする所は、「武士道」の一語にして、世は先達の士に向つて、其活模範たらんことを

望むや切なり。是を以て、社會の上流に立てる者は、其身を以て一代士風の標本となし、言行苟くもせず、行住坐臥共に意を用ゐて、深く自から之を愼み、尤も實踐躬行を努めざる可からざるなり。然るにも拘はらず、顯榮の身を以て、賤妓に狎れ、彼をして鬻色賣節の陋行を甘んぜしめ、外、遠征將士の艱苦を察せざるが如く、內、妻子婢僕の指笑を免るゝ能はざる者あらば如何、一世の歸向する所、また知る可きのみ。

斯の如き、老大にして賤む可き好色漢は、今の世に多くして、屢々醜惡なる模範を青年男女に與へ、之をして相率ゐて墮落せしめんとす。百千萬部の修身書、百千萬部の道德書あるも、竟に是れ廢紙のみ、また何の用をか爲さん。

旣に然り、青年男女をして、淫靡の風に染ましめざらんとするも、社會の實情今日の如くなるに於ては、竟に其甲斐なし。而して一たび墮落の傾向を生じたる青年男女は、たとひ其身を處するに、謹愼（外形に於て）なるが如きも、決して安堵す可きにあらず。青年男女の往々病なきに病を得、其天來の健軀を損ひて、藥餌に親しむの人となるの素因は、實に是時に生ずるなり。手淫や、男色や、皆是れ是時に生ずる罪惡なり、

世の學校醫よ、希はくば學生を檢診するに當りて。それとなく手淫を戒めよ、又それとなく男色を戒めよ之を行ふものゝ生理的異狀は、汝が檢診に由りて、明確に認知せらる可きを告げ、彼等の中、ひそかに手淫、男色等の罪惡を犯せる者をして、中心慚愧せしめよ。凡そ青年男女の、病なきに病を得る者、概ね是等神祕的因由あるより來る。

それ然り、而して今日、體育を言ふ者多くして、其說は盡され、其法は極まり、また至らざる處なきが如きも、青年男女の體軀は、比較的に健全なる發育をなさゞるに似たり。思うて此に到れば、別に之を破壞しつゝある、秘密的原因の存するあるに非ざるか、聊か惑ひなき能はず。乃ち學生の遊里に入らず、婦人に狎れざるを以て、其品行善良なりとし、安堵するが如きは、畢竟世事を解せざる迂愚の徒のみ。

それ淫靡の風、今日の如く盛んなるの時に於て、學生獨り之に漏るゝの理あらず、青年男女の相率ゐて墮落する、寧ろ當然の事のみ。而して近時、學生の情死せる者あるを見しは、青年男女の墮落に付、最も適切に其實證を擧示したる者なり。世は是が爲に、警醒せらる可きか、否、否、未だ容易に警醒せられざる可し。何となれば、青年男女は情熱最も激し易き者にして、今や之を激せしむ可き理由、最も多き時に會しつゝあるも、猶彼（戰ひ）に向はずして此（戀）に來り、國民の總てが殆んど狂せんとする迄に、熱中せる事件を餘所に見て、最も陰私なる、最も痴愚なる所作に、日も夜も憧れし末、可惜身を殺すに至りしが如きは、確かに一部學生の實情を、暴露せる者なればなり。彼等は今の時に於てすら、猶さまでに公憤の念に乏しく、徒らに私情に纏はりて、心弱くも迷ひの涙に泣く、其頼もしからざる、何ぞ斯の如く甚しきを致せるや。

而して又、他の方面を見れば、旦に愛子を車站に送り、夕べに良人と埠頭に別れ、歸來之を思うて忘る暇なき老親少婦の、内に悶ゆるあり、或は親子相率ゐて砲彈を冒し、或は兄弟相扶けて銃創を裹むの慘劇、外に絶えざるにも拘はらず、一世の好尚は、靡然として奢侈的、好色的となり　近時元祿時代裝を復活せしめて、今後流行の先走りをなせるが如きは、軈て西鶴の徒が筆にしたりし、好色の風潮を誘ひ來らんとする、前兆にあらざるなきを得んや。

それ心の亂るゝは、先づ其形よりす、倩々近年流行の跡を察するに、ファッションと云ひ、テーストと云ふもの、共に概ね嗤ふ可き者多く、而して朝に一衣を調へ、暮に一帶を購ひ、切に流行に後れざらんとする者と雖も、猶往々其延び難きを歎く。斯くて其望む所は何ぞ、唯是れ一時の虚榮に誇るに過ず、さる淺ましき欲望は、必らず好色の男女に結び着けるものなり。宜なり、今日の交際場裡、眞面目の人を容るゝに堪へずして、其采配を揮る者は、出過ぎ、行過ぎの、不徳亂行の男女多きとや。吾儕は其内容を窺うて、唾棄せざらんと欲するも、能はず。あゝ外は奢侈、内は淫靡、

之を飾るに鮮美佳麗の物を以てす、暫らく俗眼を眩す可きも、斷じて識者を眯せしむるを得ざるなり。

此他、吾儕の今日言ふを憚る事情、又別に之あるが爲に淫靡の風は益々熾んにして、前途を思へば實に寒心に堪へざる者あり。憂國の士、乞ふ漫に戰勝を謳歌して、此類風敗俗を看過する勿らんことを。

文藝時觀

六月文壇

孤村主人

◎文藝倶樂部の卷頭を飾つたのは眉山氏の澪標だ。例の美しい文章で會話の技術も僅に斯道の先輩たるの資格は備へて居るが、取つた材を推擴げて往つて一篇の小說とするには、見やうが餘りに淺薄だ。其の昔から僕は眉山氏の愛讀者だ。拾年後の今日も不相變讀んで居るが、何ぞ其の進步の遲々たるやだ、いや進步と云ふ字は川上眉山氏には進呈し兼れる。寧ろ退步と云いたい位だ。別に退步と際だつて云ふのでは無いが、其の以前暗潮を公にせられた頃の眉山君を思つて今後如何に發展せらるゝであらうと豫想した念を、今日の眉山氏の上に見ると、事實惜まれ口が利きたくなる。拾年の月日の間隨分新進作家も顯はれて居るのに、眉山君は其の間何して居られたであらう‥‥あゝ僕は澪標を許しやうとしながら飛んだ事を云つたものだ。然し僕は澪標を許しやうと思はぬ。餘りに平凡で、ともすれば駄賃小說の中に見られる樣の事だもの。此の作一つを持つて恁る苦言を吐くのではない。近來の眉山氏の傾向が總て恁うであるからだ。作者はツルゲネーフが、嗜好だと云ふのに奈何したものであらう。一重に妙文家眉山氏の自重せられん事を希ふのだ。

◎田山花袋氏の名張乙女面白く讀まれた。いつもの樣ではなく時々警句もあつて、今迄より感情が變化し行く種々の心理情態に緻密な觀察を下した事があつて、一段の進境と云つてい〻。宿屋へ泊つて怪しの女を罵る處など此の作者の平生の顯はし方とは酷く違つて來た。花袋君は此の頃酷く自然派の小說を主張して居らる〻さうだが、此の名張乙女は最新作だと聞いて居るが、那麼面影は少しも無い。例の感情派の作物で、主人公にお園はいつも此の作者が描き出す婦人だ。現世には無い寧ろ理想的の優しい女性で、讀者は田山花袋君から恁る婦人を示されて嬉ぶのだ。嫉妬を押して此の憐な女性に同情する妻君の書き顯はし方も花袋一流で心地が快い。蓋し氏の近筆中の白眉の作だらう。

◎岡の上は永井荷風君の作だ。全篇を通讀して了ふて、今迄の荷風君に無い或る思想に觸れた思ひがした。書き方も從來の荷風君の樣でない。酷く主觀的な顯はし方で、空想に耽ける煩悶しきなど全然違つて來た。作者は今米國の或學校に這入つて只管文學の研究に餘念ないさうだ。近頃中此の作者の友人に逢つて聽くと、一時のゾラ崇拜の形跡は少し薄らぎ、しきりにモンパッサンを讀み初めたと云ふ事である。何でもない事柄を之丈け深く見樣とし、又見得る樣になつたのは確に其の勉强の影響であらう。卷頭に掲げられた眉山君の澪標と比較して果して何方が價値

ある作物であらう。餘の事に渡るが小說を書く態は漸次恁う云ふ態に進んで行かればならない。一つの人間を描くにも世態を見るにも、只うはつらの事柄を書き顯はしたのみでは、小說と名く價値はない。其れは只文章で書かれた一つの談話だ。小說家と云はれる資格はない。落語や講談の筆記と格別の差違は無いと云ふものだ。眉山氏を引合に出しては濟まないが、近來此の誌上に評論した荷葉君や酒汀君など新作家と云はれる人は殊に注意して貰いたいものだ。

◎しかばれ小林賦月氏の作評なし。

◎罪の悶、廣津柳浪氏の作で新古文林に二號に渡つて掲載せられたものだ。格別の事は無いが氏の一歩〳〵語調を強めて行く會話の巧な事は今更に驚かるゝ此の調子は今戸心中以來、河内屋寄生腹と今も引續いて居る氏獨特の力で、氏の作は之あるが故に、世間から歡迎されるのだ。若し柳浪氏の作から此の力を去つて了つたら奈何であらう。眞に憐なものとなつて了ふ。田山君に花袋一流の作中の人物がある如く、柳浪子の描た人物はもう丁と定まつて居る。河内屋時代の全盛時代からして今に變はなしだ。善い事であらうか、惡い事であらうか、無論惡い事なのだ。少しく研究して作に懸つて頂きたい。此の作家が天外君と比較されて時に劣つて居る樣に云はるゝ事があるのは之有るからだ。

◎目黑巷談は本郷座に演じらるる柳浪氏の脚本で以前文藝倶部や新小說に掲げられた骨ぬすみや縺れ糸などの後談だと云ふが、此の脚本中の人物にしても然うだ。柳浪氏がいつも描き出す人物の陳列場と云つていゝ。紙面に限りあるので悉はしく評する事が出來ないが、お妻には明に今戸心中の女主人公の血液が通つて居る。寄生腹の下男と、此の伍八とは同人物だ、其の外お米にしても、問にしても、お米の母親にしても、殊に晋太郞など柳浪氏自身は恁る人格でないかと思はるゝ程能く描かるゝ人格だ。之をしも格段に惡いと云ふのではないが、餘りに其の所排せらるゝ作人物が貧であるから恁くも云いたくなる。脚本は總て四幕九場、初幕の松葉屋の料理店から初まつて終りの心中の場に至る迄場面の變化も調つて居て面白い。然し源次が三人を殺しの場は餘り殺風景だ、從來の忌な壯士芝居の型を見せらる樣な氣がする。終りの心中の場を見せる迄の源次の獨白。悲劇の價値は此處にあるであらうと思はるゝのに今一息全く此の場は從來の日本劇には無かつたと云つてもいゝのであるが、何としても獨白に力が無いから、此の悲哀の光景を見せるものなら、前場の殺しの所をもつと柔く見せたなら今一段引立つてあらうと云ふ樣な無法な思ひが看客の頭腦の中に思起るては無いか、會話の妙は最早賞立てるに及ばないが、處々餘り默阿彌式に陷つて居る所があつて、柳浪子の殊更に感情を鼓服しやうとする弊が此處にも能く顯はれて居る、しかし何はともあれ目黑巷談は柳浪君近來の傑作に違い無い。

◎兄と弟は倉田櫻芳君が金色社から出版した單行本だ、モッパンソンのピエル、エ、ジヤンを譯したものであるが、全くの譯とは云はれない省かれた所もあり、書き加へられた所もあるが、其れても原作の妙味は覗はれ、此の新らしい作家が今後發動するてあらうと思はるゝ筆致が覗はれる。感情が漸次〳〵に高まつて或る破綻に近づく邊り、勿論原作の妙味であるが、學ぶ所はいくらもあつて、近頃面白く讀まれた。只例の流行語の家庭小說と云ふ文字は無くもがなと思はれた。

◎七人に顯はれた夏目漱石氏の琴のそら音は帝國文學にこと〳〵しい批評が出たが。別に其れ程ても無からう。心理的描寫が巧なので今迄夏目氏が公にせられたのとは全く別方面なもので、幻影の盾や倫敦塔と比較すると作の價値は遙に下だ。只物事を鋭い目で微細な點迄見透さうとする點は同一て、今此の作家に顯はれた傾向は此の點てある。今後如何な

るものを公にせらるゝか、吾人は不尠現今の作家に或刺激を與へられた夏目氏の今後の發展を樂しんで待つものである。

◎明星に掲載された上田敏氏の法の夕、落葉、水かひば、黄昏、銘文、愛の教と象徴詩は現今の詩壇に或る貢献をしやうと力めらるゝ形跡が見えて有難い、文學の上の技巧には氏に對して定評があるので最早述べ様とは思はぬ、只感情の念を以て迎へるものだと思ふ。

一言云いたいのは、上田氏の散文の譯しかたには此の象徴詩の樣な傾向があるので、僕は些と不思議に思つた。鐵幹氏の舞姫、氏獨特の境地だ。惡からう筈が無い。然ふ云ふものになると他詩人は何としても此の詩人には及ばない。花ならば牡丹、艶麗な調には只々感服する。北のはても氏の近作中では白眉の作だらう。晶子女史のはなたちばなの中で氣に入つたのは

かもめゐるわたつみ見ればいたかれて飛ぶ日を思ふ幸ひ人よ。(完)

人物月旦



漫評

岡倉覺三

八面生

天才は狂也との言は幾何の眞理を有するかは知らねど、少くも岡倉覺三氏に於ては狂と才と相提携するを見る、氏の天才たるは其の談話を聞き、其の著書を讀み、其の經歷によりて、直ちにこれを知るを得。かの美術院風の繪畫の我畫界に新ローマンチシズムの風潮を起せしは、一に岡倉氏の力なり、觀山、大觀の徒は氏の頭腦に支配され、自己の手腕は只其の機械となりて動くに過ぎず、氏は想像裡に大美術をなし得る人にて、其の限りなきの詩才は東洋美術を論ぜる數種の英文著述にて窺ふを得べく、此等の書或は事實の粗漏を免れざれど、斬新なる比喩篇端に湧出し、野口米次郎氏の英文など、これに比せば如何に散文的なるかを思はしむ。かゝる詩趣ある人にして今日の凡俗極まる美術界に身を沈む、常に不平の堪がたきも當然にて、氏の門下生の一人として氏の天才を認むる眼光さへなきは憐れむべし。而して氏自からも濟度しがたしといへる美術院より足を洗ふ能はざるは如何なる故かと考れば、吾人は轉た天才岡倉覺三の煩悶に同感せざるを得ざるなり。氏の狂的性質は從來の歷史に世俗の目より見て、幾多の汚點を殘したり、專心と違へば平然として忍ぶ能はず、酒色に沈溺して纔かにこれを慰めんとし、嘗て其の他家に嫁せる愛娘の一子を設けて間もなくこれ

を失ふや、氏苦悶を忍ぶに由なく、痛飲夜を徹し、内君をして絃を弄せしめ、自から立つて舞踏せし程なれば、美術院に對する處置にも世上の道德に背ける行爲多く、且つ周圍の群少、氏の名を濫用して諸種の罪惡を造り、其の責任は氏一人に蒙らせりといふ。而して氏今美術院を脫せんとすれば、美術院によりて生活せる者共氏を威嚇して舊惡を數へんとす、かくて狂的の岡倉も或は罪科の身に及ばんことを恐れ、惡因緣の絕ち難く、或は米國に遁れ、或は茨城地方に去り、苦悶を誤魔化しつゝあり。人或は岡倉氏の今日を以て自業自得、不德の結果となす者あれど、吾人は氏の天才の所を得さりし結果となす。氏元頭腦冷靜を缺き到底事業經營をなし得る人に在らず、衆人の上に立ちて、部下の從順を期し得べき素質を有する人に在らず、詩人創作家たるべき氏が、世俗の事業を企てたるが一生を誤る原因たりしなり。可惜。されど過去を悔ゆるも及ばず、吾人は氏の將來の爲に計るに、寧ろ早く再び米國に赴きて述作に從事し、我國の美術文藝を海外に紹介するを努め、所謂谷中醜術院の俗事に殘年を沒了する勿れ。

京都の閨秀畫家

長田偶得

其一　松田竹園女史

◎天賦非凡の畫才を有し、多くの人より多くの希望を屬されてゐる妙齡の身でありながら、怖るべき病魔に侵されて、最早再び起つことさへ覺束なく、其才を羨み妬む輩からは、ヤレ氣狂ひの、精神病のと嘲られて居る、松田竹園女史の身の上ほど、凄涼悲酸、これを聞く人をして傷心の淚を絞らしめるものはあるまい。

◎女史は、幼い時から畫が好きであつた計りでなく、一種超凡の天才を備へてゐた。小學校時代でも、圖畫科といつたなら、每も級中の第一位を占め、成績同校を壓してゐたが、暇さへあれば、教室に懸けてある地圖、動植物の掛圖類までも摸寫して、自分の樂みとし、他の遊戲には一切目を觸れなかつた。

◎小學校を卒へてから、兩親の言ふがまゝ、裁縫を專門にやることになり、近處の師匠へ通つてゐたが、其方の手は少しも運ばず。師匠の目を竊んでは、針の先て板に畫を描いて居たが、自分でも頻りに繪畫を研究して見たくなり、到頭鈴木松年の門に入つた。

◎松年の門に入ると間もなく、一幅の美人を描いたが、女史の筆になつた美人といつたら、跡にも先にも、これが唯一枚、その後は山水を専門に修め、東京の展覽會に出品した時には、北野の圖を描いた、今日それを見ると、女史が頻りに健腕を揮はれた昔も忍ばれて、哀れが増して來るのである。

◎女史は、松年に師事したけれども、初めから師法を墨守するの意なく、自分の興の浮び次第、勝手なものを描いて、松年から『斯麼なものを描いては善くない。十分自分の力が出來るまでは、師匠の筆癖に從はなければならぬ』と、幾度か言はれた。けれども女史は、一向頓着なく『先生の門に入つたからには、是非とも先生の眞似をしなければならないといふ理由はない。私には自分の好きな樣に描く外、如何しても人の眞似は出來ません』と頑張つてゐるので、最終には松年も、餘り干渉せず、其意の嚮ふまゝにさせたさうだ。

◎女史は、師の意見に從はなかつたにも拘らず、非常に松年の贔負を受け、數多き門人中、一番お氣に入りの秘藏弟子で、書畫會などにも、大抵伴れられて出席し、また松年が天龍寺の天井を描く時にも、始終隨行してそれを助けてゐた。

◎斯くして女史は、熱心に研究を續けたが、其中でも寫生は大の熱心であつた。松田さんの寫生といつたら社中の評判物。何か新しい製作するときには、松田さんが寫生して置くからといつて、何時も社中から、其寫生帖を借られてゐた。

◎今でも寫生帖は、山の樣に重ねてあるが、寫生に行くと言ひ出した上は、雨が降らうが、風が吹かうが、委細搆はず、少し位の病氣などは、無理推しに推して先から先へと行く。何時ぞや、皇太子殿下へ獻納する畫帖に、虎を描くといふので、豹と間違られる樣な事があつてはならぬと、虎の檻の前に、終日蹲踞して寫生したことがある。

◎女史が二村花香女史と宇治へ寫景に行つた時であつた。日は大分暮れかゝつて來たので、迚も京都に歸れないといふので、方丈に賴み込んで、寺に一泊し、其翌日は、宇治の河畔を溯り、諸處の實景を寫したが、其處でも又日が暮れてしまつて、二人は心のせくまゝ、足に任せて行けども〱、人家は見えず、やつとのこと、一點の燈火を目當に、百姓家を尋ねあて、途中困難のさまを述べて一泊を賴み、聞き慣れぬ松風に、夜半の夢を驚かされて、碌々眠られもせず。前夜宇治の

寺で『あなた方が、折角寫生に入らしたなら、紀念に一枚つゝ描いて頂きたい』との約束があつたので、翌くる朝再び宇治に引返し、色紙や短册に揮毫して、心ばかりの謝禮に充てゝそれより石山、三井寺を廻つて歸つたことがある。

◎女史が最後の製作は、某氏の需に應じて、六枚折の金屛風に、坂本山王の祭禮を揮毫したのである。これには二ヶ月餘りの日子を費したが、それを製作して居る間に、女史の頭は段々變になつたものと見え、半分は倒まに描いてあるのである。私は其屛風を見ることが出來なかつたが、實に緻密なものであるさうな。

◎其後間もなく一日、女史は筆巻だの、畫の具だのを風呂敷に包んで出かけるから、親達が『何處へ行くの』と尋ねると『これから先生と一處に、天龍寺の天井畫を描きに行くのです』と言つて、家を出たなり、夜半になつても歸らないので、宅では非常の騒ぎ。天龍寺や松年の宅に使を馳せたけれども、往方更に知れず。警察署へ捜索願を出した程であつた。處が深夜過ぎると、門外に車の止つた音がして『車夫さん此處です』といふ聲が女史らしいので、慌てゝ出て見ると、正しく女史であつたので、一先づ安心はしたものゝ何處を如何彷徨き廻つたのか、顔は蒼ざめ、髪を振り亂し、衣類さへ泥に塗れてゐた。それからといふものは、寢たり起たり、絶えて事を採らず、氣の向いた時小児に戯ら書きをしてやる位のものである。

◎女史が盛んに書いた時分に、依頼者の多くは、何時も『無落款で』との條件を付帶させて來る、といふのは松年の社中で、最も師の筆意を得たのは、女史であつた處ろから奸商共が松年の贋作をなすべく、女史を利用したのであるが、今は其無落款のものも、得られなくなつたのは、實に殘念の次第である。

◎『人は何事をなすにも、二十歳から二十四五歳までに、成功の緒を開かなければ、一生望みがないものである』と、女史は口癖の樣にいつてゐた。また病氣になつてから、少し氣の靜つた時に『畫家といふものは、何處か一調子普通の人と變つてゐなければならぬ。それて妾も斯麽なんだ』と言ふさうだが、女史が彼樣な病に罹つたのも、ツマリは普通の人が、一生涯に使ふべき程の精神を二十四五までに使ひ盡した爲であらう。僕は寧ろ女史が早く名を成したのを悲しむものである。

◎僕の京都にあるとき、女史の心事に同情するの餘り、其病を堀川の寓に訪ふたことがある。其時は至つて丁

寧に挨拶はされたもの丶、山と問へば川と答へ、談話更に要領を得ず、唯だ容姿如何にも凛々しく、双眸怪しく光るのみ。紀念にとて、女史の母が唐紙に芭蕉を描いたのを出して、僕に見れたが、女史は何故か、其落款のある所を址を裂ひたのである。

◎僕は繰返していふ、女史の半生は、實に凄凉悲酸の生涯である。けれども女史が、また以前の女史に復へり、其遒麗なる筆を揮つて、美術界の耳目を驚かすの時があるであらう。夫は必ずある。僕はそれが事實の上に現はれることの一日も速かならんことを、蔭ながら祈つてゐるのである。

鬼面魔語

酔美生

▲我戀人をして苦しさに堪へざる程強き嫉妬に陷らしむれば終に其愛をも失ふに至るべし。されど弱き嫉妬に惱ましむるは却て永く其の戀を繋ぎ置く秘訣なり。

▲自惚の快味は婦人獨り鏡に向て我顔美なりと思ふ時に極る。

▲年若き男女の學生が同じ日に同じ途にて同じ人と二三度も相逢へば遂に全じく戀愛の人となるぞとよ。扨ても〱熱情に富める ものかな。

▲自ら美人と思ひ、自ら色男と極め込みたるものは容易に結婚することを望まず、未婚の自由なる中に普く世上の男女を惱まさんものと苦心するものぞ。

▲女はしほらしきこそよけれ、放屁をしても顔も赤めず、却て生理論でも持ち出しそうな今の女學生我之を奈何せん。

▲苦勞性の人はどうしても苦勞を脱する能はさるものぞ。一つ遁れて又一つとは何もよく苦勞性の人に當て嵌まるを覺ゆ。

▲美人は熱帶の如く天惡多きに過ぎて却て薄命に、醜女は寒帶の如く天惡少きに過ぎて是亦薄命なり。美ならず、醜なすざるものは溫帶の如く却て人生の幸福を味ふるものぞ。

▲法學博士土方寧　嘗て隅田川に於て大學の端艇會あるや、吾妻橋より一錢蒸汽に乗る、船中人已に滿ちて立錐の地なし、事務員營利に急にして乗客の迷惑を顧みず、益々人を押し込めんとす、客の之に抗議をなすものあるや尚定員に滿たずと稱して「未だ〱積めます」といふ、博士憤然として曰く、未だ定員に滿たずといふか、余巡査を連れ來りて船中の客員を數へしめん、且つ積めますとは人間を荷物と全様に心得居るにあらずや、余今巡査を呼び來らんと迫る、事務員其見脈に恐れて直ちに船を出す。

▲今の學者中に感服すべき人二人を見たり、一は法學博士岡田朝太郎氏にして一は文學博士坪井九馬三氏あり、二氏共に說く所興味溢るゝが如く、よく人をして愉快の間に學理を悟る所あらしむ。これ二人共活人間を對照として學問を研究しつゝあるによるが如し。

▲尾崎愕堂いふ「東京電車の中にある三井呉服店の廣告皮の臭きこと實に言語に絶す、而して獨り其臭氣の惡しきのみならず、必ずや衞生にも害あらん 然るに一人として公然之を攻擊するものなし、日本人は妙な人種なり」と。

社會

深川公園

二葉生

公園の内容

深川と云ふとゴンと撞く八幡鐘に鳴り響いた意氣な地、今の梅干老爺が昔の驕奢を繰返す談柄となつて、爲永春水の小本などにも戀二タ川と呼び、當時繁昌の光景があり〳〵と傳へられて居る。維新以來の深川は昔日の面影消えて、僅かに公園の名は迷信家を釣り寄せる、不動明王の在るによつて世間から忘れられぬまでゞ、由緒ある八幡樣も意氣の代表者と唸つた鐘も、殆んど顏色なき光景となつて了つたは、是れも時勢の然らしむる處と諦めるより仕方がない。

扨て深川公園の事を記するには、先づ公園の歴史から調査せねばなるまい。富岡八幡神社が公園となつたは明治六年の六月で、而して園内に梅や櫻を植ゑて風致を添へたは、十五年の末から十六年へかけての仕事であつた。此の坪數一萬九千三百三十餘坪にして、其内に建られてあるものは、八幡宮、不動堂、森稻荷、大國主神社、天滿宮、車折神社、祖靈社、舞殿、太子堂、客人太神社、鹿島神社、花本祠、宿禰社、粟島社、淺間神社、大島神社、稻荷社、住吉神社、七渡社、琴平社、永代寺、取持地藏、社務所、神馬舍、額堂、小學校、寫眞舖、大弓店、花屋敷、汁粉屋、茶舖、四阿屋等である。外に碑の建つこと二十二、電氣燈三、腰掛臺園内に四ヶ所、共同便所同じく五ヶ所ある。

八幡宮の當所に建立されたは、寛永元年長盛法印なるものが靈夢に感じて創立した由は舊記にも見えるが、全く築造を終つたは寛永四年と云ふ說が信に近い。もとは永代島富岡八幡と云ひ、永代寺が別當であつた。此宮は天和二年の十二月に延燒したが急に造營の運びに至らず、五年を隔てゝ貞享四年に經營して翌年四月に竣工し、其後數々大修繕を加へ來たが、嘉永初年には頗ぶる廢頹したので時の別當周晴が、奮然大修補を圖り安政元年に至り其功を竣へ、輪奐の美昔日に倍せ

ることゝなつた、是れ實に現今八幡堂の社殿である。

不動堂は明治十四年六月三日の入佛供養で、下總の成田山新勝寺の出張所になつたのである。この尊像は、グッとの古は日本橋坂本町にあつて、天保十二年十二月淺草藏前の八幡社内に移し、明治二年九月深川の吉祥院へ轉じ、夫れより今の處に堂宇を建築して移したのだとのことである。

是等の總べてに依つて深川公園は保たれ、淺草公園のやうに繁昌しないまでが、或る點に於ては彼れよりは稍や清潔な處がある。けれども煎じ詰めて見ると、赤裸になつて居るのと、衣服を纏ふて居るのとの區別があるまでゞ、これが果して清潔だやら、將た彼れが不潔だやら、其斷定には最も困難である。

公園の賑ひ日

今の公園地は舊と八幡樣の境内で、東京名所の一つに數へられて居たのであるが、不動堂が建築されて、千三十八坪五合を境内に圍ひこみ、間口七間に奥行八間の大伽藍を作り、繁昌を此處に集めて八幡樣は寂々寞々の光景であるは氣の毒だ。不動門前の休憩茶屋は西側に山崎、安達屋、清水、松葉屋、大成田の五軒あり。東側は賣卜者を隣りにして上總屋といふのがあり、其他に一鶴、鈴木の兩家あつて毎戸に、信心講、中王講、劍大講、御膳講、末廣講などの各講中から贈つた手拭幡、または成田山、何々講と文字を現はした長提灯を吊し、殊に一月の三ケ日は競ふて店頭を飾り各講中を待つ。毎月にても一日、十五日、廿八日は緣日にて參詣者多く、朝早くより夜遲くまで賑ふのである。近頃は街路取締の嚴重になつて、彼の緣日に小屋掛をして興行した、猿芝居、玉乘り、劍舞、曲馬、のぞき機關、操人形、人體解剖、西洋手品、不具者等の觀世物が、矢鱈に出ることが出來なくなつたので、是等のものは競ふて興行をする處から一層賑ふことになつた。それに連れて此處の名物と稱する『つくばねおみくじ辻うら』と紙札をつけし菓子の辻占も、亦た餘澤を蒙つて非常の繁昌をする。此辻占は突羽根の如く細き割竹に挾み、尖頭に厚紙て圓く切拔いた勳章を下げ、割竹の中ほどに紅糸で、風車、花笠、鶴、手鞠、信玄袋、成田山の長提灯などの玩具を括りつけ賣るのであるが、緣日一日の商ひ高は三十圓以上五十圓からあると云ふ事だ。

斯く賑ふので、深川不動の緣日には、淺草公園を稼ぎ場所として居る掏摸までが、深川へ押懸けるさうで、

掏摸の府下第一の仕事場は當日であると云ふ事である。故に是れを取締る向の人々は、鵜の目鷹の目で網を張る如く見ゆれど、犯人の捕縛されるもの極めて少ないは不思議と云はねばならぬ。餘り素ッ破抜き過ぎる恐れはあるが。當時其職を止めてある所に眞面目に商業をしてゐる某は曰く、

『掏摸を捕へるには、掏摸を手先に使はなけりやア旨く往くものでねえさ。――ハヽヽ只た掏摸を手先に使ふと云つても分るまい、それは彼奴等の仲間で相應に顔の賣れてゐる奴を、引つ捕へてね、今日は一日種出しをして御用を勸めろと吩咐るのだ。奴も迷惑ではあるが否やだと云ふと、直ぐ自分の身の上だ、ねえー。――そこで仕方なしに一所に供をして種ざしをするのさ。ナニ、種ざしかね、ハヽヽ、素人には困るな。種ざしと云ふはね、仲間の奴が仕事をする處を、旦那いま奴が遣りましたと知らせるのだよ、處がね、彼奴だッて中々自分の身が大切だから、容易で仲間を罪に落すやうなことは爲ないさ。下手な種ざしでもしたら、仲間の者から御用を肩に被て、仲間交際を知らねえと翌日脂肪をとられて袋叩きにされるのだ。……何うして掏摸狩などが旨く出來るものか、それにね……ハヽヽ、ハヽヽ、ハヽヽ。』

と云つて、跡は言はなかつたが、其間の消息は稍推測することか出來やうと思ふ。

八幡の祭典は例年八月十四日十五日で、此日も中々に賑ふ。又五月三十日と六月一日には『お富士様』といつて境内にある淺間神社へ參詣するもの多く、三十日の夜は中々の賑ひである、而して此處でも彼の麥稈で作る蛇を賣る。又十一月の酉の市は『酉の市』とて、境内大鳥神社に市を開き、熊手頭竿など賣る商人聲を嗄らして商ふ。十二月の十四日十五日は府下歳の市の魁で、この境内に開くを瀬踏みの市とも云つて、相應に人も出るのだ。總て是等の不動の縁日と同じく賑ひ、商人どもが潤ふのである。

園内の愛嬌もの

永代寺大師堂の前、賣卜先生のお隣りに、九尺の喜連格子に鰐口の綱をまとひ、柔和忍辱のお姿を現はし給ふが『取持地藏尊』である。由來地藏さまには種々の名を勝手に負せ、勝手な願ひを立てるものがあるが、此地藏さまは、其名に負ひ給へる如く、殊に縁談の取持をなさると云ふので、コツ／＼とお參りをするものが多い。

其參詣者が面白い、一寸考へると明治式に化さない連中が多からうと思ひきや、明治式、中々のカラ式で、天に在す父よと黄色な聲を出しさうなお轉婆姫様が、最も多く參詣すると云ふは頗ぶる奇觀であるまいか。それに亞ぐに水商業――即ち客扱ひを專らとするもの――が多きは、然かある可き理由は存して居るさ。純粹の素人側で參詣りを熱心にするは、多く年增で、而かも二の町三の町の御連中だから、地藏さまも之れには頗ぶる同情を表せらるゝであらう。

公園の汚點

濫茶一杯に愛嬌を振蒔く腰掛茶屋、または甘酒、夏ならば氷店、それに類似した營業の中には只利慾といふ事にのみ目が眩み、お囮を置いて客を引附ける。これは此の公園に限つた事ではなく、何れの土地、何れの場所にもあるから、殊更に此處に在るものばかりを咎め立てするは、少しく酷だと云ふかも知らぬが、苟且にも公園として、富岡の八幡境內として、不動尊の地內として、何れの點からでも淸淨の地でなけねばならぬ處で、靈場を濁して居るのは歎しい事ではあるまいか。

彼の營業者が殘らず皆それであるとは無論言へない。中には眞面目に稼業をして居るもある。けれども其多くは只利慾といふ惡魔に魅せられ、知らず識らず惡弊を助長し、今では殆んど消毒の施し方が無いまでにバチルスが蔓延した。その原因に就ては種々の情實に絡まれて、此處に至たのであらうが、歸せるところは取締の緩慢に流れた結果と云はねばならぬ。取締の緩慢になるには底には底もあれば蓋もあつて、兎角鼻の下の突支棒にかはれる飴ン棒が、だら〳〵と流れて口の中へ甘い汁が這入ると、阿片の中毒者の如く總ての自由を失ひ、眼は節穴の如く執行力は打返し綿の如く、何等の効力をも奏せざるに至るのである。

扨て彼等が何う云ふ風に、汚點を着けてゐるかと研究して見ると、未だ淺草のそれの如く露骨に墮落の程度を示して居ないが、墮落を秘密の中に包みこそ〳〵と遣つてゐる、其罪惡は淺草のそれよりも深いと思ふ。お囮を置いて客を引く處は、お囮その者をして直ちに利を貪るのではなく、これを一の看板、媒介物、誘引者として間接に利を占める仕組が、深川の一名物となつて居る。其癖お囮なるものに餘り美的なのはないが、殊更に淡泊の中に一種の魔力を具へ、デク〳〵肥太身體も美化させて見せる妙術がある。其魔力妙術とは如

何、要するに淫心を挑發させるのである、而して捕虜になつた人物を魔窟へ輸送し、魔窟より一人につき二割——收入額は一圓より二圓迄——のコンミッションを取る、之れを割戾しと云ふのだ。又客のことを荷物あるひは亡者と呼び、一個二個と數へられる、何と好い面の皮ぢやないか。

それ等の事は他場所に於ても、決して珍らしい事實でないが、此處に限つて尤も世人を驚かすに足るものがある。それが何であるか、昔湯島にあつたと云ふ孌童に均しいものがあるのだ、とばかりでは甚だ要領を得ないから、今時そんな馬鹿氣た事がと一語の下に排斥されるであらうが、それが實際に於て只だの一軒あるは不思議ぢや無いか。しかも此の一種の魔窟は明治廿八九年の頃より出來、今日まで猶繼續されて居るのである。之れが手引をするものは、矢張彼の水茶屋、甘酒屋、氷店などの或者が誘引者だ。處で、その魔窟なるものは何樣なところにあるか、何れ公園の附近なるは云ふまでもなからうと思ひや、附近には相違ないけれども、公園からは少しく離れた冬木の穴の如きところに、『鍼治按腹』の行燈を掲げた一寸體裁のよい家である。所謂孌童なるものは三人あつて、二十五六歳から十九歳までだと、或るものより聞いたが、實際の研究はしないから、彼等の年齡は確かでない。併し冬木の某所にこの魔窟があつて、孌童が居ることだけは確かである、而してそれ等は表向きの稼業は按摩で、ある時は實際に按摩もするさうだが、服裝態度からして普通の按摩と違つてゐるは勿論、而して盲目でなく美貌である。さて是等の處へ入込む女客は如何なる種類か、何れも年を取つた女、而して淺草の新造などが不動樣へお參りに來て、挿し茶屋——客を紹介する茶屋、公園外にあつて公園内のそれと氣脈を通じ、客を引くもの——の紹介を得て出懸けるが最も多く。それに亞ぐは商家の後家などで、其他の種類で出懸けるものも偶にはあるけれど、極めて寥々である。彼の割戾なるものも二割以上三割が例で、若し一度魔窟に足を入れたものが、二度目に無紹介で出懸けても、之れに對する割戾は矢張前に紹介した家へ行く、であるから紹介者は爲めに中々の利を占めて居るのだ、其家その方法の如きも聞き得ないではないが、其處まで露骨に書くは甚だ面白からぬ、餘り機微に渡り過ぎては罪惡を犯す媒介となる恐があるから、態と其邊は朧にして置くのである。

夏の夜の秘密

いつとなく出る癖のつく納涼かなて、夏の夕暮よりは誰れもぶら〳〵と外出するもの、况して公園などは散歩するによく、殊に池ありて涼風袂を拂ふ此公園、蚊は名物だけあつて、油斷をすると直ぐチクリ、生血を吸はれる恐れはあれど、それも馴れては格別の苦ともならず、團扇片手に彼方にぶらり此方にぶらり、納涼の人の影、日の暮るゝ頃より次第に多くなる。それを目的に浮世の苦しみを脊負、慾と二人連れて稼ぎに出るが、例の甘酒屋、氷屋である。公園の内に住みて商業するものも、亦た此の納涼客を引寄せんと、店の裝飾を涼しさうに仕立てゝ待つ。

斯くばかりては、只だ正當に客を待つの外何等の野心もなく、何等の秘密もない筈であるが、總て物には表裏のあるもので、掌中に摑むものが手背へは見え透ぬ如く、其何等の種仕掛もないらしい、平々凡々たる甘酒屋、或ひは氷屋――店持ても露店商でも――それと似類の商業人が、夏の夜の秘密を多く持つて居るのだ。秘密と云つた處て、國家を轉覆させやうの、大臣を暗殺しやうのと云ふ怖ろしいのではなく、小さい利慾に目が眩れて、一夜に一圓か二圓のアブク錢を握らうと云ふ迄てある。けれども利慾は小さいが害毒を流すことは、中々小さいと云つて默過しては居られない。イデ秘密の黑幕を切落してくれうよ。

彼等の多くは實に洲崎遊廓、しかも暴利店と稱する惡風のある貸座敷の客引である。また賣淫婦の客引である、媒介者である。それが如何なる手段で客を引くか、如何なる方法に依つて水を向けるかと云へば、何れも遊廓の噂または賣淫婦の話などで口を切り、徐々とアブク錢を儲ける手段を講じ、客が意あると見て取ると、切符をくれるのだ。其切符は一人一枚の通用て、表てに金高を記してある、金高は大抵一圓以下で、七八十錢といふ處が尤も多い。殊に露店を張る商人などては、其客種が到底一圓以上の金を浪費するは、境遇に於て能はざるからである。一戸を構へて商業する店には、自然客種も露店とは異なるから、其切符もまた金高の一圓五十錢位のがあると云ふ事である。處で、此切符は金と引替に渡すのでなく、いよ〳〵此客は出懸けるなと認めがつくと、無代價で遣るのである。素より自分とても貸座敷より引札として、且つ客を引く手段として、配布して來て居るのだから、幾干くれても資本の切れる憂ひはないが、切符面の金高の

一割五分が手數料として、彼等の利德となるので、假に七十錢の切符で其客が妓樓へ登るとすると、切符を與へた彼等は十錢五厘の利益がある譯だから、切符は假令一枚でも有價物で決して反古でない。故に誰れにてもォイそれとは與れるものでなく。而して此引札切符は十枚について七八枚までは登樓するが例で、二割から三割は先づ屑となるのだ、そこで此手數料は何うして取るかと云ふに、切符には何れも與へたものゝ認印があるから、其認印に依つて每月十六日と三日に貸座敷より貰ひ受けるのであるさうな。

又白鬼の許へ身を投ずるには、簡單なるものであつて、其商人の名を云ひ、其指示する家に至ればそれで好いのだ。之れは客一個についての手數料が二錢で、前夜客を送りつけて置くと、翌夜になつて屹度手數料を先方から屆けて來るのだ。

こんな事になると、殆んと取締が無いやうな感じがする。無いのではあるまい、眼が屆かないのかと思ふと、全く左樣ばかりでも無いらしい、何れにしても此取締に就ては甚だ疑問に屬する。今年も既に時節が來た、何うか飴ン棒の甘さに失せざるやうに、高飛車の注意を、先づある者に向つてして貰ひたいものである。(完)

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以内葉書に限る▲締切は每月十八日

▲催促掛　館内　濁水生

三宅青軒大人が博文館に居た頃は、原稿押賣の防禦掛を勤めて有たそふだが、此頃讀賣新聞の大島寶水は專ら露伴先生の「天うつ浪」の原稿催促掛をやつてるそふだ

▲ストライキとペスト　神田　田舍ペイ

露國ではストライキが有るて、こちらでは笑てるが、併し戰勝國の首府、大日本帝國の帝都たる東京はペストが流行て居ますよ、深川あたりの場末なら兎も角、東京子の東京子を以て自任してる神田子の住んでる神田區迄ペスト軍に侵入された樣は一躰どうしたんです、露軍に勝てもペストに負けては駄目だ、おいしつかり御賴み申しますよ東京子、神田子の諸君

▲大問題　本郷　研究家

下宿の女中は何れも〳〵造化の神が奇巧を弄して特別念入り別誂に造り上げたの許りだ、そこで如斯方々に御膳を持て來られると、さらでも不味い下宿の飯は猶一層不味く食はれるから時々外で召上がる、從て金が入る、即ち女中の醜いのは學生の費用增加、父兄の大苦痛と云ふ大問題に至るのだ

▲好き嫌ひ　　豐多摩郡　質問生

女の性質の執念深い所や陰險な所は、よく蛇や猫に似てるが彼等は猫は非常に愛して蛇は頗る嫌ひ恐れて居る、之はまさか蛇にはお足がないから嫌やだと云ふ譯でもなからふが、にやんとした譯だらふ

▲金滿家の煩悶　　三北生

金滿家を氣樂なりと思ふは誤なり彼徒は如何にして水火盜難を避け得べきかにき絕へず煩悶しつゝある也

▲葬式と軍隊の御通り　　牛込　多忙生

警視廳が提灯行列に制裁を加へて、通行者の妨げとならぬやうにしたのは其當を得たものと感服するが、而も提灯行列は年が年中あるべきものでないから左程にも思はぬが、彼の葬式の行列が一町二町とのべつに續いて歩いたり、軍隊が四五町が間すきまなく列を作つて通るのには、我々要務を帶びたものには非常の迷惑となる、それかと云つて恭しく並んだ葬儀の列を横切るのも人の情として心持がよくない、馬や車を引いた軍隊の列を横切らうと思はゞ甚だしく危險である、其筋の人はよろしく之にも何か制裁を加へられたい

▲バルフアーシヨップと通俗育英會　　本鄕　穿鑿先生

二つとも本鄕村にあるものです。理髮店の看板にヒーとエフとを間違へたので外國人に笑ひの種を與へ、通俗といふ文字を冠せたので最も珍無類の會名が出來上つたのです。こういふ嶄新な方々ばかりあるから、同じ本鄕に居る僕までが肩身が廣い譯ですよ。



我が迷信觀

西山筑濱

(五) 迷信と情熱

情熱は宗教の一大要素なり、宗教にして情熱なきの宗教はなく、情熱にして宗教に伴はざるの情熱はあらじ。情熱は信仰の裡にあり。情熱ありて信仰始めて活力あり、生命あり。

誰れか舊約書中の約百記を讀んで、彼のヨブが天に訴へ地に哭し、わが日を詛ひ身を悶へ、エホバにすがりて救濟を祈る、其の秋霜烈日もたゞならぬ熱切なる情の聲を聞いて憮然として心をのゝき、情熱せざるものあらむや。彼の當時飛ぶ鳥も落ちむばかりの權威を振ひし羅馬法王レオ十世の『イキザルヂ、ドミネ』の宣告書を執つて、エルブ河畔のイルスチル門外の曠野に於て、群がる觀衆の面前にこれを燒棄したりしてふルーテル、誰れか其の信念の堅確にして、其の情の熾烈なるに驚かざらんや。火焰の上騰すると共に、身は一沫の烟となるをも厭はて、其の說を動かざりしといふブルノー、誰れか其の精神の確固不拔にして、其の自

己信念の强烈なるを敬せざらんや。豈に啻に彼等のみならんや。彼の瑞西宗教改革家の随一と呼ばれたるズウイングリの如き、若くば佛のカルヴインの如き、英に入りてはジョンノックスを初め、身はこれ信仰の權化と呼ばれたる淸敎徒の如き、いづれかこれ此の種の宗教的、獻身的情熱に驅使せられたらものにあらざるべき。昔よりして世界の大なる戰爭の多くは、殆んど其の因を此の宗教的情熱に發せられざるはあらず。遠くはサラセン人の歐洲侵來といひ、十字軍の聖墓回復運動といひ、下つては彼の宗教の改革時代に於ける歐洲諸國の諸戰亂より、延いては三十年戰爭の慘禍に到るまで、悉く皆其の因をこゝに有せずんばあらざる也。知るべし、宗教が如何に人を熱せしめ。如何に社會を狂せしむるかを。然り。而して宗教は殊に迷信の徒をして、其の情熱し、其の心狂せしむるが如し。

何故にそれ能く然るかは前にもいへりし如く、迷信は智情意の三作用を兼備したる單なる意味に於ての信仰と異なり、おのが悲しき、嬉しき若くは恐ろし等の情に驅られつ、直ちに『信』の對象をこゝに見出し、以て之れに歸依し、これに隨奪せんとするものなれば也。而して此等の悲しき、嬉しき、若くば恐ろし等の感触は、人間の情念中に於ても殊に熱し易く、殊に狂奔し易ければなり。それ智と識とは人間に分別心を與ふれども、情は即ち然らず。殊に智なきの情に到つては、物に熱し、事に狂ひ易きを免かれず。而して彼の世の多くの迷信者は、智より來る分別の聲に聞かずして、常に熱し易き情の聲に聞けり、此の故に彼等の信や熾烈、其の情や熱切ならざるを得ざる也。

蓋し情熱は、人をして乾燥枯淡ならしめざるもの、平凡無事なるを得ざらしむるもの、人をして常に色味あり、趣味あり、意味あらしむるものの也。此の故に詩にして情熱なきの詩はあらず。宗教にして情熱なきの宗教はあらず。若し宗教にして情熱なく、詩にして情熱なからむか、そは決して生命あり、活力あり、意味あるものといふを得ざる也。何となれば、情熱は頂點の裡にあり、すべての感情の底にあり、而してすべてのものに意味づけ、すべてのものに價値づけ、すべてのものに生命あらしむるものなれば也。蓋し情熱は冷淡の反對なり。冷淡は人を平凡化すれども、情熱は時に人をして平地に波瀾を起さしめ、青天に霹靂を生ぜしめんとするもの也。殊に智なく識足らぬ迷信者流の情熱に到つては、其の度や熾烈。其の性や狂妄、殆んど疾風に枯草を燒くの趣を呈するもの多し。從つて彼等は往々にして危險の前に貴重なる自己の身命を賭して顧みざるを、また敢てめづらしからざる也。

彼の幾百万の人命と、幾億万の財貨とを犧牲として、幾十年の久しき飢寒と戰ひ、窮乏と戰ひ、强敵と戰ひ、あらゆる辛酸苦痛と戰ひたる十字軍、嗚呼これ果して何の爲めに熱りしとするぞ。救主の靈地たる一箇のゼルサレムの回復ゆゑといはゞ、誰れかまた其の狂妄に驚かざらむや。靈地といへばこそ如何にも有り難きやうなれど、救主既に昇天して無く、殘るは一箇の墳墓のみならずや、而も人間の迷信は、其の墳墓に向ッて隨喜し、其の墳墓の爲めに身命を賭して辭せざらむとす、狂もまた甚だしからずや、蓋し信の極は人をして熱せしめ、人をして狂せしめずんば止まざる也。これ豈に詩人畫士の取つて研究すべき好個の題目ならずとせんや。

（六）迷信と詩歌

美の宮殿は常に幾重の迷雲に包まれつゝあり。彼の雲霧が土地の風景を美ならしむると均しく、迷雲あるが故に美の宮殿は今尚ほ神秘にして今尚ほ淸新也。雲霧去るの日は、風景の美は其の多くが霧散するなるべ

く、迷雲霽き去らるゝの日は、美の宮殿またなきの日を期せざるべからず。從つて此の美の宮殿に伺候するを以て此上(こよ)なき娯樂(たのしみ)となすなる詩人なる者も、恐らくその跡を見るなきに到らむ乎。

近世科學的精神の發達は、美術家に取りては必須の能力たる想像力を打破するものにあらずやと氣遣うものあり。然れども此の天地は終古依然として淸新なるが如く、此の宇宙には到底科學的法則、數學的原理の得て容易に立證し能はざる多くの神秘を宿せり。彼の無限といひ、永劫といふ語の如何に神秘なるをよ。自然といひ、神といふ中にいかに大なる哲學のこもり居るをよ。然り、此の神秘の玄境、此の哲學の奥所こそ獨り詩歌が關係する所のものにして、所謂が想像の力に依らずんば、吾人は遂に失望せざるを得ざるべし。何となれば、神秘は決して既知の法則の上に立たず。不可知的玄境の上にのみ立せらるればなり。而して此は想像のみ獨りその力を恣にし得る所なれば也。

既に神秘の玄境あり、また已に想像の自由ありとせば、勢ひ一種の迷信の此の間に醞釀し來るは又止むを得ざるべし。何となれば、神秘の玄境は深く、想像の世界は大なれば也。而して迷信譚說は、獨り此の間の所産兒なれば也。今に於て幽靈惡鬼を信ず。それ或は愚ならむ。然れども。翻つて此の大千世界の森羅万象に對する時、吾人は幽靈惡鬼のそれよりもより恐るべき多くの者に接し、幽冥他界の觀念よりもより玄妙なる不可知の觀念を捕捉し得るにあらずや。然り、人間の心の奥の奥を叩けば神秘不可知の迷雲晴れやるの時あらざる也。爰に於てか幾多の想像は生み出され、幾多の迷信譚說は構成せられ、而して詩的一種の宗教はこゝに大なる聲となりて謳はるゝに至る也。これ豈迷信が詩的感想の一大要素となる所以にあらずとせむや。

世に迷信なくんば詩なしと喝破したるゲーテ、われ實にその洞察力の鋭きを悦ぶ。人若し詩が想像の産物なるを知らば、誰れかまた迷信が詩の一大領分なるを信ぜざらむや。何となれば、迷信は想像の産物にして、想像はまた迷信の保育者なれば也。勿論想像其の者は迷信ならず。然れども、迷信をして迷信に到らしむるものは想像の力なり。想像は眞實あらざるものをあるらしく揣想するにして、實はそを事實とするの情感伴はざるもの也。されど、迷信はこれに伴ふに一種の感情を以てす。爰に於てか想像は單に假象物に止まらずして、熱あり、情あり、力ある一個の實在として詩の世界に實現し來る也。然り、想像迷信を生み、迷信想像を實にす。斯くの如きは、われ實に最好人類の詩的狀態に於て尤もよくこれを見る。

想ふに原始人は、一種の詩人なりき。始んど詩人としての至粹なるものなりき。彼等の自然觀及び其の人生觀は、今時の詩人と雖もまた容易に及び能はざるほど雄大なる揣想と、美妙なる感懐とをもて謳はれたりし也。彼等は天の理を知らず、地の則(のり)を知らず。唯だ彼等が能くする所のものは、此の天地萬有は悉く活動するもの、悉く生命あり、活力あり、權威あるものなりとの感想なりしのみ、而も彼等が天成の詩人的揣想は縱横にこれを醇化し、これを詩化して以て一大詩を描き、一大宗教を創り、一大信仰を産み出せる也。看よヘブライの經典の如何に雄大崇高なるをよ。印度の宗教の如何に廣大無邊なるをよ。彼のスカンデナヴイア人種の最初の鬼神談の如何に莊嚴雄偉なるをよ。而してまた希臘の神話の如何に優美典雅の妙趣に富むをよ。彼のゾオス神の天を支配し、風雲を捲抒し、晴雨を配賦して以て此の天地自然の顯象を掌りしと云ふが如き、若くは殷々たる雷鳴も、閃々たる電霆も、將た疾風迅雨も、悉く此の神の使役する所なりとして畏敬崇拜轉た到らざる所なかりしが如き、何等の詩的揣想ぞや。若し夫れ女神エラの優美典雅なる姿容を想像

しては、斯神の暖かき恩光に浴するを以て此上なき娛樂（たのしみ）、此上なき榮えと信ぜしが如き、嗚呼これ何等美はしき詩中の詩ぞや。然り、これ實に彼等の詩なりし也。詩にしてまた實に彼等の宗教なりし也。よしや智識の眼よりは、靈信迷說とさげすまるゝともやあらむ。されど彼等は天地の開けし時より、此の幾久しき間これに依つて活き、これに據つて安んじて此の天地に立てりし也、之れ豈に敬してまた驚くべきの現象ならずとせむや。

蓋し詩は想像を以て唯一の要素、少なくとも其重もなる要素となす。此の故に文學詩歌の世界には、生なきものにも生ありとし、力なきものにも力ありとし、天にも地にも、星にも月にも、將た咲く花にも、情あり淚あり、靈あり心あるかの如くに擬想するは敢て關する所にあらざる也。否な啻に擬想するのみならず、時にはこれを信じ、これを拜するもまた敢て拘する所にあらざる也。然り、此の故に彼等詩人の眼には、此の天地万有は時に悉く活けるものとして見らるゝ也。活ける者たり、此の故に自然に崇拜の情もわき返り來る也。これ詩的太古の民が自然宗を奉ぜしが如く、今時の詩人と呼ばるゝ情熱の士が、均しなみに『自然』の前に拜跪し、『自然』の前に渴仰隨喜して措く能はざる以所にあらずや

夫れ幽靈は人の疑ふ所、惡鬼は人の怪しむ所、而も詩人の詩的胸臆よりは、かゝる觀念、かゝる詩想は少時も逸脫せしむるを許さゝる也。否な、彼はむしろ此の觀念の上に立ち、此の觀念、此の詩想を糧（かて）とし活くべき也。何となれば、詩の世界は想像の世界なればなり。想像の世界は廣大無邊なる自由の世界なればなり。況んや此の宇宙には、思議すべからざる妙理妙想の常に神秘の雲に包まれつゝあるなるに於てをや。また況んや、人間の心の奧には、知慮し難き一種の迷雲の絕えず蟠りつゝあるなるに於てをや。それ然り、爰に於てか天才の士、一たび此の神秘不可知の玄境に觸れ來つて、之れを衆生の前に示現せしむるあらむか、今まで議論と疑念とを以て之れを否拒せしものと雖も、遂に慴然として恐れ、且つ信ぜざるを得ざるに到る、蓋し詩の妙趣こゝにあると均しく、人生の歸趣また實にこゝに存せずんばあらざる也。此の故に英の盲詩人は『失樂園（パラダイス、ロースト）』を歌ふて、而も大にこれに成功せり。伊太利の詩聖は其の『ヂバイン、コメヂー』の雄篇に不死不朽の名を印せり。ゲーテは『フォウスト』の悲曲に末代不滅の碑名を刻めり。而して詩聖沙翁が悲劇の數多き傑作は、殆んど此の幽靈惡鬼の觀念あらざるはなく、而も其のすべてが悉く變幻縱橫の性を具へて飛躍し、活動し、はた跳梁しつゝ、人をしてそを眞なりと信ぜざらむと欲するも能はざるほど眞摯と莊嚴の致を極めつる也。これ一は作者の手腕と、其の情操の非凡に依るなるべしと雖も、多くは事の神秘幽玄に繫がるが故ならずとせむや。世に神秘なくんば詩なく、迷信なくんば詩趣あらじと洞破したるゲーテ、アグネル、シエリングの徒、われ實に其の妙（たえ）なる觀察に服せずんばあらざる也。

之れを要するに、迷信は詩の領分なり。神話の領域也。而してその領分の專有者たる詩人なるものゝこれに對し、これに歸依するの情に到つてはまた決して假空なるを容さゞる也。彼は或る意味に於て此宗の熱誠なる信者ならざるべからず。何となれば、彼は唯だ觀るのみにあらずして感ぜざるべからざればなり。歌ふのみにあらずして均しく泣かざるべからざればなり。想ふのみにあらずして又時にそを實にせざるべからざれば也。われは敢て迷信といふ。されどこゝに所謂迷信とは、彼の世の愚夫愚婦一輩の妄信する如き無智の行動をのみいふにあらざる也。唯だ詩人が其の自由なる想像の力を逞うして此の天地万有に對する時、自からに自己の感想を宿してこれを生物視し、之れを神性視してこれに崇奉し。これに拜跪するをいふ也。換言すれば、想像の產物を想像の產物と

せずして、之れを現實化せんとする感情の强度をいふ也。想ふにかゝる行動は、吾人が曾て純朴なる太古の民に於て見し所。而してわれはむしろかゝる行動を愛し、且つこれを信ぜんと欲するもの也。何となれば、これ實に詩的行動に遡ければなり。而して之れ正に詩人の到るべき至當の經過點なれば也。（完）

新刊批評

▲金帆

尾上柴舟著
本鄕書院發行

尾上柴舟氏の新體詩集なり。而して其三分の一はハイネ、シルレル、クゥパー等の譯にかゝる柴舟氏の詩風優佳にして溫藉、氣取らず、驕らず、平易の中に詩情を寓する所頗る珍とするに足る。低唱二十五篇中の

君を見そめし湖岸の
葦の一葉をそと切りて
捲きてし吹けば我笛の
しらべは高うなりにけり

ひとけ今宵もとくひとけ
夕月青き森にまで
森の中なる城にまで
城の窓なる君にまで

の如き最もよく彼の特調を見るべし。其他「村」「アマリア」等の篇亦吟誦すべし。（定價四十錢）

▲開國史談

渡邊修二郎編註
内外出版協會發行

馬場某なる人が嘉永六年より元治元年に至る十二年間のことを記せる見聞錄を渡邊修二郎氏が編註したるものなり。著者は時勢を大觀し得るの識見家にあらず、事實を網羅し得るの史料先生にあらず、只己れの見聞したる事實を記述したる誠の見聞錄にして書名いさゝかふさはしからざるを覺ゆ。されど又間々市井の些事却てよく時勢の機微をあらしはしたりと思はるゝふしなきにしもあらず。文章は格正しからず、句安ならずして、讀んて面白からず、されど近々サー、アーネスト、サトー氏の英譯も發行せらるゝ由なれば英文を學ばんとする人は併せ讀みて益する所多かるべし。（定價三十錢）

▲王子羅世剌斯傳

芝野六助譯
大日本圖書株式會社發行

我國の學生界に知れ亘りたるドクトル、ジョンソンのラセラス傳を譯したるものなり。ラセラス傳はジョンソン落魄のとき母の葬式に列する旅費を得んがため僅かに一週日にして書き下せるものなれども、流石に名家の筆たるに恥ぢず、自らの不平を洩らしながらも詩情處々にあらはれて一度之を開けば卷を措くに忍びざるの書なり、然るに本書は三度び改譯せりと稱し、上田文學士の校訂を經たりとあるに拘らず、譯文餘りに漢語多くして詰屈の弊を脫する能はず、之を讀むも快感を起さしむる能はざるは一大缺點と謂ふべし。殊に書名の如きも何が故に「ラセラス傳」となさず、殊更に「羅世剌斯傳」など六つかしき字を用ゐたるかを怪む。然れども英文を讀み能はざるものにとつては一讀するの價値なしとせず。（定價四十錢）

▲世界之帝王

太陽臨時增刊
博文館發行

博文館創業十八週年の紀念として出版したるものなり。我大日本帝國

の皇室を初めとし世界各國の帝王大統領等の人物、性行、家庭等を記述せるものなり。批評的觀察に乏しきを以て興味比較的に薄しと雖も、單に事實を知らんとするものゝ爲めには參考となること多し。(定價三十錢)

▲御小間使朝顏孃の書簡

野口米二郎著
富山房發行

「日本少女の米國日記」によりて有名となりし朝顏孃の後日譚なり、孃がいよ／＼さる家の御小間使となりての所感を松葉孃に書き送れる書簡體にてあらはせるものなり、本書には前者に見るが如き詩情乏しと雖も寧ろ實際的の觀察に鋭利なるものあり、一讀して文學的興味を得んとするものにとりては前者程の面白味なきも彼國の實情を知らんとするものにとりてはなか／＼に益多かるべし。(定價七十錢)

▲シルレル紀念號

帝國文學會

四百頁の大册、釘裝の嫌味なきハイカラなのが特に氣に入つた、其內容はシルレルの少年時代からその終焉迄の生涯、戲曲の評論等が凡そ二千名の學士博士の手によつて書かれたもので、シルレルを研究するには最も適當な書で、且つは偉人を紀念するに最も適當なものといふべしてある

此うち登張竹風氏の『シルレルの少年及青年時代』、と藤代禎輔氏の『戲曲家としてのシルレル』とが最も面白く讀まれた、竹風氏のは小說風に書かれたものであるが、まだ小說としては少し精細を缺ぐ處がある、勿論傳記としてならば之れで可いが、小說風に筆をつけた以上は、全然小說的にして貰ひたかつた。

此紀念號のうちで最も目に立つて遺憾に思つたのは、その色刷にしてある序文である、誰の筆か知らぬが、徹頭徹尾實に無茶苦茶極まる文章で、一句として完全なものはないと云つても差支ない位、書いたものも書いたり、載せたものも思ひ切つて載せたり、帝國文學の威信に關すること夥しい。

併し其他には殆んど缺點がないと云つて可い、吾人は最も面白く最も有益なる書として之を江湖に薦むるに躊躇せぬ(定價四十五錢)



ホトトギス

七月一日を以てホトヽギスの臨時增刊を發刊す。其要目左の如し。

▲表紙　中村不折畫

▲口繪　雷神　淺井默語畫

▲口繪

寫眞版　巴里土產　貳拾四枚

中村不折の巴里より携歸りたる古今大家の繪畫、彫刻及不折の作品を精巧なる寫眞版に取りたる者にして其の品目の主なる者は。

○オーギュスト、ロダン筆（デッサン）。曾て本誌上に於て不折の「ロダン先生を訪ふ」の文章を讀みたる者は直ちに其何物たるかを悟了さるべし。

○フェリオールの景色畫「雨の前」（油畫）。氏は自然派にしてサロンにて銀賞を得たる人。

○エドモンド、ジュラーク筆「雪中の貧兒」（水彩畫）。青年裝飾畫家として有名なり。此畫は氏の餞別として不折に送りたる者也。

○アルベルト、メーニャン筆「羊神の音樂」（油畫）。學士會員正員、勳二等、サロンの名譽緩賞を得たる人にて理想派也

○ジャンポール、ローランス筆「將軍マルソーの死」の草稿（ペン畫）。不折氏の就て學びたる師、學士會員正員、勳二等、前のサロン總裁。ローマンチック及理想派として第一流の大家也。

○同氏筆「地神の使、無法の君を苛責する處」（水彩畫）氏の餞別として不折に與へたる者。

○ベナール筆「娘の氷滑り」（パステル畫）。學士會院正員、勳三等。外光派。

○アントリック筆「海濱の小兒」（油畫）。サロンに銀賞を得たる人。子供專門の大家也。

○ムッシャ筆「背中」（デッサン）。邦人もよく知れる裝飾畫家。

○彫刻家某筆「入口の左右の壁に嵌入する人物の考案」（鉛筆畫）。

○和蘭の景色畫、筆者不明（油畫）。

○佛蘭西の景色畫、筆者不明（油畫）。一八世紀の作品。

○希臘彫刻タナグラ三個。紀元前三世紀の作品。不折が佛蘭西の友人より送られたる者にして、昔は死者の友として墓中に埋めたるを地中海沿岸のスミルナにて堀出したるなり。

○ジャンポー、ローランス肖像及同氏書簡。肖像は不折の筆。

○チシャンの畫。十七世紀の彫版の大家ストランジの鋼版。

○不折のデッサン二點。油畫三點。エスキース一點。

○不折模寫コローの油畫二點。同ドービニー油畫一點。二氏共に自然派の大家也。

▲右繪畫、彫刻の說明、批評　中村不折

▲吾輩は猫である（五）　夏目漱石

▲スラブとラスタム　アーノルド原作　皆川眞柝譯

▲正岡子規と秋山參謀

東鄕大將の下に參謀として殊に著名なる秋山中佐は子規子と同鄕同窓の友にして、共に一ツ橋の大學豫備校に學びたる時同級中七人の豪傑を選び互に其人物性行を敍寫論評したるもの獺祭書屋の反古中より見出されたるを拔萃して揭ぐ。

▲鳴雪、四方太、碧梧桐、虛子等の寫生文、俳句、俳話、俳論等。

▲五葉、朱冠の裏畫、挿畫等。

定價參拾錢。郵稅貳錢。

發行所　東京市麴町區富士見町四ノ八　俳書堂

夏期講習會規則

師範學校、中學校、高等女學校及小學校體操教師並に該科志願者の爲め左の規則に依り夏期講習會を開く入會希望の者は來七月二十五日迄に左式の申込書を本校に送附せらるべし

一　講習期日　來八月一日より同二十一日まで毎日一科一時卅分、午前七時より始む　但日曜日は休業のこと

一　講習科目　兵式體操及敎練　普通體操　瑞典體操　遊戯及舞蹈

一　講習料　一科金壹圓五十錢　二科金貳圓五十錢　三科金參圓五十錢　全科金四圓

一　講師

普通體操
兵式體操及敎練
瑞典體操
遊戯舞蹈

高等師範學校敎師	可兒德
體操學校敎師	高見澤宗藏
同	先名助八郎
陸軍將校（現役士官囑託）	人名未定
陸軍步兵曹長（陸軍士官學校付）	熊谷久左衛門
體操學校敎師	黑澤勇
同	手島儀太郎
華族女學校敎師	小野泉太郎
體操學校敎師	石橋藏五郎
同	山本祐吉

一　講習會場　日本體育會體操學校

一　科外講演　諸大家を聘し講習員に無料にて聽講せしむ

一　講習證書　講習員の希望に依り之を交附す實費金拾五錢を要す

（半紙用紙）

申込書

貴校御開催の夏期講習に加入し何々科講習致度講習料相添え此段申込候也

住所

氏名　㊞

日本體育會體操學校
御中

明治三十八年七月

東京府荏原郡南品川海岸大井村

日本體育會體操學校

（電話新橋　三、三二一）

日本美術

東京下谷發音町四
日本美術院編輯部
電話下谷四百一番

東京堂　東海堂　畫報社　（京都　芸草堂　其他）

投稿規定

▲二十四字詰にて句讀を切り楷書にて認むること
▲締切は毎月十八日最終便まで
▲投稿者諸君は住所本名を記入ありたきこと

中央公論定價表

		郵税共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

●但海外（清國は本邦郵便局所在地を除く）は郵税六錢を要す

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

廣告一手取扱　神田千代田町　博報堂

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を東京駒込局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盗取せらるゝ憂なし
一郵券代用の場合は必ず壹割增のこと
一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす
一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし
一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし
　一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割
　一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

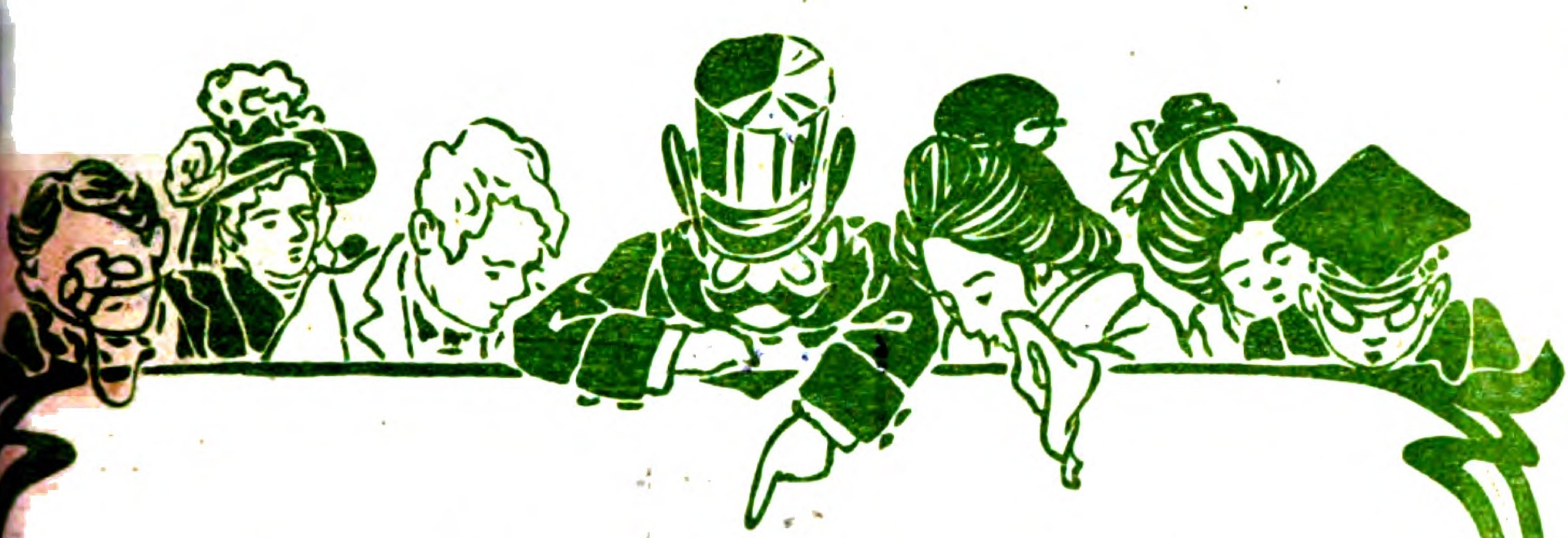
神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
京橋銀座四　東海堂
本郷四丁目　文明堂

明治三十八年六月卅日印刷
明治三十八年七月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地（電話下谷九一九）反省社

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場



中央公論

No. 196

明治十九年創刊
明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
明治三十八年七月一日發行（毎月一回）
東京本郷區駒込西片町十番地
發行所　反省社　（電話下谷九一九）
東京牛込區加賀町一丁目
印刷所　秀英舍第一工場
大賣捌所
神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
京橋銀座四丁目　東海堂
本郷四丁目　文明堂
（定價一部金十二錢）　郵税一錢

前號概目

▲其他金玉の文字數十篇、毎號之を保存し置くに最も妙なり